

「……………え？」

少年は、気が付けば広がっていた赤い光景に息を呑んだ。

目前には、赤まみれで転がる女と一つの人形。  
手元には青銀の刃を赤く染めた、黒い柄の剣。

「……………オレ……………なんで——？」

自分以外は誰もいない部屋で、茫然と呟いた。  
力無く下がる片手に、凶器と思しき剣を携え。

空いた手で胸を強く掴み、金色の髪の子は両膝をつく。

「……………いた、い……………」

まず間違いなく。吐き気を堪えながら事実を直視する。

その平穏な建物の一角を、真っ赤に汚したのは少年であり。  
今もまだ握り締める剣へ、手を染めた赤が伝い続ける。

「何でオレ……………殺して、ない……………？」

少年にとって、ただ不思議だったことは。

足元の女には確実に息があること。それだけだった。

胸を貫かれた女の痛みが——こうして伝わり続ける限りは。

C r y    p e r   B / A R .

—Atlas' regurgitation—

C 2 ・ 序 盤

ある小さな島国が、今では世界地図の中心だった。

島国の名前はジパングと言い、世界で三本指に入る、独特の文化が発達した歴史の濃い国であり。

「まいったのう。まさかこのような事になるとは」

ジパングは京都、その管理中心地たる『花の御所』では。

『公家』という分類の、ジパング文化を代表する管理者が、降つてわいた御所内での流血沙汰に頭を悩ませていた。

「それでさ。その下手人君は、まだ眠つたまんなワケ？」

その御所の一室に眠る、一人の少年の様子を窺いながら。

部屋を仕切る襖の外で、薄青いシルエットの軽装の青年と、直衣と烏帽子を着こなす黒髪の公家が立ち話をしている。

「それが困るのじゃ。予想以上に体力の消耗が激しいようだな」

「ええー？ それ、困るとこ違うんじゃないの、頼也兄ちゃん？」

二か月前より管理者がこの御所に引受け、保護観察中だった、身元且つ正体が不明の——記憶喪失という、人間でない少年。

ようやく観察期間が明けようとした矢先に、その少年は突然、管理者の客人を斬るという前代未聞の問題を起こしていた。

それで管理者は、今目前にいる青年を呼び出していたのだが。

「いくら『悪魔憑き』とはいえ、初対面の、しかも女のヒトを、ぐっさり殺っちゃうのは、イイ度胸だよー」

「言葉には気をつけぬか。そもそも誰も死んでおらぬぞ」

「それも妙な話だよねエ。オレに来る依頼だったら絶対、誰か一人は死ぬんだけどさ？」

見た目は若く中性的な、端正な顔立ちの公家は、この京都では有名な陰陽師の家系であり。実際は呪術を専門とするが、その公家を悪魔祓いという依頼を手を訪ねてきた女がいた。

しかし本来、悪魔など専門外の公家は。悪魔と契約を交した人間の、契約解除と葬送を仕事とする青年——通称『死神』の旧知の仲間に、意見を聞くつもりだったのだ。

「さすがに、こんな人間の御所内でバツサリやっちゃうのは、オレでもちよつと躊躇するけどさ」

管理者として相当、困らないの？ と。死神でも何でもなく、一傍観者として青年は不思議そうにする。

「それはもう、各方面から不審の声は上がっておるがのう」  
斬られた相手が生きていたとはいえ、この風雅な花の御所が、血で汚される事態は早々ある事ではなく。

「そちらも追々対処が必要じゃが、こちらは差し迫っておる。お主でも回復は出来そうにないか？ あの少年は」

「残念だけど、ケガも毒もないんじゃない、こっちの方はお手上げ」  
そうかと公家は、結局ずっと少年の体調に頭を悩ませたまま、

「お主も不調の所、呼び立てして悪かったのう。アラス殿」  
回復の業を得意とする青年を、礼を言つて見送つたのだった。

その部屋に眠る、金色の短い髪で、尖った耳に片方だけ黒い装身具——言葉の同時翻訳機を身に着ける少年は。

時により髪が銀色へ染まり、金色の髪の少年の心に関わらず、容赦なき殺戮者となる事を、早くから公家は気が付いていた。

「最初は確か、御所に魔物が郵送されてきた時じゃったのう」

「……………」

ようやく目を覚まし、布団の上に起き上がった少年に。

公家はその横で鎮座しながら、紫の目を伏せて俯いた少年に、淡々と静かに話しかける。

「お主がここに現れた時の、不審な依童人形の襲撃からこちら……………何やら京都に、不穏な風が吹いている事は否めぬ」

この少年を公家が引受けるキツカケとなった出来事。公家の子供二人を襲った謎の人形の襲来時、通りがかったこの少年は、公家の子供に加勢してくれたのだが、

「お主の行動は一貫しておるように思うが。本当にお主は——『銀色』の時の事を、覚えていないのか？」

「……………」

公家の子供に加勢した時、銀色の髪に変貌していた少年は。

魔物や悪魔などを前にした時——苛烈であるが、何かを守るために、少年が変貌する事がわかった公家は。

体の負担が大きいのか動ける時間は少なくとも、単身で魔を制す『銀色』と比べ、自身の弱小さに悩み公家の信頼する侍に剣を習う金色の髪の少年に、まっすぐにそう尋ねた。

「……………」

少年はひたすら俯いたまま、口を閉ざし。

この御所に連れてこられた当時のように、何処か——

—アンタ……………何者？—

少年を見透すような公家の、青みがかかった黒い目に、怯えるような気配すら垣間見せる。

目を覚ましたものの、少年の体調はまだ万全でないとわかる公家は。困ったように笑って追及をやめ、結論を告げた。

「とはいえ。事が事じゃから、罰は受けてもらうがのう？」

「——当たり前だ」

はっと顔を上げて反応した少年に。

その速さに公家は、少年が何故黙っていたか、それをも悟る。

「お主の保護観察期間は延長じゃ。当面は期限の無いままに、御所で引き続き衛兵見習いをしてもらう」

「……………」

とても不服そうに公家を見つめる紫の目は。

—オレ、ここにはいたくない—

御所に最初に来た頃と同じに——自分を追い出すべきと訴える。

どんな事情があったとしても、公家にいか程迷惑をかけたか、自身の咎を知る澱みを浮かべて。

「それと——」

なので公家は、躊躇う事なく、その厳罰を少年に伝えた。

「いいか？ 今度からこんな当たり前の事、説教させんな！」  
数日後。

金色の髪の少年がいつも、剣の鍛錬を受ける離れの道場に、赤い髪で一見浪人風の侍、剣の師の思い切り良い怒声が響いた。

「一方的な刃傷は禁止！ そもそも御所内での戦闘も不可だ！何かあったらまず報告して、それから行動の判断を仰げ！」

正座させられた少年——黒く袖のない立襟の上衣とは不釣合に見える、紫の袴姿の弟子の後ろで。兄弟子である、夕焼け色の鳥頭で、軽装に崩す和服の少年が不思議そうに師を振り返る。

「それだと、問答無用に襲われた時はどうするんですか？」

「自衛は戦闘に入らない。自分から喧嘩を売るなって事だ」

先日の場合、完全に金色の髪の少年から、刃傷相手の居室まで押し入った形であり、

「……うん。ごめんなさい」

そうしたどう考えても、説教程度の処分では済まないはずの、危険人物たる少年は、

「今度から——御所の外でするように気を付ける」

「全然わかってねえ！ 先に相談しろつつつてんだ！！」

心温まらない遣り取りをかわしながらも。ほぼこれまで通りの生活に戻っていた状態だった。

陽炎の姫。少年が剣を向けた相手は、東の大陸出身という、忍者らしき侍従を一人連れた、うら若き乙女だったのだが。

自分にとりついた悪魔を祓ってほしいと、珍しい依頼と共にこの御所を訪れていたその姫に、

「蒼潤そうじゆんと悠夜両方から確認がとれた。あのお姫さんが連れてた人形の侍従は、アイツらを襲った人形と同じ系統だったよ」

姫と侍従を、偶然客室の近くを通りがかった金色の髪の少年が、一目見た後。少年の髪はその場で銀色に変貌し——

恐ろしい事に真昼間から、その凶行に及んだわけだった。

「やっぱり、ユオンは敵を倒しただけなんですわね」

その勘の良い少年には、初めからそれがわかっていたのだと、侍従の正体が判明する前から硬派な兄弟子は少年を信じていた。

「相手が敵かどうかなんて、いくら勘が良くても、一瞬で全てわかる奴はいない。たとえ敵でも、問答無用で喧嘩を売るな」

先にその侍従を斬り捨て、姫には、普通の人間なら確実に死ぬ胸への一太刀のみで、銀色の髪に変貌した少年は事を終え。

そこで少年も力尽き、赤く染まる部屋で倒れたのだった。

「大体ユーオンも死にそうだったみたいじゃねえか。そこまで無理して一人で戦ってんじゃねえ」

「いてっ」

ごつんと。剣の師は一度だけ、きつい拳骨を弟子に見舞うと、

「お姫さんは順調に回復してるとよ。自分に憑いた悪魔だけを殺してくれた相手に、会ってみたいとき」

心の底から嫌そうにする少年に、にやりと笑ったのだった。

「なあユオン。悪魔だけ殺すってどうやるんだ？」

本日の鍛錬が終わった後で。道場の掃除をしながら、兄弟子で少年の観察者の公家の長男である蒼潤が真面目な顔で尋ねる。

「さあ？ 完全にまぐれなんじゃないかな」

『銀色』の時の事をあまり覚えていないという少年は、まるで他人事のように答える。

「オレにわかるのは——弱そうなことか、雰囲気だけだし」

剣技で全く兄弟子に敵わない少年には。しかし、周囲の現状を感覚で看破する勘の良さ——直観という珍しい特技がある事を、兄弟子も剣の師も気が付いていた。

「それですぐ、あの忍者が人形だってわかったのか？」

「多分。ジュンが言う程、はつきりわかったわけじゃないけど」  
相手が人形で、しかも以前に彼らを襲った者と同系統とまで、その場でわかったわけではなくても。

これは敵だと。それもなるべく、この御所に住まう者達に、近付けてはいけない——

その激しい思いが根拠なく湧き出してから、気が付けば赤い部屋にいた少年は、バツが悪そうに再び目を伏せた。

「……………ヨリヤに迷惑、かけるのにな」

わかり切った行動の結果を。何故それを無視して、『銀色』がそこまで強行に出たのか……………。

その過程がわからない事は、少年も気持ちが悪くようだった。

人形の侍従を連れていた姫は、侍従がいなくなってみれば、何故自分がその侍従を連れていたかわからないと、当惑しつつ語ったとの事だった。

「人形の出所は結局不明だと、父上は仰ってた」

「……………あの女の関係者じゃないのか？」

それは真つ先に疑われて然るべきだが。忍者という類の恰好をしていた侍従は、東の大陸特有の、フリーの護衛集団であり、誰でも護衛に雇える上に、元々正体は明かさない不文律にある追跡不能の身上を偽装していた。

「それなら姫も、知らなかった事は有り得るだろうって」

「それって……………ジュンはどう思う？」

蒼潤の名を少年からはジュンと呼ばれる兄弟子は、首を傾げる。  
「何か変な気はするな。自分に憑いた悪魔を祓ってくれなんて、本当に悪魔が憑いた奴が言うのか？」

だからその姫が何がしか、怪しい相手な事には変わりが無いと、兄弟子は難しい顔をしながら雑巾をしぼっているが。

「……………」

それなら——何故、『銀色』は相手を生かしたのか。

余程無害とみなさない限りは、それは有り得なさそうだと。それだけ感じていた少年は、しかし兄弟子の言にも大きく領け、

「……………『悪魔』って、何なのかな……………」

その根本的な問いを、無意識に口にしていったのだった。

そんな少年の元へ、ひよっこりと、

『魔』というのは、ヒトから奪わないと生きられないもの達、全般のことみたいだよ」

幼いながら、聡明で落ち着いた声の発信源に少年が振り返ると、  
「——ユウヤ」

にこにこ、黒く短い髪に袴姿の和服の子供が穏やかに微笑み。  
少年をこの御所に引受けた公家のミニチュアとも言えそうな、  
公家の次男が、兄の蒼潤と少年の元まで来ていた。

『悪』がつくと、どう変わるのかはわからないけど。あまり  
良いイメージはどうしても湧かないよね」

「……なるほど。ユウヤは本当、頭いいな」  
名だたる術師の公家の血をひき、この幼さで既に大人顔負けの  
術師であるという子供は、公家というより武家の子供のような  
恰好で、立ち居振る舞いも少年達より洗練されていた。

「兄様達。泉の広場に、各地で評判の旅芸人一座が来ていると  
聞いたんですが、みなで観に行きませんか？」

「旅芸人一座？ 珍しそうだな」

「——オレは遠慮する」  
条件反射のように即答した少年は、御所に引受けられる前から  
基本、住む場所の外にあまり出たがらない引きこもりであり、

「そんな事言わずに。『同行』、『要請』」

「——！」

びくつと、子供の声に少年は静電気が走ったように体を震わせ、  
「一緒に行こうよ。きっと楽しいよ」

楽しそうに笑う子供に、胸を掴みつつ、ぎざぎざと頷いていた。

そしてその後は——少年は何も言わず、ただ怪訝に黙り込む。

「ちゃんと効いてるみたいですね、父上の術は」

「——？」  
それをついだに確かめたかった風の弟に、兄は首を傾げながら、

「悠夜と鶴つぐみと父上、すみれさんには絶対服従。つていうアレか？」  
事も無げに、その嚴罰——言霊を使つて告げられた命令には、  
逆らえないという呪い。いつ何時『銀色』となり、何をするか  
わからない少年への首輪について、その実態を納得したように  
頷く兄弟子だった。

「……何か……息が、苦しい」

しかし少年は、段々と青ざめてきた顔でそんな事を呟き、  
「あれ。そこまで抵抗すると、命に関わっちゃうよ」

何故か、この命令だけは聞けないとばかりに、難しい顔で黙る  
少年に——天使のような顔で子供は笑い。

『抵抗』、『不可』。悪あがきは良くないよ」

びくつとそこで、完全に少年は気力の根を断たれ。

「それにしても……本当に、呪いと親和性が強いみたいだね」  
その呪いを公家から、二つ返事で受け入れたバカ正直者は、  
不思議そうな子供に、ただ困ったように笑ったのだった。

旅芸人一座。それはこの、身元が不明で記憶喪失の少年には  
——決して近付きたくなかった鬼門とは。

自らについてあまり口にしない少年の周囲は、知る由もなく。

\*

その小さな世界は——『てんじょうびと天上人』の、宝箱だった。

ある宝の剣が無ければ、最早生きられないという少年がいた。

「天界と、魔界と……地、界？」

自身が今在る、現世を知るため。

その占い師の元を訪れた少年に、彼女は長い話を始める。

「そう。この『宝界』は、それら『力』の世界の中心地なのじゃ」

天界、魔界、地界と行き来が可能であるこの宝界は。様々な、力を流用出来る『化け物』が、存在するということがあった。

力なき地上人がその化け物に対抗出来るように、天上人は、彼らの秘宝を地上人に与え、文明の発達をも促し。

「それが……『宝珠』ってこと？」

少年が知る者達を守る『宝』。その正体も少年は興味があった。

「あくまでこの時代——『宝暦』においてはな」

そんな数多な宝の存在に。この世界は『天上人』の宝箱——

『宝界』と呼ばれるようになり。長い時間が、過ぎていった。

天上人は、神に従う『天使』と、それ以外の『てんかいじん天界人』へと分化し、それぞれの領分を保ち存続していく。

「それじゃあ今、オレが世話になつてる御所は、『天界人』がたまたま住んでる所？」

その場所に住む者が、周囲の多数の『人間』とどこか違う事を、少年は初見から感じていた。

「天界人は『地』という天空の島にいたが……三十年以上前に、魔族の大きな攻撃の後、五つの宝珠の『守護者』の内の三人が地上に逃げのびてな。『花の御所』はその内の一つじゃよ」

御所内のごく一部だけがその血をひくと、占い師は付け加える。

「それじゃアイツらは……天界人とかと人間の『混血』なのか」  
知人達の正体を知り、かなりの部分納得したような少年だった。

「ところでお主は。一見は、明らかに妖精の類じゃが」

最早、妖精ではあるまいと。剣無しには生きられない少年を、看破した彼女は……少年が口を閉ざしてきた事に踏み込む。

「今やお主は……その自我を剣に依存した、『剣の精霊』」

少年はそこでようやくやく——この占い師の元に来た真の目的。

他の誰にも打ち明けなかった、最後の問いを口にした。

「アンタならわかるか？ この妖精は——」

その正体は、全く覚えていないとしても。

それが呪われた沙汰である事は、初めから少年は知っており。

「もう一度この身体で、コイツが目を覚ます事、出来るのかな？」  
穏やか過ぎる微笑みで言う少年に、占い師は眉をひそめた。

それはある宝の剣の、終わりを意味する事と知ってか——

魔族や天界人。精霊や妖精、天使に悪魔。

様々な化け物が存在するこの宝界で、ヒトの形をしながら、人間にない『力』を持つものを、まとめて『千族』<sup>せんぞく</sup>と言った。

「……ユーオンは結局……妖精。って類になるの？」

「——え？」

しばらく様々な記憶を辿っていた金色の髪の少年に。剣の師の娘、活動的な着物が似合うが常に凜とした雰囲気を併せ持つ、肩までの赤い髪の少女が、少年の尖った耳を見て呟いた。

「そういう耳は、妖精とか吸血鬼とかに多いって聞くけど」

「そうでもないよ、鶉ちゃん。『千族』ならわりと色んな姿が有り得るって言うし」

それにと、聡明な黒髪の子供は少女と同じように首を傾げ、

「妖精なら羽があるはずなんだけど……金色の髪に尖り耳っていうのは、確かに典型的であるとは言うけど」

有名なその妖の特徴を思い浮かべ、まじまじと少年を見ている子供に、ただ少年はキョトンとする。

そんな話になっているのは、ひとえに——

「——『イーレン』！？ イーレンじゃない！？」

つい先程と全く同じ声が、二たびその背後からかけられていた。

花の御所で、主に関わる三人の子供と、旅する芸人の一座を見物に行った金色の髪の少年は。

始終黙り、辺りを窺い、まさに挙動不審な引きこもりだった。

「びっくりしたね。あそこまで堂々と、『力』を使った芸を、沢山の人前で披露するなんて」

「一般のヒトにはそんなに、わからないんじゃない？ 蒼も、気を付けて見てないと普通に見えたでしょ？」

「ああ。というより、全然わからなかった」

楽しげに感想を語る、公家の子供の兄弟と、剣の師の侍の娘。京都で少年の顔見知りの子供は、彼らに加え後一人だけだった。

「あれは、<sup>くぬぎ</sup>櫛にこそ見せたい感じね。猛獣と火の輪くぐりとか、櫛なら目を白黒させるんじゃない？」

「確かに。一座もしばらくいるみたいだし、今度連れていこう」  
元々馴染みのグループであつたらしい、四人の子供。

彼らは誰一人、少年から見れば尋常ではなかった。

「何か……それでも、平和……だよな」

同時に、共に在る事が何故か後ろめたいマトモな子供達で。  
「……いいのかな。オレは、ここにいて——」

少年には、これまでの自分の記憶が無い。

気が付けば今、この身体を動かしており。そしてそれは……

同行の彼らを襲った人形と、実は大差ない事を知っていた。



「……あれえ？——ねえ、待ってえ！」

その日の芸を終わりにした一座を後にした、彼らの背後から。少したつてから突然、そんな幼い声色が響き。

「イーレンちゃん！？イーレンちゃんじゃないのお！？」  
声の主はそして、駆けてきてばつと、少年の背中を掴んでいた。

これでも知り合いが増えていた少年は、御所に来る前には、なるべく外には出ずに生活していた。

この春に、瀕死の状態で倒れていた少年を拾ってくれた若い養父母とその養女は常々、そんな少年の事情に踏み込まずに、少年が何か思い出し、自ら語る事を待っていてくれたが。

「心配したんだよう！今まで何処にいったのお！？」

その声の主……よりによって、今まで観ていた一座の花形、

『咲姫』という肩書きの少女の一人が。涙混じりの声と共に、金色の髪の少年の元へ駆けてきた時には、

「……………え？」

「！——！？」

言葉を失った少年だけでなく、同行の者全てが呆気にとられ。少年の背にしがみつくと、異国の人形のようにふわふわな印象の幼げな少女を、全員でまじまじと見つめる事になったが。

しかし少年は、逆に一番冷静に——さらりとそれを口にした。

「あんた……誰だ？」

「——！？」

しがみつく相手に振り返ると、落ち着いた顔で言った少年に。その顔を見上げた幼げな少女は、涙を飲み込んだような顔で、

「……………あれ。……………何か、ちよつと、違う」

不思議そうに呟きながら、不服そうにした後、強く首を傾げた。

「そっくりなのに……顔だけちよつと違うよお？」

「それ、そっくりって言わないわよ」

「あの、ここは目立つから、ちよつと向こうに行きませんか？」

「そうだな。何だか用心棒とか呼ばれそうな雰囲気だぞ」

人目が集まりつつあった状況を気にする兄弟に、うんと少年も頷き。戸惑う幼げな少女を連れて、場所を変えた彼らだった。

幼げな少女——それでも、旅芸人一座の『咲姫』の一人は、

淪と名乗った。

「あなた、ユーオンの事、何か知ってるの？」

まずそう尋ねた師の娘も、公家の子供達も、少年が記憶喪失であるという事は知っていた。

「ユーオン？ そんなヒト知らないけど、イーレンちゃんは、

るん達の仲間だよお」

「イーレンって誰だ、そもそも」

コイツはユーオンだぞと、ある古い師の力で名前だけはわかっていた少年を指し、兄弟子は冷静に口にする。

「おかしいなあ……後ろから見たら、そっくりだったのに」

「……………」

幼げな少女は困ったように、胸元で手を組み。黙り込む少年を祈るように見つめ、その一座の事情を説明し始めた。

「イーレンちゃんはね、この春まで、るん達を守ってくれてた妖精さんなんだよ。でもある日、突然いなくなっちゃって……るんはずっと、イーレンちゃんを探してたんだよ」

世界各地をまわる芸人一座は、魔物や山賊など敵には事欠かず。一座の者自体、人間でない者も多いというが、護衛の必要性は大きいようだった。

「この剣もそっくりだし、姿も妖精さんぽいし……やっぱり、アナタ、イーレンちゃんじゃないの？」

「……ごめん。オレはあんたと、話した事はないよ」

ウルウルと大きな目を潤ませている、人形のような少女にも、少年はあくまで淡々と答える。

「ソイツがいなくて、あんた達は困ってるのか？」

「……うん。新しい護衛さんも見つかったし、霖もみんなも、妖精さんは気まぐれだから、忘れようって言うけど……」

一座のもう一人の花形の名を口にしながら、少女は目を伏せた。

「でも霖はずっと、辛そうだよお。るんは……それが、心配」  
そこまで聞いても、それ以上は何も口にしない少年を、少女は残念そうに見つめた後。呼び止めてごめんねと、ぺこりと頭を下げて、一行を後にした幼げな少女だった。

「——どう考えても、怪しくない？」

幼げな少女が去った後に、その少女より幼いが聡明な子供は、無表情な少年に対し、真つ先にそうツツコミを入れていた。

「ユーン君は、春くらいからジパングにいるんだよね？」

「……………」

「それ以前の記憶がないなら、あのヒトの話と合うんじゃない？」  
春先から行方不明になったという妖精と、妖精の身体的特徴を備える、春から現れた謎の少年。顔だけは少し違うと言うが、体格や髪や目の色、そして剣までよく似るらしい彼らに、

「それより俺は……ユオンが、ためらった事の方が気になる」

兄弟子はぽつりと、黙っている少年をまっすぐに見て、それを口にした。

「かなり嫌そうだったもんな。最初」

「……………」

何も語らない少年が、絶対服従の呪いに抵抗してまで、外出を嫌がっていたわけは——そこにあつた事に気付くように。

兄弟子のその一言に、少年は少し観念したのか、

「……うん。知り合いに会うかもしれないのは嫌だったんだ」  
特に表情を浮かべないまま、あっさりと白状し。呪いの言霊で事情をきかれる可能性を回避したかのようにだった。

「知り合いなの？」

怪訝な顔をする師の娘に、少年は困ったように笑い、

「自分の事は覚えてないけど。あいつらの事は知ってる」  
その中途半端な記憶喪失の片鱗を、そこで話し出した。

ジン・イヤオレン<sup>精 妖 刃</sup>。発音がしにくく、一座の者からイーレンと呼ばれていた名前を、少年はただどしく口にする。

「オレの知ってるソイツが、あいつらの護衛をしてただけぞ。ソイツ、死んだから……だからあいつらには会いたくないんだ」  
一座の者には知らせたくないと言うように、目を伏せる。

「……ユーオン君の、知り合いの知り合いってこと？」

「そうなるかな。妖精らしい事は、改めて知ったけど」

「それじゃ……ユーオンは結局……その知り合いの妖精と同じ、妖精。つて類になるの？」

「——え？」

この少年の事も元々、姿形から養父母は、おそらくは妖精——精霊にしては強い自我を持つ、『妖』とも言える千族と検討をつけていたが。今までは確信がなかった事でもあった。

「多分……わかりやすく言えば」

記憶を辿っていた少年に、師の娘が不思議そうに首を傾げた。そこで兄弟子の弟、聡明な黒髪の子供も同じように首を傾げ、  
「妖精なら羽があるはずなんだけど……」

有名なその妖の特徴を思い浮かべ、まじまじと少年を見ている子供に、ただ少年はキョトンとする。

彼らがそんな話を、まさにしている時——

「——イーレン！？ イーレンじゃない!？」

つい先程と全く同じ声が、二たびかけられていた。

あからさまに、うわ……と困った顔をする少年の背後には。今度は二人の人影が来ていた。

「ルンから聴いたの……! お願い、その剣を私に見せて!」

一人はやはり、一座のもう一人の花形。『咲姫』としての名は霖という、先程の幼げな少女とは対照的な、黒髪を首元で丸く結わえるジパング風の美女だった。あくまで服装が露出の多い、異国の踊り子のような姿でなければ。

「……霖。迂闊に近付かないで下さい」

対してもう一人の、護衛らしき女は、ジパングの着物に近い、その内に下衣も身に着ける、がちりと全身を覆う珍しい服装で。どちらかと言えば、ジパングの名が『ヤマト』や『和の国』であったぐらいの古い時代を彷彿とさせた。

「……………」

その珍しい、白青の長い髪をまっすぐ下ろし、薄青い目をした護衛の姿を、振り返って少年が目にした時。

「——」

声を呑んで固まった少年の髪が、一瞬で銀色に変貌し。

戸惑いの紫の目を忘れたように、迷いなき青の目で少年は、待ったなしにギリリと、袴に下げた剣を抜き——

「ちょっと——『銀色』、『自重』! ユーオン、待って!」

咄嗟に声をかけてくれた師の娘に、びくっと息を飲み。すぐに金色に戻った髪で、あれ。とばかりに胸元を掴んでいた。

きよとんと、少年と少女を交互に見つめる花形の横で。

花形に付き添う護衛は、当初から厳しげな顔で佇んでいたが。

「……一瞬、強い殺意を感じましたが」

端整に整っている切れ長の目には、しかし柔らかさもみられ、事も無げに、剣を抜き放った少年を見ると、

「今は特に——大きな脅威では無いようですね」

ジパングで最強レベルの侍に剣を習うも、なかなか上達もせず。

他には勘の良さ以外、命を削るくらいしか特技のない少年を、あつさり弱小と護衛は見切ったようだった。

そしてそんな護衛について、一番先にそれに気が付いたのは、

観察力も高い聡明な子供だった。

「……あれ？ ……アラス君？」

「——？」

瞬時に子供の方を見る護衛に、護衛は無表情のまま振り返る。

「どうしたんだ？ 悠夜」

「髪の色はアラス君より薄いし……しかも長いけど。まるで、アラス君が女の人になったみたいいな姿に見えて……」

「……私の現在の主を、知っているのですか」

護衛はあつさり、子供が出した名と、自らの関連を口にする

……場所を変えましょうと。殺伐とした裏路地を一度見直し、

淡々と口にしたのだった。

何故か、護衛の奢りという事で。子供達一行と、芸人一座の

花形の女は、付近の茶店に入って腰を落ち着けた。

「やつぱり……イーレンが買ってたあの剣と、そっくり」

「……」

店に入る前に、剣を抜いていた少年から、あつさりそれを借り。

花形は丹念に剣を眺めると、怪訝な顔で——店に入ってから、

対面に座らされた少年を見つめていた。

一方で。護衛を囲むように席に着いた子供達は、遠慮なく、

護衛の姿を多方向から見、

「本当ね……よく見ればそのものな顔じゃない」

「だな。髪型とか色が違くと、変わるもんだな」

彼らの父の知り合いである、自称『死神』の青年を思い浮かべ、

面白そうに頷き合うのだった。

「そうでしょうね。この躯体は、そう造られた人形ですから」

淡々と護衛は、やはり事も無げに断言し、しかしその台詞に、

公家の方の子供達は飛び上がる事となった。

「人形——って……」

「嘘だろ？」

あまりに最近、周囲が不穏な人形づいてる彼らは。

少年が咄嗟に剣を抜いた理由がそれだったのかと……一座の

花形と、黙って見つめ合う少年を思わず振り返ったが。

「……そいつ、生き物じゃないのは確かだと思っ」

少年はそれだけ答え、余裕がなさそうに口を閉じていた。

「でも……アラス君の知り合いなのよね？」

師の娘——赤い髪の少女は冷静に、護衛を見ながら問いかける。

少女の父の知り合いのその青年は、ふらりと御所に来ては、少女達を連れ出す事が多々ある遊び人らしく。御所の管理人の公家と同じ、ある肩書きを持った者でもあった。

「主が預かる様々な『力』の一つを、この人形は受けています。

自律起動出来る『力』は私くらいでしょうが、主の命により、少し前から護衛を失った『レスト』の手伝いをしています」

「アラス君の命令なんですか？」

「行きずりの縁で『精妖刃』の代役を引受けた主が、更にその代役を、この人形を入手してまで私に押し付けたのです」

常にフラフラしている主を咎める目つきを、隠そうともせず、無表情ながら不満そうな護衛だった。

『レスト』とは、この旅芸人一座の正式名称という事であり。

各々の座員はそれなりに体を鍛えた、人間や人間に近い化け物らしく、護衛としての出番自体は実は多くないという。

「……そうね。『リタン』が来てくれてからは、新しい客層が広がったって、マネージャーも喜んでるわ」

花形が言うように、少し大がかりな舞台では、護衛まで舞台に参加させられるという事であり。それが護衛は不満らしい。

「でも、イーレンが急にいなくなって、レストの空気は何処か……殺伐とするようになった気がする」

胸元の、蝶型のペンダントを触りながら、露出の多い服を隠すケープを羽織った花形は目を伏せた。

「イーレン、凄く明るくて、いつも何でも楽しそうだったから。

妖精ってみんなそうって言うけど、私も本当に助けられてたわ」

「……………」

少年は無表情に花形を見つめ。花形はひたすら辛そうに俯く。

時間がもつたいたいないと、茶店に誘いながら護衛は、あっさり本題をそこで切り出した。

「もしもその剣が精妖刃の物と同じなら。何故貴方はその剣を持つているのか、霖は気になるそうです」

黙って成り行きを見守りつつ、御所の子供陣も顔を見合わせる。

その妖精は死んだ——そしてその事は、隠したい様子だった少年が、何故そうするのか、どう対応するつもりか……何処かハラハラしながら。

「霖の目には、似た剣である事しかわからないようです。座の目利きの者に鑑定を願いたいと言うので、同行してもらおうか、剣を貸してもらおう事は出来ませんか？」

「——貸すのは、絶対に無理」

即答した少年は、店で出された水一つにも手を出す事はなく。少しだけ困ったような、不服気な顔で護衛を見返していた。

そして、今度はまっすぐ表情を消して花形を見ると。

「……剣がもし同じだったら……それで何になるんだ？」

「……………」

それもそうかと。御所の子供陣も、その違和感に気が付いた。

「そうよね。ユーオンがどうしてその剣を手に入れたのか……それを真つ先に訊けば早いのに」

護衛はそうしたのに、何故花形自身はそうしないのか。そして、慣れない袴を着用してまで、常に剣を手放さない少年の警戒も、そこで納得のいった子供陣だった。

「ユーオンの剣が欲しいのか？ あんた」

「……………」

「妖精さんが何処に行ったかは、あまり興味は無いんですか？」それが気になるのならば、同一の剣と確信してから、持ち主はどうしたのかと尋ねるのも回りくどく。剣に拘っていた花形に、揃って不審の目を子供陣は向けた。

「そうですね。霖の目的は、それであるように私も感じます」駄目押し護衛の一言に、花形は……………困ったように笑い。

「……………そうね。イーレンは、帰ってくる気はないと思うから」花形が知っていた事について、簡単に話し、嘆息したのだった。

「こんな話をするのは、恥ずかしいけど。もう一人の咲姫……………」

「え。と何故か、少年をちらりと子供陣は見る。

「でもイーレンがいなくなる前、ちょっと色々揉めてみたい。

「ルンは淡々としたものだけど、イーレンは落ち込んでたし」

だからもう、その妖精は帰らないだろうと、さっぱりした顔で花形は語った。

「イーレンは剣マニアだったから、何回も剣を買い替えてたわ。

いい剣ばかりだから、いつかどれか、私にくれるって……………そう約束してたの」

「……………」

「だからもし、それがイーレンの剣なら。譲ってくれないか、お願いしちやおうって思ってた」

「てへへとばかりに、軽く舌を出す花形に。少年は淡々と、その答えを返していた。

「……………誰の剣でも……………これは譲れない」

「そつかと、花形は、あつさり諦めたように爽やかに笑った。

そして次の瞬間には——にこりと、整った笑顔を浮かべると。

「それじゃ今度は、『レスト』としての話をしたい？」

それまでの、何処か控えめな印象とは売ってかわり。

「はい？ と目を丸くする少年を中心に、全員に笑いかけた。

「私達は、こんな風に人間でないヒトに関わった時——私達の仲間にならないか、『ディアルス』に來ないかいつも尋ねるの」

『ディアルス』？」

その固有名詞に少年は——心なしか眉をひそめる。

「別に貴方に、居場所があれば良いんだけど。もう世界中で、

『千族』はどんどん減ってるというわ……………『ディアルス』は、

そんな千族にも公式に戸籍をくれる、数少ない大国なの」

……………と黙り込んだ少年達に。興味があればまた話をしに來てと、花形はあつさり話を切り上げ、帰っていったのだった。

とりあえず——と。

茶店を後にし、帰路についた一行の中で。最初に不服気に、口を開いたのは師の娘だった。

「ユーオンは、これで良かったの？」

「え？」

「そうだな。何か今一つ、何が何だかでスッキリしないな」

結局あまり、事情のわからなかった彼らにとつては、

「ユーオン君の記憶の手がかり、あのヒト達はなりそうにない？」

そこにはほとんど、少年が興味を見せなかった事を始め。

不透明なままの妖精の事や、一瞬でも『銀色』が出てまで、対峙した護衛の事について、何も語らず淡々としている少年の思惑が気になるようだった。

「——ごめん。ツグミ達には時間とらせて、迷惑かけた」

「そういう事じゃないでしょ？ 別に……ユーオンが話す気がないなら、無理にはきかないけど」

「……」

「御所に来る前、何処で何をしてたのか。本当ユーオンは、何も言わないよな」

記憶を失ったという春から今まで、少なくとも半年、何処かでそれなりの生活があったはずの少年は。

身寄りや誰一人無い、知り合いは全て行方不明と、それしか語らず。今も保護観察が続いた身上なのだった。

そして子供陣は、彼らにとつても関係がなくなはない事項に、うーんと顔を悩ませる。

「アラス君も、大丈夫なのかな……最近調子が悪いって父上に言ってたのに、あんなに大きな『力』を単独行動させて」

「そうなのかな？ この間も来たけど、いつも通りに見えたけど」

何やら最近、東の大陸で大怪我をしたという、いつもからりと明るく自称死神は。基本的に謎めいた青年で、彼らの父曰く、「悪くない吸血鬼」らしいが——『レスト』を含め、昔馴染の知らない様々な所で活動しているようだった。

「それにしても、何で人形なのかしらね」

さすがにタイミングが悪いわよと。早速『絶対服従』を少年に強いる事になった、公家の姪で、同じ術師の家系の少女は。

そうした強制は本来好まないのか——不服気に少年を見つつ、口にしており。

「そっか。そう言えばさつきはありがとう、ツグミ」

対照的に、にこっと笑って少年は、赤い髪の少女に振り返った。

「……呪われた後にありがとうって言うバカ、信じられない」あまりに無害な笑顔に、頭痛を抑えるように少女は息をつく。

「何か、胸がドキドキして、温かかった。何でかな？」

「バカ。そのまま心臓止まるわよ、下手したら」

この少年は、何も無ければこうしてとても平和な顔で笑う。それが、彼らの住む御所の一角を血で染めたなど、現場を見たわけではない少女は……初めはその厳罰には反対であり。

全くと溜息をつく少女を、少年は不思議そうに見つめた。

絶対服従。御所の管理者たる公家と、その周囲の術師達には逆らえない呪い。そうした罰をあつさりを受け入れた少年は、その主人の一人の赤い髪の少女に、後にこう語った。  
「オレは多分、ろくでもないから。そうじゃない奴の言う事を、聞いてた方がいいと思う」

「はあ？ 何よ、それ？」

うん、と。首を傾げて自ら考え込みつつ、少年は、

「ヨリヤもユウヤも、ツグミもいい奴だから」

こくこく頷きながら、大真面目に呟き。公家の采配に、とても納得いったと言わんばかりの頷きようだったという。

その少年の納得が、少女はあまり理解出来ず、

「全く。悪いのは銀で、銀に負けるユーオンは弱々なだけよね」

「……なんで？ それ、逆だと思うけど」

キョトンとする少年に、更にイラっとさせられた。

「銀の暴走を、ユーオンが止められたら一番早いんじゃない」

「……………」

少年はしばし、声を呑み込んだ後。

「……オレは別に、止める気はないんだと思う」

そんな、反省のカケラもない返答を、よりによって返していた。

「——何、それ？」

怪訝そのものの目で少年を見る少女に、少年は少し怯みながら、  
「いつも、何をしたのか覚えてない……わけじゃないんだ」

『銀色』である時の事を、覚えていないというのは。正確には誤りであると——珍しく自ら、実情を少年は口にしていた。

「それって——ユーオン」

「オレは別に、違う誰かになつてゐるわけじゃない」

『銀色』と少年を分けて扱ってくれる周囲に、その方が物事が円滑にいくので、これまであえて口にしなかった事を。

「ただ単に。どうしてその時は、そうしようと思ったのか……」

銀キラの時に何を考えたのが、どうしても思い出せない」

「……………」

厳しい目線で、少年を見た少女は、

「つまり……それを思い出せば、ユーオンは銀と同じ事をする。」

そう言ってる？」

「……うん。多分」

あのねえ——と。頭痛を抑えるように片手で額を触りながら、少女は、やっと理解出来たとばかりに、大きく頷いて言った。

「——確かに必要みたいね。ユーオンには、その呪い」

だろ？ と首を傾げる少年に、開き直るな！ と頭をはたき、

叔父の判断は妥当であった事を、改めて納得した少女だった。

「弱いのは多分……銀の方なんだ」

ぼつりと。自身の暗闇を見つめるように、少年は呟き。

それでも、その力に頼る自身の咎に、悪いのは自分だと——

当たり前のように現実を口にした。

\*



その日はとても、少年にとっては疲れが大きかった。

傍目からは始終、淡々としたように見えた少年であつても、一番避けたかった旅芸人一座との再会。しかもそこにいた人形……どう観ても、これまでで一番強そうだった相手に、色々と複雑な思いを抱える。

「……あいつ。大人しくしてるかな……」

それだけでなく問題も背負う少年を、罰するかのよう。御所に帰り着いた少年を待ち受けていた、ある存在があつた。

「——え？」

「お邪魔しております。アナタがユーオン殿でしょうか？」  
貸し与えられた御所の一室。寝具と灯り以外一切物が無い、飾り気や彩りとは無縁の少年の居場所に、その異物は居座つていた。

「……………」

「陽炎と申します。先日は非常にお世話になりました」  
異物はただ、毒も薬も無い目付きで少年を見つめ。

土色の、肩までの癖の強い髪は、あまり着物には合わず。

陽炎という儂い響きとは裏腹に、意志の強そうな雰囲気、その大人の女は、自分を殺そうとした少年を出迎えた。

「……………あんた……………」

これは何の悪い冗談かと、顔を歪める少年にも構わず。

その、特にこれといった特徴の無い、一見無力そうな姫君。ジパングの風土に合わない『悪魔憑き』を、少年が観た時。

——あいつだけは——

数か月前に観ていた光景。

本来、今の少年を保護していた養父母の里帰りに同伴した時、少年を襲った赤く昏い夢が瞬時に顔を出した。

——あいつだけは——絶対に殺す——

それが根本。そのためだけに誰かはここまで来た。けれどそれは、少年も『銀色』も特に気にした事はなかった。

「あんた……………ここに、何をしに来たんだ？」

「……………」

広くはない少年の居所の、一角を占める侵入者に。少年は特に感情は無い顔で、金色の髪と紫の目のまま——

しかし警戒と嫌悪を隠さない声で、それだけを尋ねた。

「それは——アナタに会いに来たに、決まっておりますが」

姫君という程、気品や艶を伴うわけでもない一般的な女は。

無難としか言いようのない微笑みを浮かべ、座ったままで、

黙り込む少年をしばらく見上げていたのだった。

自身の居室でありながら、立ち尽くしたままの少年に。女は  
ようやく、訪室の目的を淡々と語る。

「不躰で申し訳ありません。わたくしはただ、アナタにお礼と、  
お願いがあつて参つたのです」

「……？」

怪訝な顔を崩さない少年にめげず、女も微笑み続ける。

「アナタのおかげで、わたくしに長い間巢食っていた悪魔は、  
影も形も無くなりました。この二百年——誰にも不可能だった  
悪魔祓いを、アナタは成し遂げてくださったのです」

「……二百年？」

正座した体勢で両手をつき、女は深々と頭を下げる。

「長い時でした。こうして、自らの事をお話し出来る機会も、  
わたくしには長く許されませんでした」

「……」

女はおそらく——何一つ嘘はついていない。それは少年には  
わかつたのだが。

「わたくしのお話を、アナタはきいてくださいますか？」

「……話、だつて？」

それでも少年の内を占めるのは、至って単純な葛藤だけで。

その葛藤が何処からくるのか、それがわからない事だけが、  
普段は平和に笑う金色の髪の少年の顔を陰しくさせていた。

——……殺さなきゃ、いけないのに——

今この感情は、『銀色』でなくても明らかに少年自身のもので。  
その必要を確実に感じておきながら、『銀色』がこの相手を、  
見逃した理由……

——でも……殺しちゃ、いけない——

湧き上がる思いの根拠が、金色の髪の少年にはわからなかった。

戦う者としての強さも、現状を見極める直観も。金色の髪の  
少年よりも、『銀色』の方がいつも上回っている。

「オレにはあんたと——話す理由はない」

しかし『銀色』が外に出る時、少年の体には必ず強い消耗が  
起こり。そのタイミングすら『銀色』は滅多に間違えない——  
どうしても必要であれば、最低限だけ手助けをすると。

「でも……あんたが……」

だから今、『銀色』が全く姿を見せない理由は。

戦うべき時でない事だけは、少年にもわかり。

「……何か話したいなら。……勝手にすればいい」

厳しい顔でも、それだけ何とか口にした少年に。

女はずっと同じ無難な微笑みで、有難うと口にしたのだった。

縁側に近いその居室内で。客人から可能な限り距離をとつて  
座つた少年を、堀の上から障子ごしに確認する人影があり。

「……これは……厄介、ですね」

薄青いシルエットの持ち主は、ただそれだけ静かに呟いた。

「わたくしは元々、天に住まう民の一人でした」

かなり身幅のある剣で胸を貫かれながら、絶命する事もなく、人間には有り得ない速さでの回復をみせる女は、自身の身上をそう語った。

「天を支配する五つの家系の、中でも主位の家の分家として。主家の後継者に嫁ぎ、仕える事を定められた身でもありません」  
「……」

「分家の身のわたくしには、何も大した『力』は存在しません。それでもなるべく、濃い血を保てるようにと、主家の後継者はいくつも側室を持ち、分家を作る事が義務だったのです」  
それは主に、主位のその家系だけの話であり、他の四つの家は、基本的には一子相伝で続いていたらしい。

「他家が何かで途絶えた時には、主位の家に限り、その分家が他家の後継をする事も可能だったのです。わたくしのように、分家の更に分家でなければ、主位の家の血をひいた者は全員、一子相伝の原則に反した強い『力』を持っていました」  
女はそして、主家の血をひく後継者候補の、分家の一人息子に、幼少から仕えていたという事だったが、

「しかし、わたくしの主は……魔性の者である事が後にわかり。主を信じ続けたわたくしにも、いつしか『悪魔』が憑りついていたのです」

女が悪魔憑きとなった経緯を、僅かに顔を顰めつつ話し出した。

「魔性の……者？」

しかしあくまで少年は、冷たい声色と怪訝な目線で。腰の剣に置いた手も話さずに、黙って女の話の続きを待つ。

「アナタは魔界をご存知ですか？ わたくし達天の民とは対をなす、地の底——魔界を本拠とするおぞましき者達を、総じて『魔族』というのです」

女も淡々と、少年にわかるように話を続ける。

「悪魔とは、元が何者であれ、悪に堕ちて『魔』となった者をさします。それはたとえ、天の民と言えど例外ではありません」  
「……」

「魔性——ヒトを喰い自らの力とする性質を、先天的に持った土着の鬼や妖怪は、魔族とはいえ悪魔ばかりではありません。魔性は彼らの一面で、必ずしもヒトを喰わずとも生きられます。しかしわたくしの主は……共に育った自らの従兄を手にかけるほどの、悪しき『魔』へ変貌してしまつたのです」

ヒトを糧とすることで、大きな力を得られる性質を『魔性』。そしてその糧なしに生を繋げなくなった者を魔性の者、または『魔』と呼び……真っ当に生きる者からすれば、誰もが蔑み、疎ましく思う生き物になつた主を——しかし女は救いたい一心だったと、目を伏せて口にした。

「他家の後継者だった従兄を手にかけた主には、厳しい断罪が下されました。けれど——主が従兄を手にかけたのは、従兄が主の母を害したからなのです。わたくしだけが、それを知っていました。しかし主は、事実を明かしませんでした」



護衛の依頼をにべもなく断わられた、元悪魔憑きの姫君は。新たな護衛と目的、行先が見つかるまでは、公家の厚意で、花の御所に滞在させてもらうという事だった。

「そうか。やはりお主には気が進まぬか」

それはわかり切っていたがと、公家は穏やかに笑いつつ。

それでも女のたつての希望で、少年の居室を女に教えていた管理者の元に、少年はその後訪ねてきていた。

「ヨリヤ……あいつ。しばらく御所にいるって本当か？」

少年は別に、女の訪室に文句があるわけではない。ただ女が、このまま滞在する事だけ、気になるようだった。

「ここで追い出したりすれば、ますますわしも、お主の立場も、おそろくただでは済まぬよ？」

「……………」

「わしも後味が悪いしろう。やはり、悪魔祓いの件だけでなく、あふたーけあ。は大事だと思ふのじゃよ」

ともすれば、女を殺しかねない事態となり。平穏な花の御所が血で汚された暴挙の後で、行く当てのない女を見捨てるような行動を、その人の良い公家とれるわけもなく。

ぐう。と俯いて座る少年もそれはわかっていたようであり。

「……………あいつ絶対……………天女とかじゃないぞ」

元は天にいたという、女の話を通り聞いた後で、少年が得た結論だけは伝えるために、公家の元まで来ていた少年だった。

「ほほう。天女とはまた、言い得て妙じゃな」

女を姫君と呼ぶ事が、しっくりこなかったらしい公家は笑う。

「お主はどうして、そう思うのじゃ？」

「あいつ、ヨリヤやゲンジと全然似てない。梅が言つてた……………ヨリヤかゲンジは、元々は天にいたヒトの家系だつて」

ほう。と公家は、少年が出した知り合いの占い師の名と言葉に、面白そうな目をして少年を見返した。

「しかし、陽炎殿の話には、嘘は感じられなかったがのう？」

「……………嘘は確かに……………ついてないと思う」

それは自身も感じていた少年は、それなら何故そう思うのか。自分でも不可解に思うように、強く首を傾げた。

「確かにわしも、胸を刺されて生きられるとは思えぬのう」

少年の前で公家も、腕を組んで笑いつつ、不思議そうにする。

「と言つても、初めから心臓は外されていた。お主には何か、意図があつて、陽炎殿を助けたようにしか思えないがのう」

「……………へ？」

「お主が深追いをしなかったから、陽炎殿は生き延びたのではない。『銀色』は考えがあつたはずじゃよ」

「……………何だ、そりゃ」

少年はてつきり、予想外に丈夫だった相手に、それ以上体力を消耗してまで、とどめを刺す事を躊躇ったのかと思つていたが。

最初から殺す気がなかったなら、それは――

「それじゃ、ヨリヤに迷惑かけるだけじゃないか」

思わず腹立たしげに呟いた言葉に。公家はまたも、おやおや。という顔で、穏やかに少年を見つめて笑つた。



公家の仕事場を後にしてすぐに。

珍しく物音だけで、ある違和感に気が付いた少年は。辺りをきよろきよろ見回し、ひとしきり悩みの表情を数十秒浮かべた。

「……うん。騒ぎにならなければ、いいんだよな」

何かあったらまず報告して、それから行動の判断を仰げと、赤い髪でガタイのいい剣の師の怒声を思い出しながらも、

「もう遅い時間だし……寝所は、さすがに知らないし」

探せばそれを、見つけられない事はない少年だったが。

違和感の発生源が、自らに関わりそうな事と気が付いていた少年には。自分の問題に、そこまでして誰かを巻き込む事が、まず大きな苦痛だった。

そうして一人、違和感の源を目指して。

同じ体格の人間よりも、僅かに勝る程度の筋力や俊敏性で、物音をたてないよう必死に御所の屋根に登った少年を。

その闖入者は、黙って待ち受けていた。

「……あんた——……オレに、何か用？」

「……」

夜の闇の中、月光に仄かに映える、白青の長い髪をなびかせ。

実際は動く事などない硝子玉の眼は、本来ただ透明ながら——内から湧き出る青い光を湛え、人影は無機質に少年を見貫いた。

そして人影は、元々静かな声で、そのまま小さく口を開く。  
「単に——……個人的な興味です、『精妖刃』」

「……」

まっすぐに少年を見ている青い目は、何故か少年に対し、その行方不明の妖精の名を口にし。

「我が主は、アナタが『精妖刃』だと言っています。それは、私には聞き逃せることではありません」

「主って……リンの事か？」

「……」

薄青い人影——少年には初めから『レスト』の護衛の人形だとわかっていた相手は。少年の声に難しげな表情で少年をじっと見つめる。

「……何やら色々と、込み入った事情がおありのようですね」  
自身を見て、雇い主の一人の名前を出した少年に、護衛は肩をすくめるように一度息をつき。

その後再び、まっすぐに少年を見ると。

無駄のない『力』たる生き人形は、あっさりそれを口にしました。

「——率直にききましょう。『精妖刃』の躰を勝手に動かす、アナタは何者ですか」

「……」

少年はそこで、迷いの無い紫の目のまま人形を見返し、

「……あんたと同じ。何かに乗り移った、ただの『力』だよ」  
自らが口にした言葉の意味もわからず、無意識にそう伝えた。

その妖精は、少年の知った者で——そして死んだと口にした少年の言葉は、決して嘘ではなかったものの。

「依童として造られた人形に宿る事と、自ら以外の他者の軀を乗っ取る事を、同じにしてもらっては困ります」

「……………」

少年に対峙する気高き『力』は、呪われた生を得た少年とは比べるべくもなく、純粹な系統の旧き『力』だった。

「系統的には、私に近い気はしなくもありませんが。それでも随分、中途半端な『力』であるようですね、アナタは」

「……………知らないよ。オレはただ、気が付けばここにいただけだ」  
そうですか。と護衛は、その記憶喪失の少年——

自身が何者かはわからずとも、その妖精の軀を奪った自覚はある篡奪者に、冷たい視線を向けていた。

「アナタが何者であれ『精妖刃』の軀を使うのであれば、彼の役目をはたして下さい」

「アイツの役目？」

「私の用件はそれだけです。私は好きで、『レスト』の護衛を  
しているわけではありません」

冷たい目線のままながら、何処か拗ねるような声で言う護衛に、  
それが本気と悟った少年は、思わず毒気を抜かれていた。

「——ごめん。それはちよつと、オレもやりたくない」

今日はやたらに、護衛の依頼づいてるな、と目を丸くする……  
歓迎出来ないモテ期の到来のような少年だった。

「そもそも……この妖精は死んでたせいか、コイツにもしも、  
何か『力』があつても。オレには全然使えてなくて——」

「……………」

精霊の使えない精霊族。養父母の養女である妹分に、日頃から  
そう言つてからかわれ続けていた少年の实情は、

「オレ、多分、丸腰の人間くらいにしか勝てないよ。それつて  
護衛としてそもそも成り立つのかな？」

情けない現状ながら、金色の髪で紫の目の少年は。剣を使った  
状態でようやく、体術がメインの人間の相手が出来るくらいで、

「……………今、何と？」  
相手が武器を持っていれば、苦戦した上で引き分けるかどうか。

その上、相手が千族の血を持つようであれば、最早敵うべくも  
ないと頷垂れる少年に、護衛はまさに絶句したようだった。

「剣もずっと、誰かに習い続けているけど……未だに、相手は  
観えてるのに、体が全然動かないんだ」

攻撃が何処から、どう来るかだけでなく、相手の弱点や隙まで  
時にわかってても。言う事をきかない体ではどうしようもないと

……まさに壁にぶつかっていた少年であり。

「弱小だとは……思つてはいましたが」

まさかそこまでとは。大きく衝撃を受けたらしい護衛は、  
「それではあの時の殺意は……何だったのです？」

少年にあつたはずの確かな脅威に、ただ怪訝な顔を見せた。



「……じゃあ、あんたは……」

その護衛の、純粹に驚いている風の表情に、少年はそもそもの警戒心の出処を思い直し、

「オレを殺す気は……今はない？」

「誰がですか。ヒトを何だと思っっているのですか」

そつかと。あの時『銀色』が現れた理由を改めて考え、大きく溜め息をついた少年だった。

護衛をするには、弱小に過ぎるといふ少年……誰かの躰を、乗っ取って生きている存在に、近いようで遠い生きた人形は、改めて冷たい目を向ける。

「アナタの正体は。アナタは誰にも、明かす気はないのですか」  
「……」

『精妖刃』の行方を気にする者も、レストには多くいます。彼が死んだというなら、何故それを明らかにしないのです？  
鋭い切れ長の目で実に整った顔立ちの人形は、内なる『力』の気高さを表してか。まっすぐな青い眼光に、少年は弱気な目で肩を竦めるしか出来ず……ただ人形は不服そうに言った。

「アナタはずっと……レストから逃げ回る気ですか」

弱小なのは、躰だけでなく。在り方そのものであると——

卑小な相手には興味を失くしたとばかりに。人形の護衛は、御所の屋根から夜の闇へと、薄青い姿を消していった。

「……」

ひとまず、騒ぎになる事はなく事態は終えられ。

目下一番の脅威と考えられたあの人形が、現時点では害意がない事もわかり。少年にとっては、様々な事が丸く収まった、あつという間の夜の出来事だったが。

「……弱いつて。ラク、なんだな……」

そのまま屋根の上に、座り込んでいた少年は、頭上の暗い空と月を見上げ、鳩尾の辺りをぎゅつと掴んだ。

「出来ないことなら。……やらないでも、良かったんだ」

これまでの少年にとつては、忌避すべきでしかなかった事が。今まさに少年を襲う、絶え間ない吐き気と引き換えに——

公家や剣の師に、迷惑をかけない形で物事を運べた理由は、戦う道をそもそも選べない、弱小さだと悟るしかなく。

そんな、金色の髪の少年の、諦観に反発するかのように。黒い柄の青銀の剣は、鞘の中でも仄かに青白い光を放ち。

——本当はそこまで、お主に余裕はないはずじゃよ——

そしてその夜に初めて。これ以後に何度となく少年を襲う、青白い剣の夢が——その片鱗を表し始める。

\*

「ユーオン君、こんにちはー！ 遊びに行こー！」

「……はえ？」

それだけでなくも疲れていた中に、夜に不穏な出来事があったせいか。寝不足で冴えない声を出した少年の所へ、朝一番から訪ねてきた明るい声があった。

「蒼ちゃん達にきいたよ！ ユーオン君、『レスト』のヒトと知り合いなんだって？」

「……おはよう、クヌギ……」

寝ぼけ眼で何とか布団を畳みつつ、ようやく慣れてきた袴を身に着け、剣を腰に装着した少年の居室へ入ってきたのは。

ジパングではあまり見ない襟のある上着と、繊維の荒い柄の下衣を着こなし、開きかけた花の蕾のような帽子のよく似合う顔見知りの、蒼潤や悠夜の従兄弟だった。

『レスト』って何回も来てるけど、いつも滞在が短いから、僕も見た事なかったんだ！ でも今回は、長くいるんだって！

「……そうなのか。やだな」

何で？ と、帽子の少年は目をきらきらさせて少年を見る。

「花形の『咲姫』さん二人と話が出るなんて、凄いいじゃない！ みんなで行こうよ、花形さんと知り合いになるうよ！」

「いや……知り合いの知り合いだっただけで、オレは別に……」

すっかり何かのスイッチが入っている相手に。

何事かと、やがて少年の居室までやってきた他の子供陣に、助けを求めるような視線を向けた金色の髪の少年だった。

しかし数刻後。

昨日、その一座を観に行つたばかりのはずの他の子供陣まで

—— みんなで行こう、という方向に話が傾きかけていた。

「別に今日じゃなくてもいいけど。その内にどう？」

唯一、師の娘は、寝不足だった少年の顔色が悪い事に気付いたようであり。それならと折衷案を提示してくれるが、それでも難しい顔付きの少年は、

「別にオレがいなくても、あいつらは逃げないと思うけど」

「そんなあ、寂しい事言わないでよ、ユーオン君」

自分以外の四人で行けば良いと、ひたすら逃げ腰だった。

「でもユオンがいないと、昨日の女、話は出来無さそうだろ」

「話……って？」

『ディアルス』のお話だよ。千族のヒトを受け入れる国って、

霖さんは言つてよね？」

公家の子供の二人は何故か、その大国について、花形の女から聞いてみたいといった様子であり、

『ディアルス』なら……オレも行った事あるけど」

「——え？」

あっさりそう返した少年に、円形に坐していた子供陣が一斉に、少年を注目していた。

「ユーオン、『ディアルス』のこと知ってるの？」

「ジパングに引きこもつてたんじゃなかったのか？」

「え……えーっと……」

その視線にたじろぎながら、少年はここ半年内の記憶を辿る。

「今はいないけど……オレを拾ってくれた奴らが、その国の戸籍をもらってて。代りに、王様とかの依頼で、ちよくちよく『ディアルス』には顔を出してたから」

それに何度か、一緒についていったと、身元不明で記憶喪失の少年は語り。

「それは——つまり、ユオン君の保護者になるんじゃないの？」  
これまで自身の事をほとんど語らず、だから保護観察中だった少年に、聡明な黒髪の子供は不思議そうにするが、

「そうだけど。フルネームも覚えてないし、何処に行ったか、いつ帰るのかもわからないから」

だから当てにはしていないと、淡々とした少年に。子供陣一同、  
オイオイと呆れ顔をしたのだった。

そんな中で、師の娘は。いつになく好奇心に満ちた目で、  
「ねえねえ。そのディアルスってどんな所なの？」

家具がほとんど置いておらず、子供会にはちょうど良い広さの少年の居室で、そのままの流れでそれを尋ねてきていた。

「地図で見れば、西の大陸の北東端にある、ジパングから実は結構近い国だよな？」

「そーなの？ さすが、悠夜君だねー」  
「ユオン達はどうやって行つてたんだ？ 船でも出てるのか？」  
すっかり話題は、レストからディアルスの事へと移り。

誤魔化せて丁度良いとばかりに、少年はその突発の子供会で、知る限りの、その人間と千族の国の事を話し始めたのだった。

炎と風の国。ディアルスを語る際には、その枕詞は切つても切れない、国の特徴を表す言葉という事であり。

「かなり北にある国なのに、年中暖かい気候らしくて。近くの北の島まで、その影響で、寒過ぎなくなってるらしい」

「それは不思議だね。海底火山の暖流でもあるの？」  
「よくはわからないけど……王家が守る宝が『炎』と『風』の二つの珠玉とかで。それが祭壇にある限り、ずっと暖かい国に保てるって言つてた」

本来は、その緯度からしても、温暖では有り得ない凍土の大地は。しかし千年以上前から、そうした自然の『力』の恵みを糧に、豊かな国に発展してきたという。

「基本は人間の国だつて言うけど、そんな珠玉があるせいか、王家は人間だけど魔法を使うつて言うし。だから、千族とかの化け物には凄く理解があつて……共存を目指してるんだつて、うちの化け物の奴らも言つてた」

「それで昨日のあの女は、ユオンにディアルスに来ないかつて言つたのか？」

「だとは思うけど……でも、ディアルスのそういうやり方は、西の大陸の余所の地方からは『千族狩り』だつて言われてる」  
「千族狩りつて——何よ？」  
声を発した師の娘だけでなく、他の子供も眉を顰める。

「西の大陸は、本当に人間の多い所つていうから。千族の事はほとんど理解出来ないし、基本、怖がつてるみたいなんだ」

そんな中で、最早かなり個体数が減ってきている千族を集め、戸籍を与える国は。それにより国力を強化しようとしていると、周辺地域からは警戒視されているのが現状だった。

「無理強いはしてないって言うけど。化け物の方も、いきなりディアルスに來ないかって言われても、びっくりして警戒する事の方が多たって言うし」

「それは……まあ、ありそうだな」

少年の養父母も、元は完全に、ディアルスの王家の者と偶然に知り合ったらしく。そうした事でもなければ、見知らぬ人間の国で戸籍を貰うなどは、思ってもみない事だった。

「実際、どれくらい強い奴がいるんだ？ その国は」

「どうだろ。ゲンジとヨリヤが相当強いから、それ程じゃないけど、でも強い奴は……沢山いるとは思うけど」

それは基本的に、この世界の『宝』を持つているらしい者と、比較すること自体が間違いであると、薄々少年は感じつつも。わかりやすく伝えるなら、そうとしか言えなかった。

それだけ強いと評される親に、師の娘は首を傾げつつ、  
「ユーオンから見たら……そのディアルスは、千族にとって、実際どんな感じだったの？」

「うーん……オレもちよつとの間しかいなかったから、何とも言えないけど……」

考え込む少年の様子に、何故か師の娘は複雑な目を向けていた。

「国全体ではやっぱり、人間と化け物の揉め事が、どうしてもありそうだけど……」

それでも——と。少年は穏やかな声色で、その先を口にした。  
「王家のヒトに、直接に会った事はないけど。色んなところで、話を聞いてたら……いい国なのかなって、何となく思ったよ」

そうなんだ。と、思い思いの表情で子供達は頷き。

「いいなー。いつか僕も行ってみたいなあ」

あまりジパングらしからぬ風貌の帽子の少年ですら、異国というのは、一つの憧れであるようだった。

「ディアルスくらいなら、行こうと思えば、いつでも行けるよ」  
何ならいつか連れていこうかと、少年のその無責任な約束に、はしゃぐ男の子陣を前に。

「……………」

赤い髪の少女はやはり、何処か不思議そうに。青みのある黒い目をまっすぐに、少年の方へと向けていたのだった。

そして、今日はひとまず芸人一座の見物は無しという事で。

帽子の少年が帰り、公家の子供二人も少年の居室を出た後に。  
「——？ ツグミ？」

じーっと、両腕を組んで不思議そうに少年を見つめ、部屋に残っていた少女に、少年も不思議そうな目を惜しみなく返す。

「何か他に……聞きたいこと、あるのか？」

「……………」

ディアルスの話を、始終熱心に聞いていた少女に、そう尋ねた少年に——少女はうーんと、軽く首を振り。

赤い髪の少女は、珍しく少し躊躇いがちに。少年を見つつも、僅かに伏し目で話し始めた。

「何か、ユーオンが凄く……懐かしそうな顔をしてるから」

「——え？」

ディアルスという国の話も、大いに興味はあったものの。

それを話している時の、少年の雰囲気——

少女にとつては、色々と新鮮だったようであり。

「まるで、ディアルスに住んでたヒトみたい……そんな風に感じるくらい、嬉しそうに話してた」

「……………」

これまでになく、多くの事を話した少年に、そもそも少女は違和感があったらしかった。

「ユーオンはいつも、何処まで意識して話さないのか——正直よくわからなかったけど」

「……………」

「さっきの見てたら、何となく、何を話すか……話したいのか、自分でも本当わかってないのかなって、そう思っちゃった」

記憶喪失——その現在の状態もさることながら。

根本的にこの少年は、自らが曖昧である事を悟るように。

「もしかしたらユーオン、記憶がなくなる前は、ディアルスのヒトだったんじゃない？」

そう笑う少女に、少年はただ、首を傾げる事しか出来なかった。

炎と風の国、ディアルス。その人間の国が、現在のように、温暖な気候と豊かさを得られたのは初めからではなく。

陽の下の凍土、ディレス。この世界の暦が現在の『宝暦』となったばかりの頃は、資源を求めて近隣と諍いが絶えなかった、温泉を名物とする寒冷の国が前身だった。

そして更に。

西の大陸の北東端に、とつてつけたような不自然な形の国土——逆正三角形の大国は、旧き『神暦』において、元々はその場所にはなく。

現在の世界地図では、東の大陸の一部にぽっかりと空いた穴。

大陸変動によって海に沈んだとされる、地域の一部に——

海底遺跡の存在する、その地域には元々、ある逆正三角形の国が存在していた事は。

今はもう、伝説にも近い扱いを受ける史実となっていたが。

一つの国を、丸ごと外壁で囲んだ、古代の移動要塞。

砦の国ディレステアという旧き地がそこにあり——

いつしか北西へ飛び立ち、ディレスという国になった事を。

その国が飛び立つ時に、その国のために戦った一人の少年が、海の底に残った事を。最早誰一人、覚えているわけもなく——

そう言えば——と、金色の髪の少年は。

自身の髪が頻繁に、銀色に染まるようになったキツカケを。赤い髪の少女も出ていった後で、ふと思いついていた。

「ディアルスに行つてから、だったような……」

どう見ても千族の、瀕死だった少年を拾った養父母は。

まず千族の行方不明者一覧に、少年の姿がないか確かめに、一番先に向かった場所がその国だった。

初めてその、西の大陸の端の国に踏み入った時。

少年をその国に連れていった養父母の、先導する後ろ姿に。

少年は唐突に——自身が異端者である事だけを悟っていた。

——何処に行つても、誰も……オレの事は知らないと思う——

もしも知っている者がいるとすれば——それは唯一。

その時から現れ出した『銀色』に、他ならないと知るように。

「……戦うために、出てきたんだと思つてたけど……」

千族という化け物が、他地域より多く存在する国柄のためか、ディアルスの周囲は魔物も多く。何度となく、養父母と共に、戦闘に参加する機会が増えた事もあった。

「ひよつとして……銀は、全部……」

強い吐き気に襲われながら、昨夜に見ていたある一つの夢を、僅かに思い出したことで同じように襲い来る吐き気に、思わず少年は口元を押さえていた。

今この、金色の髪の少年がどれだけ弱小であっても。

少年が受け入れ、諦めた心を。その『銀色』は決して——見過ごす事も許す事も、出来ない苛烈さの持ち主だった。

——何で……殺さないの？——

金色の髪の少年には抗えない者も。少年の命を削り、大きく体力を消耗して、『銀色』なら抗う事が出来る。

例えば養父母が見逃した敵でも、『銀色』にとつて許せない相手なら、養父母に抗つても『銀色』は排除しようとした。

何故なら、この世界には何一つ——『銀色』を縛るものが、最早存在しないと知つてのことか。

「……そんな、こと——……」

しかしそれは、誰かの躰を乗っ取つてまで、呪われた生を繋ぐ少年にとつて——それだけは譲れない一線だった。

「ここまでして、生きてるんだから……」

いつかきつと、その理由に……出会う日はくると——既に存在する願いも含め、少年は強く声を呑み込んでいた。

\*

寝不足の不調の上に、吐き気まで強くなっていった少年に。  
たまたまタイミングが良く、その日の夕方前に、剣の師からある声がかけられていた。

「ユーオン。暇だったら医者行くぞ、医者」

「へ？」

御所中の衛兵をまとめる立場に近い師は、実に面倒見が良く。少年が御所に来た当初も、『銀色』後にぶつ倒れた少年を連れ、知る人ぞ知る、千族御用達の医者を紹介してくれたのだが。

「結局あの時、何もしなかったの？」

「俺の方は、よくわからんから一カ月後、また連れてこいつて言われてたんだよ。時間ある時に行く方がいいだろ」

今日、調子悪そうだな、と。そこまでお見通しらしい師に、はえ、と少年は声を呑み、黙って頷いたのだった。

そして。約一カ月ぶりに少年を再び診た医者は、ただ一言。  
「うむ。やっぱりよくわからん」

医者でありながら煙草をくわえ、不精に伸ばされた、肩までの黒い髪を適当に括り、黒い服に黒い目で少年を見る男は、白衣以外は黒づくめであり。外見だけなら良くて二十代後半としか見えないような、相変わらず若い風貌だった。

目付きも良くはなく、無愛想な医者は事もあろうに、

「オマエ、本当に生き物か？ 体重や身長のみならず、血圧の変動がほぼないどころか、髪や爪の一つも全く伸びてないな」  
「へ？」

はてな？ と首を傾げる少年を見て、医者は気怠そうにする。  
「はつきり言うなら、全然成長してない。元の年齢が十五なら、オマエは永遠の十五歳だろうな」

「なるほど……それで全く、剣が上達しやがらないのか……」  
何故か納得している師の横で、少年はうーんと医者を見上げ、  
「それって……解決する方法って、あるのか？」

尋ねながらも、意欲的とも言えない顔の少年に、何故か笑った医者は、煙草の火を消してにやりと少年を見た。

「そうだな。生き物なら生き物らしく、しっかりと栄養を摂るか。もしくは、霊なら霊、神なら神。その辺はつきりとしてから、身の振り方を決めるしかないな」

「ああ。ユーオン小食過ぎるだろ、そう言えば」

回答の謎部分を気にせず横を向く師に、うぐと少年は声を呑む。

「アレ以上は……ほんとに無理」

それでなくても、吐き気がひどくなっていた少年は、しかし元々食事をエネルギー補給目的のみと考えているらしく。倒れない程度に不定期に何かを口にするだけで、他の者と一緒に食事を摂る事はなかった。

「とりあえず食え。しんどい時は休め。以上だ」  
そしてやはり、菓の一つも出る事はないまま。

何かあったら来いと言う医者に、師は笑って礼を言っていた。

「なあ……アイツ、本当に医者なのか？」

ジパングらしからぬ石造りの建物が、京都の何処の一角かも、全くわからない診療所から出た後で。少年は不思議そうに首を傾げる。

「そもそも——さっきの場所、どこ？」

「さあなー？ 何処からでも行ける私空間、俺は動かないからオマエら訪ねてきやがれな超次元とか何とか、言ってたけどな」  
剣の師曰く。あくまで医者というのは、あの黒い男にとっては暇潰しであるらしく……いつでも来いと言うわりには、留守にしている事も多い無責任な相手らしかった。

「アラスの知り合いっちゃ、そんな奴ばかりだな」

「……ソイツ、ジユン達も何度も口にしてるけど、誰なんだ？」  
兄弟子達には、知り合いのお兄さん。剣の師や公家にとっては、旧い仲間という事は少年も把握していたもの。

当人の姿は全く見た事が無く、そっくりらしい人形の護衛は女性型であり、今一つイメージがわからないのだった。

「頼也と同じ、『守護者』の一人だけだな。アイツもそういや、ユーオンと同じで、最近は全然年とらねーなあ」

「『守護者』……？」

さも日常会話かのように、重大な単語を口にする師に。

「ゲンジの刀の、何か凄い宝石と……同じ物を持つてるのか？」  
師の持つ刀の尋常でなさに、とつくに気が付いていた少年は。公家からそれは、『宝珠』という名だただけ教えられていた。

「ああ、そーだな。俺も『守護者』の相方みたいなもんだし、頼也の分は日頃、こうして預かってるけどな」

「……天のヒトじゃなくても、持ってもいいのか？」

その『宝珠』——世界の五大要素たる、『力』の塊を預かる『守護者』とは、この宝の世界『宝界』の陰なる守り手だと、少し前にある占い師から聴いていた少年は。

自称死神、もしくは吸血鬼。その青年について、あまり良い単語を聞いた事がなかったために、不思議そうにする。

「あの悪魔憑きの女の、主なんかは……『魔』になったから、守護者になれなかったんだろ？」

天の民だったという女の話した、天を支配する『五つの家』は、その五つの『宝珠』の守り手の家の事だと……勘の良い少年はあっさり関連付けて捉えていた。

「らしいな。俺も頼也から、さらっと聞いたただけけどな」

そこまでわかって話す少年に、師もあえて隠し立ての必要を感じなかったらしく、当たり前のように話を続ける。

「それなら……」

「ま、その時その時で、色んな事情があったんだろうさ。今は、アイツはずっとフラフラはしてるけど、悪い奴じゃねえし」

いい奴とも言いが難いがな、と笑う師にとって。その吸血鬼——既に『魔』と化した者は、それでも信頼する仲間のようだった。

「そうだな。ユーオンとアイツ、迷子っぽい所が何か似てるぜ」  
どっちも耳、尖ってるし。など、どうでもいい共通点もあげて、首を傾げる少年に師はまたも笑うのだった。



五つの宝珠と、五人の守り手。

元は天空の島に在ったという、旧き天上人の最大の『宝』。

今は花の御所の公家達のように、宝界の各地にひっそりと、守り手達は溶け込んで暮らしていると、占い師は言った。

「その宝珠を守るために……ゲンジ達は『魔』と戦ったのか？」

「十四年位前は、多少はな。アイツとの付き合いもそこからだ」

「今はもう、戦う事はないのか？」

「さあな。今まではわりと平和だったが、クラルン所とかは、宝珠に関係ないトラブルも多少あったみたいだし」

更に別の『守護者』名を出した後で、剣の師は考え込む。

「特にアラスは……何か現在進行形で、宝珠関係のゴタゴタに巻き込まれてるかもしれねえ。何か様子変なんだよ、アイツ」

「……？」

東の大陸で最近、大怪我をしたらしいその青年は。その後から、剣の師や公家に対し、ある変化を見せているという。

「ユーオンの銀じゃねえけど、アイツも二重人格的な奴だな。

最近はおつぱら『翼権』ばかり、俺達の前でも出てやがる」

「ヨクル？」

その名は元々、青年から頼まれた公家が命名したものらしく。

二つの人格は仲良く共存していると言うが、師はやや不安気に、

「アラスは普通にいい奴だけだな。翼権は一見、アラスと大差ねーけど、必要な俺達にも剣を向ける。そんな所があつてな」

「——は？」

一挙に不審の顔をする少年に、師も少し苦笑いを見せる。

「ユーオンも気にしてたが、吸血鬼のアイツと俺達は、確かに何かが違うだろう。アラスはそこは、俺達に合わせるんだが……翼権はアラスを優先する。そんなところさ」

「……………」

師がそこで、むしろ心配そうに顔を顰めている理由は。

青年のその人格が頻繁に現れる事——それが意味する何かに、悪い予感を隠し切れないといった様子で。

「じゃあ、ソイツがゲンジ達の敵になったら、どうするんだ？」  
ずばりとそこに切り込む容赦なき少年に、これまでで一番師は

苦い顔をしたのだった。

「有り得ないって言えねえのが、アイツの困るところだ」

「…………じゃあ何で……そんな奴の事、信じてるんだ」

その可能性を認めながらも、あくまで青年への根本的な信頼を崩さない師の様子に、ひたすら少年は怪訝な顔をする。

師はそんな少年に、改めて余裕を持った顔で笑うと、

「ユーオンと同じさ。結局のところ、アラスも翼権も、何かを守るために必死なだけだからな」

「……………」

それがたとえ——彼らに仇を成す結果になったとしても、と。

「そっか……それなら……」

その根本を認めている師に、少年は他に何も言えなかった。  
「ソイツがもしも敵になったら——……オレが戦うよ」

弱小に呟いただけの声は、師には聞こえなかったようだった。

劍の師と共に、御所に帰り着いた頃には、辺りはすっかり、夕闇に染まっていた。

「今日はゆっくり休めよ。本当に顔色悪いぞ、ユーオン」

後、ちゃんと食えよと。うっかり領けない言葉をかけてくれる師に苦笑いつつ、少年は自らの居室に帰り……と思いきや。

「……そこで何やってんだ、あんた」

既に大半が暗がりとなった、御所の広い庭の一角に。

客人が自由に見てまわれる範囲とはいえ、普通では考え難い時間に出歩く人影を、険しさだけの顔で少年は見咎めていた。

「——こんばんは。アナタこそ、このような時間にいったい、どうされたのですか？」

人影はけろりと、それでなくとも暗い庭園で、更に光の少ない大樹の下に佇み。胸を刺された事など、既に忘れ去ったように平常心の、自称天の民も少年を見る。

「わたくしは元々、夕闇が好きなのです。悪魔憑きであった、後遺症でしょうか」

「……………」

「何かわたくしに、アナタは気になる事でもあるのでしょうか？」

平静且つ直球の、見事に無難な女に。少年は思わず、当初の思いをはっきりと口に出していた。

「オレには、あんたは——……悪魔憑きには見えない」

女はそこで、控えめながらも面白そうな顔で微笑む。

「そう見えていたら困ります。悪魔憑きの再発は、わたくしも望むところではありません」

そうなれば今度こそ、殺されますねと、まるで他人事のように女は少年に笑いかける。

「そういう事じゃない……オレには最初から、そうは思えない」あくまで険しい目付きの少年は。疲れの影響か、本来そこまで、口に出すべきでなかった事をその後につけ。

女は少年のその発言に、おや、と笑うように首を傾げた。

「それなら尚更、困りますね。アナタはまさか、悪魔憑きでも何でもない相手を殺そうとしたと言うのですか？」

「……………」

暗がりの中に在っても、女の存在感は薄められる事なく。姫と言うには力強過ぎる目線で少年に対峙する。

「アナタはともかく——それでは、烏丸殿も立場がありません。それでも……」

女はそこで、それなら女も疑問に思うという事を、包み隠さず口にした。

「それでもわたくしが、気になるというなら。何故アナタは、わたくしを見逃しているのですか？」

これまで決して、嘘をついたつもりのない女の揺るがなき目は。

迷いなく女を害した少年の、根本的な異端の歪み——

「アナタからは、わたくしよりも余程、血の匂いがしますよ」天性の死神たる少年を知るように、全ての表情を消して言った。

——ドクンと。記憶の無い少年を確かに震わせる女の言及に。  
それが女の挑発でも、己の真実であると正面から受け止めた少年は、ただ声を呑む。

「アナタは……わたくしの主と、何処となく似ています」

「……………」

自らの従兄、そして妹を手にかけて、『魔』となり何処の地へと消えた呪われし天の民は、

「主は自ら、汚れ役を引き受けたのです。わたくしはついに、そんな主を……救う事は出来ませんでした」

女にとっては、ただ憐れであったと。自ら破滅の道を歩んだ、一人の少年を脳裏に——女が少女だった頃の心を口にした。

それは確かに女にとって、その根本である信念であり。

「汚れ役……——って」

それでも少年は、ハ——と。女の平和さを心から嗤った。

「役でも何でもない。ただ、汚れただけだろ、あんたの主はその赤は決して、そんな信条で拭えはしないと。」

旧い剣の夢を思い出せない少年が、昏く歪んだ顔で笑った。

思えばその剣が、赤まみれになる前に望んだのは。

羽は黒くも、清らかだったある天の鳥が——

赤く染まる現実を拒んだ、強い衝動だった事は知らずに。

暗がりの中では、金とも銀とも判別が付き難い髪の色で。

少年は、日頃見せた事のないような昏い笑いを女に向ける。

「従兄はどうか、知らないけどさ。妹を手にかける必要性が、あんたの主にはあったのか？」

「……………」

母を害した従兄を、手にかけてという事情でも、それだけでは筋が通らないと少年はあっさり指摘する。

「そもそも、天に悪魔を呼び込む意味がわからない。ソイツはあんたが、そこまで庇う相手じゃないだろ」

かれこれ二百年の間、その主を探してきたという女の信念を、まさに全否定する少年に——……それでも女は全く動じず。

「主は……おそらく。自らを殺してもらおうつもりだったので」  
「……………」

「確かにアナタの言う通り。その結果、妹の命が失われた事は、主にとって痛恨であったと思います」

誰より本当は信賴していた、腹違いの兄と妹に、『魔』である己の幕引きを願った——そんな少年をこそ、救いたいと願った女の信念は。その時から何一つ変わってはいないと。

「そんなの、巻き込まれる方にしたら、たまったもんじゃない」  
それでもあっさり言い切る少年に、女は苦笑したようだった。

夕闇に溶ける薄青い影が、見守っていた事には少年は気付かず。

そうしてそのまま、噛み合う事はなかった女と少年の話を。

長年の悪魔から、解放されたと語る女は。

\*

新たな護衛が見つければ、今度は己の意志で主を探すのかと。

その日、最後にそう尋ねた少年に、女は意外な答えを返した。

「わたくしはもう、主を探そうとは思っていません」

最早女の知る主が、見つかる事はないと。二百年という時を  
思っただけか、冷静に女はそう考えたようだった。

「今のわたくしに何が出来るか。それをここで考えたいのです」

少年はずっと、言葉に出来ない違和感をひたすら抱える。

「アナタの助けが得られたのなら、本当に良かったのですが」

女は決して、嘘はついていないのに。

それなのに何故——この女の言葉を、受け止められないのか。

——あいつだけは——絶対に殺す——

女の無難で、平和な結論に比べて。

その昏く赤い夢があまりに、鮮烈であったせいなのか。

「……銀には……わかってるのかな」

寝不足なのに寝付けない頭で、ぼけっと天井を眺めながら。

それだけ少年は、拙く呟いていた。

寝不足が続いた少年の体が、ようやく本調子となってきた頃。

「ねえ、ユーオン。ちょっと相談していい……?」

想定外過ぎるその事態は、ある日突然少年を襲っていた。

「ツグミ? どうしたんだ?」

日頃から凜として、若年ながら公卿の家の気品を窺わせる、  
赤い髪の気丈な少女は。しかしその日は、何故か当惑感であり。

『レスト』って実際……どんなところか、知ってる?」

「——へ?」

あくまで引きこもる少年を置いて、結局馴染みのメンバーで、

その旅芸人一座を再び観に行った少女は。

少女達の顔を覚えていた花形の女から、公演の後ですっかり  
声をかけられ。何やら全員で、茶店に連れ込まれたと語った。

帰って来たその足で、真っ先に少年の居室を訪れた少女は、

「いきなりうちの『咲姫』にならないかって誘われたんだけど

……そんなのって、有り得るの?」

「——な」

驚愕の顔のまま、絶句した少年の正面で。僅かに伏し目がちに、  
肩に届くか届かないかの髪を、くるくるといじる少女だった。

「——絶対に駄目だ。有り得ない論外だ話にもならない」

あまりに驚き過ぎて、声も出せなくなった少年の代りに。

そのまま少女を、何故かくいくいと道場へ引つ張っていった少年に、剣の師——つまり少女の父の父は。少年以上に動揺し、必死にそれを隠す硬い顔で、すぐそう却下した。

「……………」

少女は、困ったような顔付きでうーんと俯きつつも。少しだけ恨めしげに、問答無用に少女を父の前に連れていった少年を、横目で見つめる。

「旅芸人一座なんてろくな奴らじゃない。いつ何処にいて何をするか、いつ帰るかもわからない奴らに大事な一人娘を託せるわけがない」

「……それは、父上の偏見だと思っわ」

むーと口を引き結ぶ少女は、冷静に懐から名刺を一枚取り出し。

実際に少女に話された事について、改めてそこで説明する。

「今日はあくまで、ちょっと話を聞いただけで。少しでも私が興味があるなら、きちんと一座の活動について、ご両親を含めいつでも何処でも説明に来ますって、そう言っただけ」

「——何だとお？」

受取った名刺の、マネージャーらしき者の名前と、何故か裏に書かれた花形の女からのメッセージに、師は警戒に満ちた目を、しかし少しだけ丸くする。

—お嬢様に惚れちゃいました！ 下さいなんて申しませんから、ジパング滞在の間だけでもお付き合いしたいです！ 霖—

筆跡はとても整う、かなり直球なメッセージに、少女自身、まだ戸惑いを隠せない表情で呟く。

「私なんかより、もつと綺麗で上手いヒト、きつと一杯いると思うんだけど……」

「いや、この一座見る目だけは確かだ間違いない」

びしっと、まっとうな謙虚さを持った娘に、素早過ぎる親バカ反応をする父。

「ツグミは……レストに少しでも、興味あるのか？」

ようやく、衝撃を少しずつ消化してきたらしい少年が口を開き。ともすれば、泣き出しそうな困惑顔で尋ねる少年に、

「……楽しそうだなとは、ちょっと思うけど」

まっすぐ少女を見つめる少年から珍しく目を逸らし、おそらく照れ隠しの不服気な顔をする少女だった。

仕切り直しに咳払いをしようとして、げほっと本気で咳込む、強い動揺を見せる師は、

「この一座のこと、ユーオンは知ってるのか……？」

「……知り合いの知り合い、くらいに」

「そうか……ユーオンから見たらどうなんだ、こいつらは実際硬過ぎる目つきと、目から上が暗黒に染まったような顔の師に、怯えを隠さず、座ったまま後ずさる少年は、

「いい奴らだけ……危ないと思う。ツグミにはびったりだと思っけど、オレもどうかと思っ……」

そんな矛盾した台詞を、辛うじて口にしていた。

勘の良さや、現状把握の力は極めて優れると、少年の特性を知る師は。そこでうんうんと納得したように、しかし実際は、ごくごとと機械のように硬く頷いた。

逆に、少し緊張の緩んだ表情で少女は少年の方を向く。

「合つてると思う？ 私に、こういうのって」

「うん。それはもう、まず間違いないと思う」

その部分は全く正直な気持ちと、飾る事なく口にした少年に、そつかと僅かに微笑んだ少女を前に、

「ユーオンてめえ。どっちの味方だこのヤロウ」

師はその首根つこを、あつさりと掴むと、

「その一座の所まで案内しやがれ。ヒトの大事な娘を誑かす、ふてえヤロウは——俺が直接、引導を渡してやる」

「ちよつと——父上……」

まるで猫のように軽々と少年を持ち上げた父は、最早娘の声は聞こえていないかのように、前だけを見ていた。

「……えつと。……行つてきます、ツグミ」

「バカ、私も行くわよ！」

少年を肩に担ぎ直し、無言でずんずんと先に進む父の背で、困ったように少女に笑いかけた少年に。ごくまっとうな感覚を保持した少女は、父の暴走を止めるべく後に続いたのだ。

基本的に。この一座とは、関わりたくなかったのに……と。

面持ちの暗めな少年の前で、少年達を出迎えた一座の花形は、心からまず嬉しげに笑った。

「うわあ、来てくれたんだ、イーレンちゃんのそっくりさんと、ジパングらぶりーな小鳥ちゃん！」

花形が二人存在しているこの芸人一座は、外回りと内回りと称する、軽業を中心とした青空下の舞台と、きちんとした場を借りる本格的な芝居舞台を、主に手掛けるらしく。

現在、少女に声をかけたもう一人の花形は外回り中であると、内回りが中心らしい幼げな花形が謎の呼称を口にし、赤い髪の子女に抱き着いていた。

「つて——……この名刺の奴も、今はいないのか？」

幼げな花形のあまりの毒気無さに、勢いを削がれたらしい師は、少年を下ろし、頭を抱えながら尋ねる。

「スカイちゃんはもうすぐ帰ってくると思うよう。霖は夜まで予定があるけど、良かったら入って、入ってえ♪」

一座が滞在している川辺のテントに、幼げな花形は躊躇なく、そこで待つようにと一行を誘い。

突然現れた、不穏さしかない顔付きの、ガタイのいい侍に、あくまで歓迎の眼差しを向ける花形の笑顔に、少年と剣の師は互いに目を丸くしながら顔を見合わせた。

「……………」

じろりと川辺で、少年を見ていた護衛の人形が、師の仲間たる吸血鬼に瓜二つな事も気付かず、誘いを受けた剣の師だった。

花形二人の専用楽屋であるという、舞台衣装と装身具が沢山置かれたテント内で。師の娘に声をかけた花形と、この一座のマナージャーを待つ間、落ち着かない体で地面の敷物に座っていた少年と師の横で。

「小鳥ちゃんはどうなお洋服が好きい？ 何か着てみない？」

「ううん……あまり着物以外、着た事なくて」

「ええー。何でも似合いそうなのに、もったいなあい♪」

幼げな花形は、ひたすら赤い髪の少女が気になるようだった。

そんな一方的に賑やかな少女陣を横目に、剣の師は少年に、こそこそと現状の確認をする。

「……あの子は何なんだ、ユーオン」

「えつと……この一座の花形の一人って事しか、オレは……」

困ったような顔で、それだけ少年が返した——その時だった。

「ルンは、我がレストのロリっこ担当。広い範囲のお兄さんの客寄せに、一役買ってもらっているのです」

すつと。テントの覆いを開けて、中に入ってきた黒い人影は。

「老若男女、いずれの世代にも受け入れてもらう事を目指した我がレストでは。小鳥のお嬢様のような、正統派かつ不滅の、ツンデレ素材を必要としているのです」

にこにここと、その——二十代前半にしか見えない黒っぽい女は。

長い黒髪を高い位置で一つに括り、黒の上衣と手袋を着けて、腰元に長剣を下げて場に現れていた。

「……………は？」

「????」

一見大人しげな黒い女が、見た目によらない軽い声色で言った業界用語の数々を、まずあまり理解出来なかった師と少年は、ただ呆氣にとられる。

「どうも、お初にお目にかかります。レスト千族マナージャー、スカイ・S・レーテと申します」

へ。と更に言葉を失う少年達の横で、現れたマナージャーへと振り返った花形が、

「千族で専属！ スカイちゃん、相変わらずうまいねえ♪」

ともすればただの親父ギャグに、本気で喜んでいる風の花形を、黒い女はよしよしと撫でまわす。

「うちのレストは、私のような行き場なき千族保護も兼ねた、旅芸人一座なのですよ。お宅のお嬢様には当然ながら、保護は必要ないので、純粹にスカウトのお話をしたいわけですが」

「……………は？」

マナージャーというイメージからは大きく離れた、清楚風なまっすぐの黒髪に、丈の長い黒の上衣と末広りの長い下衣の黒い女は。しかし口調は、営業そのものの軽さと速さで、師が呆氣にとられている横で。

何故か少年は——その黒い女の全身像に、唐突な吐き気と、強い眩暈を覚え、思わず胸を強く掴んだ。

そのため師と同じように、黒い女に咄嗟に反応出来ず。

黙り込んでしまった少年と師の前で、黒い女は、視線が合う

ように改めて正座し、師にまずぺこりと頭を下げていた。

「ま、千族と言ってもあまりに遠縁の私は弱小そのものでして。

どうぞご警戒なきよう、お願い致します」

「……ああ？」

そこでやっと、呆れたような声を師は絞り出す。

「ヒトの大事な一人娘に、突然妙な話を持ちかけておいて——警戒するなと言う方がおかしいだろ」

ふむふむ、と黒い女は、両腕を組んで何度も頷く。

「ご最もです。私が言うのも何ですが、信用しろという方が、無理のある話だと重々思います」

あくまでにこやかに、剣の師にまっすぐ対座する黒い女に。師の隣で少年はただ、ひたすら胸を強く掴み——

その何処か、苦しげな少年の異変に、黒い女を見ている師も、花形に未だ付き纏われる少女も、すぐには気付く事が出来ず。

「——え？」

ただ、パタ——と。座っていた体勢から、そのまま横向きに倒れていた少年に、場にいた全員がそこで同時に気付く。

「ユーオン!？」

全身の冷や汗と共に、苦しげな息遣いで横たわる少年の髪は、何故か自然に、そのまま銀色へと変貌していたのだった。

突然倒れた少年を心配し、呼びかける者の声も、全く届かず。ただその強い痛みが、銀色の髪の少年にこだまし続ける。

——あなたのせいよ……——

これまで何度も、少年を襲う事のあった赤い光景。

とつくに慣れていたはずの、それでも銀色の髪の少年だけが、その全容を把握していた——誰かの強い痛みと怨念の嘆き。

何故その黒い女が、少年にそれを突き付けるのか。

今まで一目も見た事がない。それだけは確信を持てる相手に。

しかし確かに黒い女は、金色の髪の少年には歯が立たない、確かな脅威を以ってそこに在った。

黒い女がそう言う通り——どれだけ弱小な存在であっても。

正直な話。それは、おそらく。

銀色の髪の少年にすら、歯が立たない相手でもあり。

「それなら……忘れてしまえば、いいと思うよ？」

何故か最後に、ある誰かに似た声が、少年は聞こえた気がした。



しばらくしてから。眠ったままで金色の髪に戻った少年が、ようやくその目を開けた時には。

「ああー！ 起きたよ小鳥ちゃん、小鳥ちゃんのおじさーん！」  
心配げに少年の様子を窺っていた幼げな花形が、少年の意識が戻った事を、円形に座る者達に慌てて伝えていた。

「ユーオン、大丈夫!？」

真っ先に駆けつけた赤い髪の少女を、少年は不思議そうに見る。

「……あれ? ……ツグミ……?」

まだ頭がぼやけたような少年が、それでも、ただ一つ。すぐに大きく気になった事があった。

「何で——……そんなに、怒ってるの?」

「バカ! 何時間眠ってたと思ってるのよ!」

そして少女は、珍しく申し訳なきような顔で、その後すぐに目を伏せていた。

「多分、この間に使った呪いがまだ、続いたままだったんだわ……『自重』させてた『銀色』が無理に出ようとして、大きな負担になっちゃったんだと思う」

その解除を忘れていたと、辛そうな目で俯いた少女に。何とか上半身をゆっくり起こした少年は、何で? と困ったように、穏やかに笑う。

「そっか。最近銀が出なかったのは、そのおかげだったんだ」  
それはむしろ有り難かったと、相変わらず平和な声色で口にし。

「そこまでして、無理に出ようとする銀が悪いだろ。ごめん、ツグミに気を遣わせて」

まだ少しだけ、痛みの残った胸をさすりながら、自然な表情で淡々と少年は口にしていった。

「——たく。ようやく起きたか、ちゃんと金色で」

少年が倒れていた間、ずっと長々と、一座のマナージャーに加え、帰って来たもう一人の花形とも話していたらしい師も、一度話を切り上げ、目を覚ました少年の方へやってきた。

「そこまでさつき、銀が出る必要あったのか?」

「……全然。何でそうなったのか、オレにもさっぱり」

不可解な師に、少年も全く同意で頷く。

「大丈夫? 今、ルンとスカイがお水を取りにいつてくれたわ」  
師の後ろで、黒髪の花形が心配そうな目でしゃがみこんでおり。しゅん、と親身に心配しているらしい姿から、何故か少年は、ふっと目をそらしていた。

「えっと……話はついたのか? ゲンジ」

そもそも彼らが、この一座の元へやって来た理由を思い出し、難しい顔の師を見つめて当惑気に尋ねた少年に、

「いや。今から十五歳以上限定で、飲みに行く事になった」

「——は?」

至ってあっさり、そんな返答をした剣の師に。一応は十五歳の妖精の躰を動かしていた少年は、数に入れられており。

呆れるように溜息をつく少女は、十四歳だから帰るようにと、わけのわからない展開が、少年を待ち受けていたのだった。

「えっと……何で、こんなことに？」

元々、食がかなり拙く、飲酒など全く未経験だった少年は、  
そもそも、成人前に飲み屋に連れていかれる事自体、本来は  
全力で否定されるべき事柄だったが。

「君も大変だねえ。倒れて目が覚めたばかりだって言うのに、  
まさか飲みに連れていかれるなんて」

にこにこ、少年の対面に座る黒い女が楽しげに笑い、

「女とだけ飲みに行くなんて、下手したら誤解されるだろう」

少年を連れてきた理由を、既婚者である師は事も無く明かし。

そうして、少年、剣の師、黒髪の花形、黒い女と。丸い机を

四人で囲む謎の事態に、ひたすら呆気にとられる少年だった。

「ゴメンね。もうちょっとだけ、今夜は付き合っただけ」

「……………」

明るく苦笑しながら、一番まっとうな声をかけてくれる花形の  
女にも何も返せず、少年はただ黙り込む。

少年が倒れている傍らで、赤い髪の少女のスカウトについて、  
ひたすら話していたという彼らは。

究極は座の一員として少女に旅に加わってほしいが、そうで  
なくても、現地座員のようなメンバーもその座には多々存在し。  
ジパングに来た時だけでも良いので参加しないかという事や、

「気が向いた時にひよっこりやって来て、臨時花形をしていく  
『咲姫』すらいるのよ。うちは最大五人の『咲姫』を置く形式  
だから、今は本当に可愛い女のコが足りてないの」

黒髪の花形は、戸惑う少女の手を愛しげに握って力説し、

「お嬢様はどうやら、並ならぬ身のこなしと旅への適性。また、  
芸の素養も持たれたご身分とお見受けします」

「そうなのよ。スカイの目はいつも確かだし、何より貴女……  
とてもいいコそうなんだから」

にこにこ爽やかな笑顔の黒髪の花形は、それがまさに本意と  
ばかり少女を見つめるのだった。

少なくとも花形の女は、少女を本気で気に入ったらしい事は、  
少女にもその父にも嫌でも伝わったのだが。

結局の所、一座を信頼する根拠が無いと、頑なに娘から手を  
引けと言いつ張る父に対し、

「まーまー。ここはお酒でも飲んで、腹を割って話しましょう」  
そんな事を言い出した黒い女は、その場で熱燗など用意させ。

一度飲んでしまうと、それだけでは物足りなくなつたといい、  
勢いで決まった現在の状況だった。

「……………」

そして少年は。その後、スカウトの話の続きなど全く出ない、  
わけのわからない現状に首を傾げる。

「あんたら……何しにここに来たんだ？」

既には、酔った師の娘語りと、花形の愚痴に占められていた。

「大体ねえ、内回りがある時くらいは、外回りを少なくともしたらいいのに。こんな夜まで働いた後で、内回りの練習もしろって、鬼でしょう、鬼！ 私は癒しが欲しいの、可愛い癒しが！」

「違えねえ。そりゃー花形さんも大変だな。うちの娘は確実に、癒しになるけど、あのもう一人の花形さんじゃ駄目なのか？」

「あのコは完全、男性向けなの！ 可愛いから許される的な、そんなお姫様はお呼びじゃないの！ せめてもう少しだけでも、営業や調整を手伝ってくれたらいいのに……」

「どうやら花形の女同士は、少なくとも黒髪の方からは、複雑な思いがあるようだった。」

「まあまあ。霖は芸事だけでなく、仕事も出来る女性ですから」「そんな事言っても、私だってまだ十八だし……色々したら、

肝心の芸は、ルンには全然敵わないし。そもそも私、スカイはお色気担当なんて言うけど、絶対そんなキャラじゃないし……」つまり確実に、未成年でかばかばと酒瓶をあけている花形は、ケープの下の、常に露出の多い恰好は本意ではないらしい。

「かと言って、小鳥ちゃんみたいに凛とした良さがあるわけじゃないし……わかってるのよ、私みたいに地味な女は、カラダを売りにするしかないって事は……」

段々と、花形の周囲の空気が重苦しくなっていた。

「霖。貴女から地味をとったら何が残るとゆーのです」  
そして更に、黒い女が面白げに場を煽る。

「うう——もういっそ、咲姫も降板させてくれたらいいのに。私がナナハ様直属だからって、みんな気を使ってるだけなのよ」

「霖が一番、レストの古株なんですから。当然でしょ？」

「そうよ、実力じゃなくて単に年功序列なのよ。みんな本当は、ルンや小鳥ちゃんみたく、若くて可愛いコを求めているのよ」  
「おい……と、置いてけぼりの師に、そこでようやく花形は、きつと涙混じりの視線を向けた。」

「可愛い娘さんがいていいわね。何この赤い髪、キレイ過ぎ？ 小鳥ちゃんてば貴男と奥様のいいとこどり？ 反則じゃない？」

「あんた……若いのに、苦労してんな……」

「よしてよ、同情はいらないわ。男なんてみんな、可愛いコが好きなんでしょう」

「いや。俺の連れも、黒髪で大人しめだけど……充分過ぎる程可愛いし、あんたもあんたの良さがあると思うけどな」

「慰めはよして！ 妻帯者のくせに何よ、卑怯よそんなの！」  
気が付けば、飲み屋の外の天気は、女の心情を表すように、突然の豪雨によつて、真つ暗に変貌していたのだった。

「……………」

ちみちみと、師から渡された盃を少しずつあけながら、黙って成り行きを見守っていた少年は。

「酒って……効率は、いいのかな？」

食物とは違う純粋なエネルギー源に。その本来の効用も知らず、段々と顔を赤くし、ふらふらしつつ、何故か気分は悪くなく。

「イーレン君。アレ、放つていいの？」

黒い女の声も聞こえず、気が付けば再び意識を失ったのだった。

にわか豪雨が過ぎ去った後で、唐突な飲み会はお開きとなり。行き道の道とは違い、師に背負われていた形で。

ぶるつと寒気を感じた少年は、師の頭の後ろで目を覚ました。

「……あれ？ 今——……どこ？」

「ばかヤロウ。知らない間に、熱爛三本あけてんじゃねえよ、未成年のくせに」

それを同伴した張本人は、悪びれもせず笑って声をかける。

「……話……どうなった……？」

まだ頭がぼけーつとし、心細いのか首にしがみつく少年に。

昔に、昼間は眠る事が多かった吸血鬼の少年を、同じように背負ってよく歩かされた男は、懐かしげに笑った。

「あの花形さんの勢いに押し切られたよ。ジパングにいる間、一公演だけでもって、承諾させられちゃった」

「……あいつ……よっぽどツグミの事、気にいったのか……？」

なんで……？ と背中では首を傾げる少年に、師は、

「ユーオンを手の平の上で転がしながら、全く出しやばらずに慎ましい鶴が、初対面から気になってたらしいぞ」

——は？ と少年はまさに固まるが、その旅する花形の真意を慮るように、師も難しい顔をする。

「多分、ある程度強い者じゃなきゃ、一座には誘えないって事じゃないか？ あの花形さんも、単なる人間じゃなさそうだ」

「それは……知ってた、けど……」

少年はまだ、くらくらふわふわとまとまらない頭で、急な雨で濡れた町並みを見回しながら、

「ツグミなら負けないと思うけど……でも、心配だな……」

何かを強く懸念するような、小さくも真剣な声色で呟いていた。

「ばか野郎。ユーオンが二十四時間体制で、専属で護衛するに決まってるじゃねえか」

「……へ？」

「それが最低条件だ。鶴に悪い虫、つかせたら承知しねーぞ」

既に一座のジパング滞在は始まり、今回は外回りの活動だけでなく、きちんとした舞台も行うために、一座は連日公演先の建物で目下稽古中という事であり。飛び入りの少女には特に、泊まり込みで急ピッチで演目を覚えてほしい、その間は自分が責任を持って少女を預かると、花形は硬く誓ったという。

「少なくとも三日に一度は、家に帰すと約束するっつー話だが。いきなりそんな、娘を一人で下宿させろと言われたってな」

「ってことは……ゲンジ……」

「ユーオンも鶴と、花形さんの所に泊まり込みだ。花形さんも二つ返事で、それがいいって承してたぞ」

「……——……」

それだけでなくも——関わりを避けていた一座との、思ってもみない試験に。動揺を超えて、少年は何故か全身が熱くなり。「了解……による……」

謎の語尾を口にした自分にも気付かず、深く頷いたのだった。

\*

四季を通して、風流な庭木が評判の『花の御所』では、最初に招かれた紅葉の季節とは違い、常緑樹以外はすっかり、葉を落とす季節となっていた事に、少年は気が付いた。

「そう言えば……もう、三カ月くらいになるのか」

ある秋の朝、目が覚めれば周囲には誰もおらず。

しばらく出かけてきます。留守をよろしくね。その二言だけ残された状態で、少なくともその後一週間、何の音沙汰もなく。

それなら良しと、一つ思い立った少年は――

記憶の無い少年の名前を引き出した占い師を、ある目的で、一人で訪ねてみようとその場所を後にしていた。

旧知の占い師の元へ、養父母が最初に少年を連れていった時。

―お主……非常に変わった様相をしておるな？―

占い師はともすれば、翠に光る妖しげな目線で、

―名は？―

あまりにあっさりそれを聞くので。少年の方もあっさりと、

「ゆ……おん？」

「そうじゃろ。お主、ゆ・おんじゃろ」

詐欺じゃないかと、そこでは思ったのだが。そうして催眠のように、少年自身から名前を引き出した占い師だった。

「……知りたかった名前とは、違う気がするけど」

それでもその名で、確かに間違いはない。それだけはわかった少年は、あっさり自らの名を受け入れていた。

ただしそこで、自身をユオンと思った少年とは違い、周囲はユオンと少年を呼ぶようになる。

「――ユオン！　しばらく留守にするって本当か？」

「あ………ジュン」

今や、少年をユオンと呼ぶのは、道場の方から駆けてきたこの兄弟子くらいだった。

それもひとえに、蒼潤という名を少年が略すので、兄弟子も少年の名を微妙に略しただけの話であり。基本的にユオンと、現在の少年は周囲から認められていた。

「でも、三日に一度は帰ってくるんだよね？」

兄弟子について現れた弟の子供の方は、冷静ではあるものの。

それでも、少年がこの御所にいて、「帰る」事を当たり前だと捉えているらしき二人に――少年は知らず、顔を綻ばせる。

「ツグミのお供だから、今までと似たようなものだと思うけど。

元々オレ、ツグミの所の居候だし」

「幻次さんも随分心配してるんだな。でも少なくとも、京都かその近くにはいるんだろ？」

その距離での下宿に、二十四時間体制のお供を。護衛としては弱小過ぎる少年は、それはお供と後で言い直していたのだった。

「早いよね。もうユーオン君に会ってから季節が一つ過ぎて、年も明けたんだよね」

「寒くなったけど、ユオンのその羽織物じゃ目立つと思うぞ。すみれさんが後でユオン、自分の所に来いと言われてた」

「そうなのか？ 何の用だろ？」

袖がない黒衣を基本着とする少年は、寒さや暑さには鈍く。それでも稀に外出する時や、冷え込んだ時は、少年達が初めて出会った時——少年が初めて、占い師を探して単独で遠出した時に羽織った、厚手のケープを身に着けていた。

「あれからは特に、変な人形が襲ってくることもなかったな。本当、何だったんだ？ あの人形は」

その時主に、複数の人形に弟を集中して狙われ、苦戦する事になった兄弟子は、今でもリベンジを目論んでいる様子だった。

「人形師が操つてるにしては、個々の動きが細か過ぎたし……それぞれの意志で、僕達を襲ったようにも見えましたよね」

「でも、死霊とかそういうのが憑いた人形でもないんだろ？」  
それなら術師たる弟にはわかるはずと、兄弟子は両腕を組む。

「依童——普通なら、霊を降ろすための人形ではあったけど。兄様の言われる通り、死んだ人間という感じではなくて」

「……………」

その出会いの時は主に、『銀色』が関わった時間が多いため、少年は特に何も言えず、黙って成り行きを見ていたのだが。

「ねえ。ユーオン君がこの間壊した、侍従の人形は……あれは、何だったのかとかはわからないの？」

それも『銀色』の仕事ではあったが。それでも、最初よりはもう少し状況を把握していた部分を、少年は素直に答えた。

「あれも——人間って感じじゃ、なかったと思う。多分何かの千族……それこそ『悪魔』が、動かしてたんじゃないかな」

「——え？」

そこで逆に、術師の子供は意外そうな顔をした。まるで少年が、そこまで把握していた事が想定外と言わんばかりに。

「もし最初の人形と、ユウヤ達から見ても同じだったら。最初の奴らも、もしかしたら……『悪魔憑き』だったのかもしれない」

『魔』に堕ちた何かという、悪魔の定義を把握した事により、少年は、観えていた事が何かを伝えられただけなのだが、

「じゃあ……死霊というよりは、一つ一つ全てが、何か目的を持った悪魔に動かされてたのかもしれないね……」

身近な現状把握に特化した少年と、心霊という存在に特に鋭い子供は、そうして容易く真実の一旦に辿り着いていた。

「動かされるといふより、ほんとに憑いてる感じだった——多分、自分の身体は持っていない、死んだ悪魔なんじゃないかな」

それは、主に没した人間を指す死霊よりも、ただ死者であると、身体を失った程度では、『力』も意志も明確に残し得る存在に、珍しく顔を顰めながら呟いた少年だった。

「……………」

それなら……と。術師の家の子供は、その父によく似た——

日頃はあえて封じた鋭い感性を持つ黒い目に、痛みを浮かべる。

「何がほしかったんだろう……その悪魔達は」

特に契約のために召喚されない限り、生半可な事では、本来人間に関わらない相手の不穏さを、しっかり感じたようだった。

「死んでも何かに乗り移ってまで。悪魔つても、確かに相当の執念だよな、それは」

うんうんと頷く兄弟子の前で、少年は心なしか、青みを帯びた紫の目を軽く澱ませる。

「……………」

—『精妖刃』の躰を勝手に動かす、アナタは何者ですか—

それには何か、今ここに在る誰かも理由があったはずだった。

この躰で目を覚ました時から、少年にはわかっていった。その理由に出会う事があれば、少なくとも『銀色』は見逃さない。

それでも、後数か月で、少年が養父母に拾われて一年になる。

その間何一つ、自分がここにいる理由に出会えなかった少年としては……不安が全くない方が、無理な話でもあった。

「なあ——ユウヤ」

難解な問いになるとは承知しつつ、珍しく少年は自ら口にした。

「何がほしいのか、自分でもわからない時……それを見つける方法って、何かあるのかな？」

それは常に——たとえ記憶があったとしても。この少年には、元々わかり辛いものであった事を、知るわけではなくても。

「……ユオン君……」

何処か神妙な少年に。子供は少しの間——躊躇いを見せたが。

「……そういう漠然としたのは……目的ある占いでもなくて。ただ、靈感を持ったようなヒト——その方がわかると思うよ」

この相手に小手先の返答は通用しない、それをも知るがために、

「ユオン君みたいな、直観でもなくて。誰かの存在や願い、心靈……無意識を見てしまえるのは、靈感くらいだと思う」

だからと、困った風な、それでも安堵した顔で子供は微笑んだ。

「根拠はないけど。僕は——ユオン君はそう遠くない内に、待つてるヒトに会えると思うよ」

「……………」

「ヒトかどうかも、本当はわからないけど。でも……向こうも、ユオン君を探してる気がする。だから——」

心配はないよと。そう断言する、天才と言われた術師だった。

そうして、その父の公家とよく似た優しい目で微笑む子供に。

「……………ありがとう」

何故かごく僅かの——公家に会った時と同じ懼れを抱えながら、少年は、申し訳なき気な笑顔で礼を口にした。

—アナタの正体は。アナタは明かす気はないのですか—

この優し過ぎる場所に迷い込んだ、異端の者を責めるように。

青く涼やかな声が、いつまでも少年の脳裏に響き渡りながら。

兄弟子に言われていた通り、自分を呼んでいたらしい、師の連れ合いの所へ顔を出した後で。

「あれ——……ユーオン？」

これまでとは違う風貌で、玄関へ出て来た少年を、赤い髪の少女が面白そうに出迎えていた。

「どうしたの？ 袴だけじゃなくて、着物まで袖を通すなんて」「……寒いだろうからって。スマレさんが、着付けてくれた」

当初はスマレと、不遜にも人妻を呼び捨てにした少年には、すみれをすみれと呼んでいいのは俺だけだ！ と剣の師から、きつい拳骨がお見舞いされ。その後少年が唯一「さん」付けで呼ぶ女性は、少年を御所に引き取った公家の実姉でもあった。

「似合ってるわよ。さすが母上、シンプルだけどいい生地ね」「ツグミの隣で歩くなら、変な恰好するなって怒られた」

黒衣の上から、武家に多い裾の短い、白の街着を着たはいいが。兄弟子も千切るような、ゆったりの袖が少年は不服らしく、

「これじゃ動きにくいって言ったら、オレは下手に動くなつて。スマレさんってどうして、ヨリヤよりあんなに厳しいんだ？」

—お主のような、動くだけで命を削る下法はもつての他じゃ。もう少し違う戦い方身につけられよ—

ばっさりと。少年の目下、最大の難問を、言霊も介さずに、絶対服従の強制力たり得る念の強さを持つ女性の声だった。

「仕方ないわよ。剣もダメ、体術もダメのユーオンの、唯一の特技と言ったら、あの変な白い光くらいじゃない」

「変とかヒドイな。オレには命がけなのに」

その光とは、『銀色』が出る時には特に強まる——少年の持つ剣を青銀に染め、少年曰く『悪魔憑き』らしき人形を一太刀で崩壊させた、何かの攻撃に纏わせるタイプの『力』だった。

「だって、物には全然通じないのに、『力』ならほぼ、どんな相手でも浸食しちゃうなんて反則じゃない？」

『力』と一口にいつても、その原材料たる魔力や霊力、体力、気などを始めとし、陰陽術や呪術などの魔道、または先天的な体質など、様々な生成法と結果が存在するこの世界において。その相性や様式に縛られずに、全ての『力』を、ともすれば無効に出来る可能性を持つのが、その白い光らしかった。

「あれを使う度にユーオン、いつも死にそうになるんだから。母上の言う通りよ、何か違う方法を探さないと」

「……………」

そのため、先日の刃傷沙汰の後、一週間以上眠り続けた少年だったが。あまりに弱小な自身の唯一の切り札は、そう簡単に手放せないのも確かだった。

これからしばらく、赤い髪の少女が下宿する、『レスト』の滞在先へと二人で向かう道すがら。

そもそも少女は、半分呆れたような顔で口にする。



「私のお供なんかして良かったの？ ユーオンは、剣の修行がしたいんじゃないの？」

「うん。だからゲンジの命令は、一応絶対だけど？」

「……いつの時代の師弟関係よ、それ」

全くと少女は、キョトンと不思議そうな少年を前に溜息をつく。

「父上には、私から言っておくから。ユーオンは御所にいて、今まで通りにしてなさいよ」

「何で？ オレはツグミと一緒にの方がいい」

——と。あまりに直球な少年の一言に、赤い髪の少女は、ムッと不服そうに……そのためか赤らめられた顔で少年を睨む。

「どうしてよ。そもそもユーオンは、剣を習うまでは、御所にすらいたくないって駄々こねてたじゃない」

この少年が一番最初に、少女達の居所へ連れてこられた時に、身元不明のため送られた拘置所から、引き受けられたばかりの少年は……何故か拘置所へ戻ると言い張ってきかず。

「だって、それが一番無難だし」

少年にとつては、連絡を取りようのない養父母にも、新たな誰かにも面倒をかけない選択が、それだっただけであり。

「何がどう無難なのか、相変わらず意味がわからないわよね、ユーオンの発想って」

しかし公家以外そんな内面は、少年自身も自覚していなかった。

「正直少し、安心したし。オレに護衛は、出来なさそうだけど……でも、ゲンジがその方がいいなら、オレもそれがいい」

「何よ。護衛なんていらなくて、わかってるんじゃない」

うん、と少年はあっさりと頷く。

「オレより確実に、ツグミの方が強いし」

「それはともかく、私は私のやりたいようにしてるんだから。」

……ユーオンだって、私に合わせる事なんてないのに」

それが結局は、気になるとばかりにそっぽを向いた少女に、

「——ツグミは、いい奴だな」

不服げな赤い髪の少女の横顔に。少年はただ穏やかに笑った。

「……何でだろ。ツグミは全然……知らない奴なのに」

そして少年は、不意に何処か。遠い所を見つめる目つきで、

「オレはどこかで……ツグミに、会った事がある気がする」

少女の横顔を切なげに見ながら——そんな事を呟いていた。

しかし次の台詞には、何の切なさの一つも見られず、

「ツグミを二で割ったみたいな奴ら。オレは知ってる気がする」

「——はあ？」

何じゃそりやと。少年の儂い目つきとは裏腹に、赤みがさしていた少女の顔には併せて怒気が宿った。

「ちよつと。ユーオンの中で、どれだけ濃いキャラなのよ、私」

「いや……そういうわけじゃ……」

何故不意に、そんな事を思ったのかは少年にもわからず、

「名前とか雰囲気とか……そういう感じで割っただけだと思う」

「それでも意味わからないし。っていうか割るって何で？」

気高くも優しくかった、ある鳥と似た心や。その羽を受けた者の名が、旧い言葉で『鶇』を意味する事も思い出せないままで。

何かとそうして、一般的な感覚から何処かずれたお供を横に。

沢山のテントが張られた川辺へ、赤い髪の少女は辿り着いたが。

「きやああ！ 小鳥ちゃんてば、本当に来てくれたの……!？」

ここまで話を運んでおいて、それでも半信半疑だったらしい、黒髪の花形がその姿に気付く。僅かに緊張の顔をする少年には目もくれずに、少女の方へと駆けつけてきた。

「あ、えつと……すみません、よろしくお願いします」

「いいの、いいの！ 他人行儀は一切なしで！ 何かあったら、いつでも私に遠慮なく言って！ もしくはスカイをこき使う！」

花形の女は余程嬉しいのか、呆気にとられる少女の手を強く握りながら、胸元の大きく揺れる蝶型のペンダントも気にせず、ぶんぶんとその手を振り回していた。

「えつと……」

そして少年は。堤防に座り、この一座の護衛とマネージャーと、当たり前のように気軽に話している人影に気が付き。

「……何でいるの？ クヌギ」

「——あれ？ ユーオン君だ」

にこにここと、帽子のよく似合う少年は、隣に座る人形の護衛と、傍らに立つ黒い女の間で、楽しげにこちらを見るのだった。

「凄いだよ！ リタンさんはアラス君と本当そっくりだし、スカイさんは知り合いが僕の友達かもしれないって言うんだ！」

「……はえ」

「僕も何か、スカイさんと初めて会った気がしないんだけど！——って全然、見た事も喋った事もない人だけど！」

楽しげな相手を前に、少年は難しい顔で護衛とマネージャーを見つめ。同じように難しい顔の護衛と楽しげなマネージャーは、まさに二人の少年を一人ずつ反映しているようだった。

「樞君はいいコだねえ、騙しやすそうだねえ。丁度いいから、君もレストで働かないかい？」

「ええつ？ でも僕、大した事出来ないけど？」

「そんな事はない。作家から演出家、下働きから介護士まで、ありとあらゆる職種を求めているんだよ、我がレストでは」

「……何か最後、変なの混じってなかった？ スカイさん」

「……」

妙に楽しげな隣の二人とは裏腹に、少年と護衛はただ、黙ってしばらく睨み合っていた。

しかしそれも、護衛が最初に口を開くまでの短い間であり。

「……海底らしいです」

「——は？」

「精妖刃が買った、その古い剣は。東の大陸の海底遺跡からの発掘品だと、スカイが言っていました」

何故か淡々と、護衛は唐突に、無表情にそんな事を口にした。

「……私の主が、その仲間の、アナタが滞在する御所の公家と、話したところによりますと」

「——？」

「その剣に宿る何かの力が、アナタを動かし——今のアナタの、意識を保っている源のようですね」

「……………」

それは……と。少年は、困ったように首を傾げ、

「知ってたけど——……………あんたやあんたの主は、そんな事を聞いてどうするんだ？」

「……………」

人形は黙り込むが、何故か互いに警戒は緩んだ状態でもあった。

「……………リンじゃないんだな。あんたの言う主は」

「彼女は雇い主です。私の宿主になれるような力の持ち主は、ここ数百年は、黒の守護者くらいでしょうね」

その、『水』の力を司るといふ『守護者』の色に、

「でも——リンがいれば、あんたは強くなれるんじゃないか？」

同じ力を冠する黒い柄の剣を持った少年は、淡々と尋ねる。

「それでアナタは、私を警戒しているのですね」

「……………」

「霖はアナタの剣を、確かに今でも欲しいようですよ」

もしもその花形が、この護衛に命じて。力づくで少年の剣を奪おうとすれば、それは少年の終わりを意味する事態だった。

「それでも……………」

少しだけ呆れたように、護衛は横目で少年を見つめると、

「私と霖以上に、アナタには警戒すべき相手がいますけどね」

記憶の無い少年のルーツを、わざわざ情報を与えた意図の一旦。

人形の主が巻き込まれていた事態を、話す事は出来なくても

——いざれ深く関わるはずの、ある因縁を持った少年に対し、僅かな憐れみと共に口にしていた。

気が付けば帽子の少年とあの黒い女は、賑やかになり出した

花形達のいる方向へ戻っており。

二人だけで堤防に座っていた、少年と護衛の人形だった。

「警戒って……………？」

少年にとつては、この人形は一座の護衛でしかなく。

この一座で警戒すべき者は、目下その二人だったが。

「二百年以上前の、黒の守護者を殺した者の側近が——今は、アナタの近くにいますはずですよ」

「——え」

「この身は、現在の黒の守護者と前代の黒の守護者の、両方の魂に宿った経緯があります。そして——その宿主達の記憶も、多少なりと把握しています」

二代に渡り、その運命に関わる事になった古き『力』は。

本来は畑違いだった宿主達に、しかし深い思い入れを有し、今また動き出した、宿主の運命に自らの意思で関わりと決め、本当に久々に、現世に介入する気になった『力』だった。

一方で、人が集まっている中心地では。ひとまず何か、現在出来る芸をと求められた赤い髪の少女が、公卿の家の娘として、適当に嗜んでいた舞の一つを軽く披露していたところで。

「やばい！ 小鳥ちゃん超やばい！ 激かわいい！！」

テンションが上がる一方の、黒髪の花形の頭上で、もくもくとどす黒い雲が誰の目にも明らかに広がっていた。

「霖ー、抑えてえ。大雨降っちゃうよ、げりら豪雨来ちゃうよお」

「それもまた一興かと。しかしこれなら、明日からでも鶴さん、外回りお願い出来そうですね？」

「ええっ！？ 鶴ちゃん凄いい、頑張れー！」

暗くなってきた空の下、氾濫すれば中々規模は大きいだろう川の前に、少年は怪訝な顔で護衛を見つめる。

「守護者を殺した奴の……側近？」

「彼女が何と名乗っているかは知りませんが。あれは確かに、前代の黒の守護者の顔見知りであり——更に前の黒の守護者を殺した者の、そばにいた女です」

そこで少年の脳裏で、ようやくこの人形と、少年の現在の、大切な居場所が繋がっていた。

「わたくしの主は、共に育った自らの従兄を手にかけるほどの、悪しき『魔』へ変貌してしまったのです——」

「……」

それでも少年は、それを言い出した人形の意図が全くわからず。

「オレに——……何の、関係があるのさ？」

少年はあくまで、天の民や守護者など、この京都に来るまでは全く関わりを持った覚えはなく。目の前の人形と同じように、畑違いの存在であるはずだったが……しかし人形は言う。

「彼女はアナタが——欲しいのではないですか？」

「アナタは……わたくしの主と、何処となく似ています——」

「彼女には大した力はありませんが。意思の強さに関しては、どうやらアナタの比ではなさそうです」

「……」

それはこの、自らが曖昧である少年にとっては。脅威となる可能性を、そこまで知っていたわけではない人形だったが。

「アナタを連れていけるまで、彼女は留まる気かもしれません」  
渦中から一歩、あえて離され。事情を深くは知らない人形は、ただ憂い気に少年を見て、それ以上は口にしなかった。

「……」

少年はただ、大切な場所に居座る、二つの異物に顔を歪める。

「あんた……ここに、何をしに来たんだ？」

それがもしも——自らの責でもあったとしたらと。

思わず口元を塞ぐ程の、強い吐き気を必死に抑えながら。

ボツボツと。黒く染まり切った空から、大粒の雨が、やがて降り落ちて来ていた。

「あっちゃー。本当に降ってきちゃいましたかー。皆様撤収ー、テントが流されないよう、注意してくださいさーい」

「ほらあ、だから言ったじゃない、スカイちゃんてばー」  
うわーん、ごめーんなどと、何故か黒髪の花形の声が響く中で。

しかしもう一人の花形の少女は、赤い髪の子に何故か突然抱き着いていた。

「!？」

「でも嬉しいー。霖がこんなに元気なのって、イーレンちゃんいなくなってからは久しぶりだあ。ありがとうお、小鳥ちゃん」  
半分涙目で強く抱き着く幼い花形は、どうやら本気で、相方の花形の事を心配している様子だった。

「ユーオン君ー! 濡れちゃうよ、テントに入れてもらおうよ!」  
遠目から自分を呼ぶ声に、少年はようやく、ハッと我に返り。

「……行きましょう。お互い、雨と相性は良さそうですー」  
すつと立ち上がった護衛は、最早ほとんど少年に対し、警戒は無くなった様子だった。

「直配が続けば、中身はともかく器は傷みそうです。せいぜい大切に使うとしましょうー貴重な、相性の合う器は」

「……………」

少年もただ、慥然と黙ったまま、後に続くしか出来なかった。

\*

三日に一度は、少女と共に帰るとはいえ。世話になっていた御所を、しばらく後にする事になった時、少年にまず浮かんだ、素直な感想はそれだった。

—正直少し、安心したし—

当面の行先は、それはそれで、問題だらけの居場所でもあり。しかしそれでもここ最近の少年は、御所にいる時は常に。

ある人影を目にすると、すぐさま浮かぶ葛藤を呑み込む事に必死で、何処か落ち着かない日々でもあった。

—……殺さなきゃ、いけない—

その確固たる思いは日に日に、強くなりつつあった事と、  
—でも……殺しちゃいけない—

根拠のわからない躊躇いに戸惑い、それでもよくよく考えれば、それが妥当だと。

公家にこれ以上迷惑をかけないためにもと、そう思う傍から、それなら尚の事殺さなければいけないと—

まさにループする思いを、持て余していた少年だった。

「……何でなのか、せめてわかればな……」

どちらの思いにも、結局はつきりわかる理由はなく。それ以外基準を持たない少年の欠損は、じわりと足場を侵し続けていた。

「うわあ、鵜ちゃん、可愛いよ！ 今日花山吹の重ねだね！  
季節ちよつと早い気がするけど、鵜ちゃんにピッタリの色目だね！」

「……何で毎日来るのよ？ 榎」

浅紅と黄の色合いの、舞い用の着物を羽織った赤い髪の少女を、  
帽子の似合う少年はパシパシと。撮像という機能があるらしき  
PHSを片手に、あらゆる方向から撮り回っていた。

「写真送ってほしいって頼まれてるんだ！ 学校さえなければ  
絶対、観に来たかったって言ってたよー」

早速外回りで舞をする事になった少女も知る、PHS仲間から  
頼まれたのだと、主語を出さずとも通じる二人を横に。

「オイ。イーレン帰ってきたなら、金返せよ、金」

「……ごめんなさい。ヒト違いだ」

一時要員として一座に加わった少女の、更に一時の供の少年は。  
以前の護衛の妖精に似るといふ少年に対して、一座の者から  
度々、そうした声をかけられていた。

「ああ？ 整形した程度で俺の目はごまかせんぞ！ お前とは  
いつか決着をつけると言ったじゃないか！」

「ごめん。もうソイツ、というかオレの負けでいいと思うよ」

ひたすら誰相手も、苦笑うだけでやり過ごす。そんな少年を  
見かねてか、何故か少女が、その事情を彼らに尋ねていた。

「ねえ。そのイーレンってヒト、どうしていなくなったの？」  
「おお？ ニュー咲姫ちゃんじゃないか！ うわ、本物まじで  
らぶりー！」

「違うけど……せめて候補でとは、霖さんに言われたけど……」  
捕まえた小道具の男は、飛び入りの少女の事も知る、一座では  
情報通ともつぱらの噂だった。

「イーレンの奴だあ？ アイツ、ルンと仲良くやってたくせに、  
カラスにまでモーションかけて、三角関係作りやがったんだよ」  
「鴉？」

どうやらそれは、黒髪の花形が以前言っていた『臨時の咲姫』  
らしく。今はいないが、たまに顔を見せるのだという。

「発端は、カラスがイーレンに、背格好が探し人に似てるって  
言っただけなんだけどな。そこで調子に乗ったバカ、カラスに  
声かけまくって、怒ったルンが二人に詰め寄ったんだよなー」

「……。何ていうか……ろくでもないわね」

最もとぼつちりは、巻き込まれた臨時の花形だっただろうが。  
日頃はふわふわとしているが、幼げな花形は、早とちりかつ  
激昂しやすい性質であるらしかった。

「ルンとイーレンがデキてるのも、そこでわかったんだけどな。  
呆れたカラスはしばらく来ないってどっか行っちゃって、我に  
返って後悔したルンがイーレンをふって、その後イーレンも、  
どっか消えちまってるな。イーレンを弟みたく可愛がってた霖は  
落ち込むわ、それを見て更にルンがうわーんと後悔するわで。  
大変だったんだぜ？ ここんとこのうちら」

ふーん……と。明らかに楽しげな小道具の男の前で、赤い髪の少女はじーっと、無表情に斜め後ろの少年に振り返り、

「……何でこつち見るのさ、ツグミ」

何故か少年も、とてもバツが悪そうにするのだった。

「——うわあ！ これひよつとして、今度の舞台の生脚本!？」

折良く、帽子の少年の歓声が響き。そちらに呼ばれた少女と、お供の少年まで、何故か厚い台本を一つずつ受け取る。

「鶯さんは早速ですが、ヒロインをお願いします。相方は毎回、男装の麗人でさせるのですが、今回はリタンにお願いしてます」  
う。とさすがに少し緊張し、息を飲む少女に黒い女は、

「この台本、使えるのが久々なんですよー。ルンだとキャラが違うし、無理を言つて霖にお願いしようと思つてたんですが、ちよつと霖だと、もう大人過ぎるんですよねえ」

「わかつてるから。そこ、念押さなくてもわかつてるから」  
笑顔ながらも、青筋をたてている花形をもともせず、大体のあらましをまず語るのだった。

### 『王女と護衛の温泉物語』

使われた三つの単語の、唐突感がどうにも隠せず。艶も全く感じられない題の演目は、しかし上演の度に何故か好評らしい。

「我がレストの最大のスポンサー、ディアルスに伝わる昔話で、ディアルス前身の大国ディレスの、建国物語らしいのですよ」  
温泉が名物だったという旧い国名が、そこで出される。

「資源の不足に苦しむ、凍土の自国のために、王女自ら護衛を連れて、西の大陸を駆け回るお話なんです。最終的に、自国の温泉を売りに、見事近隣地域と交易を確保し、一緒に頑張った護衛と結ばれる……心温まるサクセスストーリーですね」

「ディレスに伝わる伝説なのよね。ワンピースと長いブーツがトレードマークの、元気で優しく、賢い王女様」

「その三拍子揃うと意外に演るヒトを選びますからねえ。特に若い王女なので、鶯さんならびつたりなのです」

「ちよつと行動は破天荒な所もあるけど、その辺が楽しみね」  
その演目では、ヒロインと相手どちらも演じた事があるという黒髪の花形は、研究し尽くした台本を開いてそう笑っていた。

「うーん……」

黙つてじつと周囲の話を聞きつつ、台本を覗む少女の後ろで。  
「……………」

特に自身は関係ないので、さっさと先を読み進めていた少年は。  
「……………」

とても強く、優しい好青年ながらたまに間の抜けた護衛を、バカと窘めつつ心から信頼して連れ回し。時には自らも武器をとつて、国の未来を切り開いていく気丈な王女の物語に。

「——アレ？ ユーオン君……大丈夫？」

「……あれ。ほんとだ」

何故か拙く、涙していた少年に気付き、茫然としていた。

「これそんなに哀しいお話なの？ あの穏やか情熱クール系のユーオン君が、涙する程って！？」

慌てて台本をめくっていく相手に、

「穏やか情熱クール系って何だよ？ クヌギ」

不可解げに苦笑しつつ目端を拭うと、またも細い涙が伝わり。

台本を閉じてようやく、その不可解な流れは治まっていた。

「え？ 何かユーオン君、いつも穏やかだけど、蒼ちゃんとは

熱く剣の修行してるし、鶴ちゃんや悠夜君には冷静な感じだし」

そしてこの帽子の少年の前にいると、普段より表情が豊かだと、

赤い髪の少女から言われた事があつた少年だった。

「それにしても、何の場面読んだの？ ユーオン君」

帽子を落としそうな程首を傾げる相手に。アハハと答える。

「何だっけな。王女が国のすぐ近くの鉱山で、そのの奴らに、

自分の国と交易しろ、でないとなんと鉱山を丸ごと温泉にするって、

交渉してた気がするけど」

「それ泣けないよ！ っていうか何か怖いよ王女様！？」

別の意味で涙しそうに、帽子の少年はひきつっていた。

「よそ様の地域に、完全に脅迫じゃん！ いくら温泉と言えど、

鉱山が水浸しになったら、鉱夫さん達はどうなっちゃうの！？」

ていうか温泉って後からつくれるの！？ 温泉地獄なの！？」

「うん。うまいやり方だよなって」

「うまくないよ、ヒドイよー！ 恨み買っちゃうよ、そんなの！」

「だよな。でも、そこで採れる鋼の斧で斬りかかられるけど、

踵落としだけで斧を割るみたいだ。ツグミなら出来るかな？」

「やらないから、本気で鋼とか使わないから！ ていうか本大王女様何者！？ ユーオン君も鶴ちゃんの事どう見てるの！？」

そんな風に、外野がにわかに、賑やかになったのを傍目に。

黒髪の花形に細かく説明されながら、台本を読み進めていた

赤い髪の少女は、ある場面でハッと目を見張らせていた。

「？ どうしたの、小鳥ちゃん？」

「ここ、本物使うんですか？ 頭上のセット、全部落とすって」

その場面で使われる小道具が、少女には見過ごせる物ではなく、

「そうなの、うちは内回りすら、アクション重視だから。でも

確かに危ないわよね……偽物にも出来るから、無理しないで♪」

初心者である少女を気遣い、花形はそう笑ってくれたものの。

「……ちよつと……考えていいですか？」

「——え？」

むむむと台本を前に、何故か難しい顔で黙り込んだ少女だった。

「あれ？ 鶴ちゃん、どうしたの？」

少年達がそんな少女の背後に来たが、少女はまだ悩ましげで、

「……………」

少女のその後ろ姿に、少年は何故か——突然、困り顔で呟いた。

「……ツグミ……はしたないのは、いけないと思う」

「——って、何なのよアンタ！？」

えっと、と困りながら言葉を詰まらせる少年の前。珍しく少し

動揺したような赤い髪の少女は、咄嗟に丸めた台本でスパンと、

軽快に金色の頭をはたいていたのだった。



内回りの演目と、練習予定についての説明が終わった後で、その日の外回りが始まり。

鶇という名をそのまま芸名に、しかし何故か内輪では小鳥と呼ばれる、赤い髪の少女だった。

「ルンと私も、セットみたいな名前だしね。うちには後一人、鶇もいるから、鳥同士でちょうどいいわ♪」

平坦な広場や、良い時には能楽堂があるような場所を回り、各地のワープゲートまで駆使して、京都を拠点に、少なくとも周辺地域一円は得意先を持っていった。

「外回りで内回りの宣伝をして、各地から客を集めるのです。てわけで、君達はチラシ配りをお願いしますねえ」

どうせついてくるならと、少年と帽子の少年は分厚い紙の束を渡され、黒い女に体よく使われていたのだった。

「何かスカイさん、誰かに似てる気がするな。でも誰かなあ」「にしても……何でクヌギまで手伝うんだ？」

「ええ？ だってこういう、色んな所に行くのって珍しいし、楽しいよ♪」

一座の中では、すぐに行方不明の妖精扱いされる少年にとって、少女がいない間、知り合いの話し相手がいるのは正直有り難く。舞や芸が披露される傍ら、隙あらば広告を配りつつ、どうでもいい様々な事を喋り合う新鮮な日々となっていた。

「僕はねえ、みんなで何処か、旅に行く初夢を見たよ。色んな知り合いがごちゃ混ぜで、よく考えたらヘンだったけどね」

「ふーん……無くもなさそうだけど、縁起がどうかは、よくわからないな」

ちやうど、年が明けてまだ半月程度であり、ユーオン君は、初夢見た？ という話題が少年には印象に残るものだった。

「オレもその日に、ヨリヤ達に訊かれたけど。よく見る夢を、そのまま見ただけだったから、あまり意味はないってさ」

「ええー。何かしんどそーな顔だけど、嫌な夢なの？」

「そうかな？ ……何かいつつも、妙に吐き気はするんだけど」それ、明らかにしんどいんじゃない！ とツツコむ相手に、夢をあまり覚えていない事もあり、アハハと少年は言葉を濁す。

「それより、暮れに見た夢の方が、何かハッキリ覚えて……夢は沢山見るけど、こんなに覚えているのは珍しいんだ」

「そうなんだあ。どんな夢だったの？」

ハイ。とまた、通りすがりにしつかり広告を渡しつつ、帽子の少年は楽しげに、珍しくよく話す金色の髪の少年を見る。

「それが……クヌギもいて、ジュンもツグミもユウヤもいて。みんなで何でか、草原みたいな所にいたんだけど」

「へえー。ユーオン君が外にいるの、珍しいね？」

「オレもそう思っただけ。でもその夢では、それが当たり前で……何か色々、おかしいんだ、その夢」

？ と首を傾げる相手を前に、少年はふっと苦笑した。

「オレさ。今はいないけど、妹みたいな奴がいるんだけど」

「ええ！？　ほんとに!？」

身元不明の少年の、意外な事実帽子の少年は目を丸くする。

「なのにその夢の中では、そいつがいない事になってるんだ。でも途中で、そいつを思い出して……いないのはヘンだって、そいつを探して、気が付けばずっと一人で走ってた」

「――」

彼らの傍から、一人で走り出したという、その夢の中にいた少年の――孤高な焦りを汲んだように、沈黙が訪れる。

「何処に行ったのかよくわからないけど、足がもつれて転んで、立ち止まった時に。急に誰かが、空から降りてきて……」

「降りてきて!？」

両手と膝をついて、理由のわからない焦りに支配されていた、その夢の少年の前に。

あまりに唐突に現れた、銀色の髪の子がいたと少年は言う。

「ソイツの事……オレは多分、凄くよく、知ってるはずなのに」

銀色の髪で、赤い目の少年――

人懐っこい顔で笑う、それでも鋭く赤い目は常に不敵だった、強い意思と感性を持った誰かは。

この京都で少年が出会った力ある者達と、本当は同じ系統の――少年が強い親和性を持つ力を、最初に与えた誰かだった。

「その夢の中ではソイツの名前も違って、オレには呼べなくて。

ソイツもオレを知らなくて……でも、オレが知ってるはずの、昔のままの顔で――笑って言ったんだ」

――シーのこと、よろしく頼んだぜ――

「それはオレが探してた、妹みたいな奴の事……その夢では、そんな名前だったみたいで」

「シーちゃん？　って愛称だよな？　多分」

うんと少年は頷き、夢の終わりをそこでまとめた。

「その後ですぐに、ソイツは消えて。代りにやっと、探してた奴がそこにいて……いつでも笑ってる奴なのに、助けてって、一人で泣いてるから。オレの知ってるそいつの名前を呼んだら……そこで全部消えて、目が覚めたんだ」

「うわあ。なかなか意味深な夢だね、確かにそれって」

ごくりと、帽子の少年は息を飲み、

「そこで、シーちゃんって呼んでたら、どうなってたんだろ？」  
少年自身気になっていた、同じ疑問を口にした。

「……………」

その夢が何だったのか、この先少年にわかる事はなくても。夢の理由より大切な意味。誰かに助けが必要である事だけは、

既に知っていた願いだっただけ――少なくとも『銀色』にとっては。慣れ切った昏く赤い夢が、ただ、違う形で現れただけだと。

ひよいっと。そこで、第三者の感想が述べられていた。

「——夢が覚めずに、シーちゃんも帰ってこれなかったかも？」

「——！」

「あれ、スカイさん？」

にこのこと、自身も近くでチラシを配っていたマネージャーの黒い女は。いつの間に近くに来ていたのか、少年達の背後から顔を出していた。

「イーレン君、鈍そうだし。よっぽど強いSOSじゃないと、そんな夢みないんじゃないかい？」

なら気を付けてあげなよと、黒い女が何故か口を挟む。普段の営業とは微妙に違った、何処か親しげな口調で。

「……………」

違うと言っても、あくまで行方不明の妖精の名で少年を呼ぶ、そのマネージャーを軽く睨む少年を、両者の近くにいる帽子の少年が一人ハラハラして見守る。

「イーレン君が信頼する誰かの姿をとってまで、シーちゃんの危機が伝えられたわけだね。大変だね」

「……………オレは別に、そう思わないけど」

その嘆きは、今に始まった事ではないと——ただ古い痛みを呼び起こすきっかけに過ぎないと、少年は何処かで知っていた。

「それにしても——鶯さんは、逸材ですねぇ」

黒い女はあつさり話題を変えると、元通りの営業口調で。

今まさに、花山吹の重ね姿で、軽妙ながら気品に満ちた——地を渡る鳥のように舞う少女を、視線の先におさえていた。

「……………」

同じように、少女を視界に捉えた金色の髪の少年は。

天の鳥でも地の鳥でもない、ただ地に足の着いた——

天の青光がよく映える、小さな赤い鳥を。

不意をつかれたように、瞬きをする事も忘れてただ見つめた。

「あの若さで、安定感が半端ないですね。羨ましい限りです」

「鶯ちゃんは何でも出来るんだよ。凄いだよ——」

青と赤の併存など事も無しにこなす少女を、少年のすぐそばにいる者達は当たり前に——最大に称える。

青空の下を黄色い飾りで舞う赤い小鳥は、青みの黒の目で。幼いカラダに大人びた黒が、よりいっそうの深みを、青と赤を混じらせた目を持つ少年まで確かに届けていた。

「……………」

それは——守られる事を本来は必要としない、強い鳥でも。守り守られる事を尊び、仲間を大切に作る小さな赤い鳥で。

何を犠牲に何かを守る剣が、取り落としたものをこそ守る

——何を大切に出来る強さ、それ故の弱味を持つ小鳥だった。

花山吹の小鳥が舞う傍ら、空の色は段々深みを増しつつあり。

その暗い雲が何処から来るか——この一座は誰も知っている。

「……………」

一しきり少女の姿を見つめた後で、少年は一度、周囲の者をざっと眺め。可憐な小鳥にわきたった賑やかな面々の中に——本来在るべき者の姿が見当たらない事に、すぐに気が付いた。

「……………あいつ……………」

広告も配り終え、少女の出番も終わった頃だったのだ。

黒い女と淡々と、話題の尽きないらしい帽子の少年を後に、誰も気付かない程自然に、少年は静かに場から離れていた。

ぼつぼつと。細く弱い雨粒が、涙のように降り落ちてくる。

「……………あれ？ 君……………」

一座が陣取っていた外回り先の広場から、少しだけ離れた、ひと気のない小さな川の流れる林で。

「どうしたの？ 小鳥ちゃん、まだ向こうにいるでしょ？」

無表情にここまで来た少年に気が付き、独り休んでいた黒髪の花形は、腰かけた短い橋の縁の上で不思議そうに苦笑した。

「あんたこそ……………ここにいていいのか？」

仕事中にはないのかと言いたげな苦い顔を、少年も浮かべる。

「大丈夫。小鳥ちゃんがいるから、私なんていなくても十分に、今日のノルマは達成できるわ」

「そういう問題じゃないと思うけど」

「だって、向こうにいったら私、また雨を降らせちゃうもの」それは返って、一座の外回りの足を引っ張ると。花形は数々の気に入りの場所の一つで、あえて羽を伸ばしていたようだった。

「小鳥ちゃんを見てると、何だか嬉し過ぎて、コントロールが全然効かないの。困ったものよね……………化け物失格だわ」

「……………」

千族混じりのこの一座で、花形など大きな役回りをする者は。

目立つ事で外敵から狙われやすくなるため、何らかの『力』を持った者である事が必要条件であり。

「ただ単に、感情の強弱で、雨を降らせるだけの力なのにね。そんな簡単な事すら出来ないから……………だからダメなんだわ、私」

少年の方を見ずに、苦笑しながら眼下の小川を見つめる女は、その力の通り雨女という名を受け継ぐ、純粹な血統の妖だった。

「いいなあ。私きつと、小鳥ちゃんみたいになりたかったのよ」

「……………」

「雪女さんとかと違って、雅さも無いし、名前も知れてないし。とにかく弱小だから……………人間のフリした方が得だけど、誰かと関わり過ぎて正体がばれないよう、一人で何でもしなきゃって。本当に、せせこ生きてきたのよ……………レストをやる前までは」

そんな女の正体を見抜き、ディアルスという国に招き。その女王に協力する自らの直属としたのが、ある妖精の魔女だった。

「ナナハ様は、私が出る事をすればいいと言ってくれたけど。私の役割なんてせいぜい、隙間産業、何かあれば穴埋めくらい。小鳥ちゃんくらい、慎ましくも堂々と出来たら、あんな風になれたのかしら？」

「……………あんたは」

まるで、少年に何も言わせまいと、何かを話し続ける女に、少年は苦い顔のまま淡々とそこで割り込む。

「そいつがあんたに期待したのは——穴埋めじゃないだろ」

「……………君は……………ナナハ様を知ってるの？」

「……………知り合いの知り合い。ちらりとだけなら会った事もある」「そっか。……………イーレンは、同じ妖精でも、ナナハ様と会った事はないって言ってたけど」

ふうと。ようやく女は少年の方を向いて、大人びた顔付きで笑顔を見せた。

「スカイはね——君がイーレンだって、そう言って譲らないの」「……………」

「ああ見えて強い靈感持ちらしいけど。本当に、他のみんなも、どうかしてるわ。君は全然、イーレンには似てないのにね？」少年を行方不明の妖精扱いする、同じ一座の者達に。

その大半はただの勘違いと知る女は、ふふふと楽しげに笑う。

「……………」

女がそうして笑う理由を、とっくに知っていた少年は——

「あんたは……………」

女の目を正面からは観ずに。ただ胸元の蝶型のペンダントに、紫の目を合わせて、少年ははつきりと口にした。

「あんたは何で、イーレンを——殺したんだ？」

「……………」

その妖精は帰らないと知っていて、剣だけを欲しがり。

少年の事も敵視し、殺さんとする可能性が観えていた女に。

「やっぱり……………知ってたんだね、君は」

空の暗雲は明らかにその黒さを増し。女の淡々とした表情とは対照的に、重苦しい色合いを少年に見せつけていた。

「なのに、誰にも何も言わないで。イーレン扱いされるのを、黙って我慢してるなんて……………」

人間のようにしていた女が、それでも明らかに化け物であると示すように。あくまで表情は、悪びれもなく少年をまっすぐに見つめる、純粋な妖の女だった。

「それじゃ、あの時……………その剣を渡すまいとしたのも、君？」

妖精のような背格好の少年は、殺された妖精の仲間なのかと。そうした風に、女は捉えているようだった。

「剣も持って行きたかったのに。変な光で、邪魔したでしょ」

「……………ああ。それなら多分、オレの事だ」

殺した相手の大切な剣を、持ち去ろうとした女が手にした時に。剣から発した白い光が女を遮り、その剣は、女の手に移る事を拒否したかのようだった。

「変なの。それだけ近くにいたなら、イーレンの事……助けてくれれば良かったのに」

「あれだけ串刺しなら即死だ。止める暇なんて無かった」

女は本来、雨を降らせるだけの、特に強い妖ではないが、

「雨を刃にする力も、教えたのはイーレンだし。自業自得だろ」

「……………」

その感情の高ぶりをコントロール出来ず。

刃と化された雨を、全て目前の誰かに向けてしまった女に。

「妖精さんは……………妖なんてわりと本当、淡白なのね」

仲間が殺されても、平然としているように見える少年に。苦く笑いながら、女はそうとしか言えないようだった。

女は、あくまで淡々とした少年から、再び目を逸らし呟いた。

「……………私が、悪かったのよ」

「……………」

「三つも年下の気まぐれなコに、本気になっちゃったのも……みんなには隠してって言ったのも、私からだっただけ」

座内で三角関係を作り、一座から去ったと噂されている妖精の、

「ルンや鴉に浮気されちゃったのも、私がつまらなかつたからだろうし。逆恨みなのは、わかってたんだけど……………」

その剣に拘った女は——ただ、形見が欲しかったというように。

「でも、そう思えば思う程に、抑えられなくなって……………私もう、何処か、壊れちゃったのかもしれないわ」

「……………」

「前はこのくらいなら、雨もコントロール出来たはずなのに。今は駄目なの……………小鳥ちゃんを見てると、久しぶりに何だか、幸せな気持ちになれるから……………抑えがきかないの」

ぽつぽつと、重過ぎる色の空からは、それでも小さな雨粒が申し訳程度に降りて来ており。女が今、どれだけ必死に自らを抑えているか、少年には嫌という程伝わってきていた。

少年にとつては。この雨が本当に、女の害意ではなく——

少女を歓迎する女の気持ちであると、わかっていた時点で、女を追求する気は微塵も存在しなかった。

「……………なあ」

ただ一つ。ここまで話を聞いた以上は、ある事柄だけ——見過ごせない事を、最後に口にする。

「あんたがもし、アイツを殺した事を、後悔してるなら……………」

「……………？」

そしてその後。少年が口にした事をそのまま認めて、少年の言う事に素直に従った女に。

「あんたはオレより——まだ全然、帰ってこれるよ」

少年はただ、苦く笑って。不戦協定を結んだ女に、今まで通り頑張るようにと、背中を押したのだった。

そうして。一人の妖精が命を落としたその瞬間から。

—今やお主は……—

それより前に、妖精が最後に買っていた剣が、

—その自我を剣に依存した、『剣の精霊』—

その中にいた見知らぬ誰かの力が、ぼろぼろだった妖精の軀を辛うじて蘇生させ、顔などを僅かに造り替え。

—この身体で。コイツが目を覚ます事、出来るのかな？—

結局、妖精自身の意識は戻らず——そのまま剣の内の誰かが、呪われた生を受ける事になっていた。

「本当に……ろくでもないよな」

無表情に、青白い剣を掲げて見つめながら、少年は口にする。

「生きてるのはオレじゃなくて、こっちなんだから」

本体は今も、剣のままである少年は、その剣が傍になれば、最早意識を保つ事すらも出来ない身の上だった。

—妖精なら羽があるはずなんだけど……—

そしてその剣に、女から譲り受けた、蝶型のペンダントを、

少年は強く——決して無くさないように巻き付けた。

「……くつつくかどーかは、わかんないけど」

女にも同様に言った事を呟き、ただ一人、苦笑い続けながら。

\*

レストの巡業。午前中は、京都もしくは近隣で外回りを。

午後からは内回り、京都で上演する舞台の練習と、中々突然、赤い髪の少女は多忙な生活を送る事になっていた。

「今月の中旬二週間、週二回公演なので計四回ですね。もしもご家族を呼ばれるなら、初日と千秋楽の二回をお勧めしますよ」練習は本当に根を詰めて行っているのに、上演回数がそれだけというのは勿体無いという声も身近で上がったが、

「さすがに無理だから。いきなりそんなに沢山するの」

「えー。期間長くなれば観に行けるのにつて、ぼやいてたよー」

「幻次さんがまず許さないよね？ 何で帰ってこないーつて、

昨日泣きながらヤケ酒呑んでたよ、鶯ちゃん」

その多忙さの中で、御所まで頻繁に戻るのも返って疲れると、三日という間隔は開き。御所の子供達の方から、今日は朝から川辺にやって来ていた。

「特に鶯の身边に変わりはないのか？ ユオン」

「うん、今の所。危険な事も、最初に思ったよりは無さそうだ」実は一番の不安材料だった黒髪の花形の動向が、少年にとつて解決していたため。ここ数日は至って気楽に、川辺のテントで花形達や少女と共に、夜は気を緩めて過ごせた少年だった。

黒髪の花形の方も、あれから随分と物腰が落ち着き。少女がなるべく快適に過ごせるよう、最大限気を使ってくれていた。

「御所の方はどうなんだ？ あの女……大人しくしてるのか？」

「ああ。でも何か、もうすぐお暇すると言ってたらしい」

「……？」

暮れ前からずっと御所に滞在していた客人について、兄弟子が口にした思わぬ展開に、少年は怪訝な顔をする。

「新たな護衛、それも女の手練れが雇えるかもしれないんだと。ほとんど御所にいたのに、どうやって探してるんだろうな？」

「……いなくなるなら、何でもいいけど」

しかしどうしてか。その客人が去っていく時こそ、何か——花の御所にいる者達にとって、良くない事があるのではないか。不意に少年は、御所に帰りたい気持ちに唐突に襲われていた。

午前中は、少女は外回りの仕事があるため。子供達はそれも同行するという事で、それならと少年は、兄弟子に今日一日の少女の供を変わってもらう事を頼み込んでいた。

「ユオンは御所に帰るのか？」

「そうする。夕方には練習先に行くから、ジュンはそこまで、悪いけどお願い出来るか？」

「わかった。にしても、ユオンも真面目だよな」

帽子の少年も今日は用事があるらしく、御所の子供達だけで、その日は一座に混じる事になった次第だった。

それを何故か——ちらりと一瞬。意味ありげな目線で、その一座のマナージャーは見つめていた。

少年が不意に帰った、最近足が遠のいていた花の御所では。特に何も、これといった変哲はなく。ただ唯一、

「回復魔法が効かないというのは、何故なのかわかるかろう？」

「——へ？」

急に押しかけた少年に、首を傾げつつそんな事を尋ねた公家の元には。最近、その質問を持ち、旧知の仲間が訪ねてきていたとの事だった。

「お主も似た状態の時があつたじゃろう。陽炎殿との一件で、お主が昏睡状態だった時に——治療が出来ないか頼んだ者があつたのじゃよ」

「そうなんだ……」

「精霊魔法の使い手で、大怪我や外毒など、急を要する回復の業に長ける者でな。しかしお主のように、寝たきりというのは専門外らしくてのう」

しかしと。それが外傷なら、命の灯さえ消えていなければ、どれだけ瀕死者でも救える程の、精霊魔法を以ってしても——ある少女のごく簡単な怪我が、何故か回復しなかったのだと。

その使い手は公家に、半ばボヤキに来たらしかった。

「わしにも結局、答えはわからなくてな。アラス殿の不調が、まだ続いておるせいかもしれないと思うがのう」

「……」

レストの護衛の、まだ見ぬ主の名に、少年は知らず声を呑んだ。



劍の師の元にも顔を出した少年は、師の娘の近況を報告し、一しきり久々の鍛錬でぼこぼこにされた後で。レスト公演先の、京都では特に賑やかな地域にある建物へと向かっていた。

「……全然、見咎められないな」

一応保護観察が続いている少年が、そうして一人で出歩く事は、基本的にはよろしくなく。しかし少し前から袖を通した着物は、何とか少年を、京都に馴染ませているようだった。

「いざとなったら、言霊もあるけど……」

刃傷沙汰を起こした代償として、言霊による命令に絶対服従の呪いを受け入れていた少年は。こうして一人でいる時も、万一身でまずいと思う状況があった時はと、赤い髪の少女はあるアイテムを少年に持たせてくれていた。

「私達が誰もいない時に、銀が出て困りそうになったら。これ、使うといいわー」

少女についてまわるために、少年の外出が増えた事を考え、言霊を封じ込めたというお札を、少女は書いてくれたのだが。

「力をこんな紙に、小さくまとめて使えるなんて。便利だな」でも——と少年は、複雑そうに、少女がくれたお札を眺める。

「これ、顔に貼れって……それも何かやだな……」

それでなくとも、片耳に常備する、同時翻訳機たる装身具が、正直不格好だと少し不服だった少年は。身なりには人並みに、気を使う性質でもあるのだった。

公演先の建物についた時には、ちょうど日が暮れ。楽屋では、兄弟子とその弟が、裏方達と話しながら少年を待っていた。

「凄いなユオン。レストでいったい、何人の女に声かけたんだ？」

「違う、それ絶対ガセ情報だから……妖精違いだから……」

「似てるヒトが色々悪い事してると、大変だね」

すっかり妙な裏話を掴まされた彼らを、出口で見送った頃には。日も暮れ、一座の練習も休憩に入る頃合いであり。

「……え？」

「あれえ？ 小鳥ちゃん、楽屋に帰ってないのお？」

舞台の方に顔を出した少年に、幼げな花形が不思議そうにする。

「ついさつき、休憩になってからは、こっちにはいないわよ。」

「……ユオン君は会ってないの？」

一座で唯一、少年を名前と呼んでくれるようになった、黒髪の花形は。隣に控える、護衛役を練習中の護衛と顔を見合わせる。

「念のため、探しに行ってくださいようか」

「——いいよ。多分オレ、ちよつと探せばすぐにわかるから」

これだけ限定した建物の内であれば、探し物はむしろ、得意な部類の——身近な現状の把握にとっても長ける少年が。

そうしてあっさり、身軽な街着を稽古着にしていた赤い髪の少女を、長い廊下の先に見つけた時には。

「——……え？ ツグ……ミ？」

その目の前には——あつてはいけない光景が広がっていた。

時間は少しだけ戻り。

休憩に入った少女が、いつも差し入れが置いてある楽屋に、軽くお菓子でもとろうと足を向けていた時の事だった。

「……あれ？」

一座が借りた、京都では珍しい造りの公演向きの建物で。

日も暮れた、薄暗い廊下の先を。ス——と横切っていった、暗い人影に、術師の家系の少女は否応なく気が付いてしまった。

「こういう所だと……やっぱりいるわね」

歴史は古いその建物に、あまり性質の良くないものがあると、

気が付いた以上、見て見ぬふりは出来ない人と人影を追って、強い靈感を持つ少女がその長い廊下に踏み出した時には、

そこにいたのは——

今この場所に絶対いるはずのない……ここに来れない事を、嘆いていたらしい誰か。その誰かに似た、有り得ない姿だった。

人影はただ。茫然とする少女に、こんばんはと上品に笑う。

「——何、で？」

長い髪をまつすぐおろし、少女よりも高い背で大人びた体つき。しかしその顔は、少女が知っている誰かによく似ており。

「あなた……まさか——……」

その相手を祓って良いか、咄嗟に判断出来なかった少女に——優しい少女がそれを躊躇うと、わかっていた黒い人影は。

「……ねえ、鶯ちゃん。お願いが、あるんだけど——」

今この時間は、少女の記憶に残る事は無いと知っていて笑う。

「鶯ちゃんのカギを——……私に、くれない？」

それが誰かの願いなのだ——誰かによく似た黒い人影は。大切な事だとわかってしまう少女の優しさと鋭さにつけ込み、

大切な事は何事も疎かに出来ない、少女の隙間に入り込む。

「——のこと——……忘れてほしいの……」

そして黒い人影は。その唐突な、しかし強過ぎる昏い願いに、身動き出来なかった少女に近付き。

それが決して、少女達を傷付けることにはないとわかっていた銀色の髪の誰かの前で、あっさり少女の意識を奪い。

「——!!」

ちようどその場に出食わしていた、少女の専属護衛たる少年が、瞬時に剣を抜いて場に飛び込んだ。

「……やあ、キラ君」

それが誰か、少年にも思い出せない黒い人影は。何故か銀色の髪の少年をそう呼び、剣を剣で受け止め、昏く笑っていた。

銀色の髪の少年の、鋭過ぎる現状把握の直観を以ってすら、覚える事すら出来ない敵との、関わりだけを少年は直視する。

「……何の、つもりだ」

その相手は少女達を傷付けない。初めて会った時からそれはわかっていた少年は、ただ自らの剣だけを相手に向ける。

「別に何も、害なんてないよ？ ホントにちよつとだけ、心の隙間に入る道を教えてもらっただけだから」

白い光を伴わないその剣は、普通の剣と大差は無いと。

少年の剣を払い、倒れていた少女を大切そうに抱えて、壁にもたれさせた後で、人影は無邪気に笑う。

「私の目的のために、この子達は邪魔だから……何とか、邪魔にならなくなってほしいんだ」

「——この子、達？」

間髪入れず人影に斬りかかる少年に対して、剣技だけで応じる相手は。そうして、力を使わずに戦わなければ、敵と長く対峙出来ない制限のある今の少年と同レベルの——

その剣と感覚でしか戦う術を持たない、弱小な相手だった。

「この子達がいるから、あの子は、いつまでも迷ってるんだよ」

「——」

黒い人影が、誰の事を言っているのか。その相手と人影が、どうした繋がりを持っているのか。

それをどうしても思い出せない少年は、ひたすら歯噛みする。

「無理だよ。君より私の方が、剣も願いも強いからね」

「……——」

「知ってるよ。君には私は……殺せないでしょ？」

それだからこそ、この相手を覚えている事が出来ないのだと、少女達と似た隙間を持つ少年に入り込む人影は笑う。

そしてそれは。少年にとって最も致命的な、深い傷を晒す。

「君はもう……殺したくないと思ってるからね」

青白い剣の夢——少年の終着を招く逆光をそれは知っていた。

「どうせ何も、君には出来ないのなら」

しかしその傷すらも……少年の事も傷付けまいと願う相手は、

「それなら……忘れてしまえば、いいと思うよ？」

それだけが救いであると。人影の勝利をここで宣言した。

けれども少年がそこで——意識を失った赤い髪の少女の姿を目にしなれば、少年は初めのように敗北を認めたはずだった。

「っ——……!!」

激しい動悸と嘔吐きを覚えながら、その剣に白い光を纏わせる。

「鴉達に……何かするなら……——」

最早何も、躊躇う事はないと——命を削る光を最大に消費して。

「あんたが誰だつて関係ない……!!」

同じ青い目を持った相手に、少年はその呪われた剣を——

自身の命と引き換えに、躊躇なく振り下ろしていた。

ふ、と人影は、黒い微笑みを宿し、迫り来る剣を見返す。  
バカだね、と。

その生来の霊的な感覚と、夢を覗き見る旧い目を以って。  
とづくに知っていた、その『銀色』を止める方法を見定める。

「何もしたくないから……私はここに来たんだよ？」

少年を含めて、少女達を決して傷付けまいとする意思是。

その命をかける少年以上の、強い願いであると――

白い光を纏う剣を、類稀な剣技で事も無く受け流すと。

「残念だけど。生きてない上、力も無い私にはそれも通じない」

それだけが強みだった弱小な化け物は。少年の懐を着物だけ

切り裂き、ある札を自らの剣の切っ先に引っ掛けて奪うと。

「ほら。自重してね――キラ君？」

そのままスつと、剣を振るって少年の額に札を貼り付け。

瞬時に強く胸を掴んだ少年は、そのまま崩れ落ち――

札はすぐに、その後に燃えて消えてしまったものの。

激しい動悸に襲われた少年が、次に目を開けた時は。

思い出せない人影の姿は、何処にも無くなっていたのだった。

「……………」

力無く両膝をついたままで、少年は胸元を強く掴み。額まで  
地につけ身悶えするように、反動のための全身の痛みを堪える。

銀とも金ともとれない色の髪が、床に擦り付けられ。

傍らに落ちた剣から離れないよう、身動きだけは自制し。

「……………えつ……………」

何一つ。時間の止まったその体に、差出す物などないのに。

強過ぎた嘔吐きに、この躰で目を覚ましてから……初めて彼は、  
命そのものをぶちまけるように、何かを吐き戻していた。

―君はもう……殺したくないと思ってるからね―

その人影に敗れた原因は、たとえそこには無かったとしても。

少し離れた場所で、今も眠る誰かの姿を見れないままで――

誰かを守れなかったとも言える現実には、ただ彼は嘔吐く。

「もう……………それだけは、イヤ、だ……………」

気が付けば、金色に戻っていた髪と紫の目は。

それでもその時だけは思い出していた、古い痛みを口にした。

周りと溶け込んでしまう程に、直観の鋭い『銀色』と違い。

金色の髪の少年が唯一、『銀色』より優れる点とは。

その弱小さ故に、『銀色』より少しだけ曖昧でない想い……

大切なものを失くしたくないと自覚出来る、自分自身だった。

本当にただ。意識を失っていただけの少女が、ようやく。

束の間の午睡から覚めるように、穏やかに目を開けた時には。

「……………え？」

「……………」

咄嗟に何も、状況がわからない中で。目の前にはうるうるすると、子供のように涙ぐむ金色の髪の少年の姿があり。

「ツグミ……………目、覚めた……………？」

正座した状態で、少女の上半身を横向きに抱えていた少年は。そのままぎゅーっと……………少女の肩に回した両腕に力を入れて、力の限りに抱き締めていた。

「ちよ、ちよつと……………！」

どちらかと言えば、ヒトに触れるのを避ける事の方が多いその少年が、そこまで誰かと距離を縮める異例の事態に——焦った少女の全身に一瞬で血が通った。

「良かった……………全然、目、覚まさないから……………」

抱擁は一瞬で、すぐに少年は、焦って体を動かした少女を離し。同じ正座の体勢のまま、少女の傍らで座り込んでいた。

横座りの状態の少女は、とりあえず埃を払いながら、わけのわからない不眠に盛大に赤まった顔で少年に振り返る。

「何が——あったのよ、これ？」

「わからないけど。気が付いたら、ツグミが倒れてたから」

少年はまだ心配そうに涙ぐんで両膝を掴み、少女を見ており、

「……………何でそれだけで、アンタはそんなぐしぐししてるのよ」

その直向きさは、本当に子供みたいだと。おそらく誰も映していない、金色の髪の少年の本来の姿に——思わず頭を撫でたい衝動にかられた少女は、納得いかなげに口にした。

「つて、まだ大して時間もたつてないじゃない」

休憩時間も終わっていないような短い間で、少女はそこまで、長く気を失っていたわけではないはずで。

何故意識が無かったのか、それだけは確かに気にかかるが。

珍しい生活での疲れも、多少は自覚していた所もあり。

「それより……………どっちかっていうと——」

「……………」

少女がそれを、座り込んでいる少年に口にするよりも早く。

完全に気を取り直していた少女に安心したのか。

ふっと少年は、そこでぱたりと倒れ込んでいた。

「……………」

どちらかと言えば、少年の方が余程、少女より真っ青な顔色で、死にそうに見える……………完全に意識を失い、か細く拙い気配の少年に。ふーっと頭を抱えながら、少女は溜息をついた。

「何て言うか……………わけ、わからないんだけど」

これはとても、自らの手に負える状態でない、一目で少年の窮状を看破した少女は。躊躇うことなく、自宅へと式神による連絡を行い……………瀕死の少年の迎えを要請したのだった。

\*

それからしばらく。ひたすら眠り続けている少年の傍らで。何度となく様子を見に来てくれた公家や剣の師は、ううんと、頭を悩ませているようだった。

「特に何か、戦闘があつた気配や痕跡はないってさ」

「気になるのは、ユーオン殿の着物が切れていたことじゃな。札が一枚だけ使われていたというのも……消耗の原因だけは、裏付けはするが……」

何かで『銀色』が外に出て、体力を消耗し、それを少年が、呪いの力を借りてまで自ら止めようとしたのではないか。

その場で起こり得た事を考えると、それくらいしかなく。「本人が目覚まさないや、どーしようもねえな。しっかし、今度はどれくらい眠れば良くなるんだ、コイツ？」  
剣の師が妙に不服気なのは。下宿中の娘のお供を、眠る少年が果たせなくなったという事ではなくて。

「鵜の晴れ舞台、もうすぐ始まっちゃうじゃねーか。全公演、応援に行つてその後で呑もうって、約束してたつーのに」

小食ではあるが、酒はわりと大丈夫らしい少年と、こつそり呑む楽しみが出来ていた師であり、

「期間は二週間というし、確かに下手をすれば、眠ってる間に全て終わってしまう可能性はあるのう」

少年が少女の舞台を観られないのは、不憫であると公家も悩む。

そうして、血縁でも何でもない少年を親身に心配してくれる、温かな者達の声だけは。ほとんど身動きせず横たわる少年に、うつすらずと届いていたが。

その温かさ以上に、傍らの剣の冷たさが少年の温度を奪い。青白い光を仄かに放つ剣は、今も確かに――

それでなくても拙い命を奪い続け。決して消えない責苦を、金色の髪少年へと送り続けていた。

うなされている。そうとしか言いようのない顔付きで、時に苦しげに眠る少年の様子を知っていたのは、公家だけではなく。

「……おや、まあ……」

新たな護衛を得る手筈が、そろそろ整いつつあり。

この御所に滞在する目的も果たせていた、自称天の民の女は。「本当に……わたくし達と共に来られた方が、アナタにとつて、幸せでしょうに……」

無難さと思いの強さ。ヒトのために動く事を信条とした身。いつもあまりに無力だったために、無害な存在と、ここまで時を過ごして来れた女は、少年の苦しみにフッと微笑む。

「少しだけ。無理をしても、お誘いしてみましようか――？」  
胸の傷痕を押さえながら、それだけ楽しげに呟いた女だった。

そして少年は。いつも通りの青白い剣の夢に今日も襲われる。

銀色の髪で青い目の少年。

年端もいかず、人気のない山奥で暮らしていたその少年は、元々何処か世間離れしていたところがあった。

一言で言えば、きつと彼は……彼とそれ以外のモノの区別が、何処か曖昧だったのだ。

——……——がいたくないなら、いたくないよ——

彼の五感には彼以外の事も、彼の事のように感じる故障品で。虫を踏めば、その存在に気付かずとも虫の痛みが彼を襲い。誰かが悲しめばそれは彼の悲しみと、当たり前前に傷んでいた。

——バカ！ 泣いているじゃない、アナタ！——

だから彼は……在るだけで感じられる事が多過ぎて。痛みや悲しみといった強い思いを受けると、容易く自らを見失い。

自身のちっぽけな心に気付かず、他者の都合をよく重視した。

——だから——は……優しいんだよ——

そのため、誰かの強い願いを我が事として動く彼を、ヒトは優しいと言った。たとえ彼が、多くの者の命を奪った死神でも。

「でも……」

剣が語る死神の夢が、弱小な少年を追い立てる中で。ある身勝手な歎きに、少年はいつも吐き気を堪える。

「もう……それだけは、イヤ、だ——……」

失いたくないと望む少年が……何故今更迷いを持ったのかと。

虫の痛みすら自らのモノとして感じたその少年は。

その手にかけて多くの命や、失われた命の全ての痛みを——本当はずっと知っていた。一つ一つを共に味わっていた。

それは本当に必要な痛みなのかと、望みと相反する迷い……その青い逆光は、確かに拾えてしまう程に育ちつつあり。

——何で……殺さないの？——

たった一つの望み以外、そんな隙間は全て排した青白い剣は。

それが必要な仕事であれば、迷いごと殺すのが自らの役目と。それこそが少年を責め立てる、かつての死神の誓いだった。何故ならあくまで、そんな葛藤は私情に過ぎないのだから。

「なんて……かつてなヤツ……」

その赤まみれの誓いも、それを厭いつつある青さも。どちらも自身の都合でしかない身勝手に——彼は、嘔吐くしかなかった。

その夢を見る時の少年の髪は。銀と金を往き来していると、赤い髪の少女は不意に知る事になる。

「……………何がしたいんだか……………本当」

三日に一度、当初の約束通り御所に帰ってくるようになった少女は。その度に必ず、眠り続ける少年の様子を見に来ていた。

常に誰かを映すような、自らが曖昧なこの少年については。鋭い感性を持つ、少女達のような術師をしても、その素性はわからないままで来ていた。正確には、わからないこと自体が本質である少年を、少女達は的確に把握していた。

少女達のその感性は、そうした漠然としたもので――

「それがわかり過ぎたら、悠夜やユーオンみたくなるのかしら？」  
それでも強過ぎる感性で、幼くして大人びてしまった従弟や。範囲が限定される事で、その内では従弟とは違った鋭さを持つ、銀色の髪の少年はいずれも……………本来ならば自らを閉ざす事で、己を守るしかないというのに、

「アンタはソレ、悠夜みたいに封じるところか……………ソレだけを基準にして、自分なんてどうでも良かったみたいよね」

ぺしっと。沢山の大切なものを大切にしないために、苦しげに眠る少年の銀色の頭を、思わずはたいてしまった少女だった。

それでも確かに――何かの願いを持って、ここに在る少年は。

その願いが現れた時、この御所から去っていくのだろうと。願い以外の事は全て捨てかねないような少年にとって、それが良い事なのかどうか、少女には今もわからなかった。

―オレは多分、ろくでもないから――

居候先の居宅を、突然血で染める少年が真つ当でないのは、誰の目にも明らかだったが。

―そうじゃない奴の言う事を、聞いてた方がいいと思う――

それでも少女は、それは反対だった。本当は少女以外の者も、この家系の術師は全員がそうだった。

「何か理由がある事くらい……………蒼にだって、わかる事なのに」  
術師でない従兄すら、真つ当でない程にまっすぐな少年を、短い付き合いの中で、少年以上に知っていたのだから。

しかし今は、その呪いは当分、この少年には必要だった。

―オレは別に、止める気はないんだと思う――

あくまで少年はこの先も、自らを守らない事を言い切った。それを周囲が無理に止めた所で、限界があると知っていても。せめて少年が、この場所に留まる間くらいはと――

少年の願いはもうすぐ現れると、断言した従弟とは違い。

無意識にそれだけ――少年が、この御所を去る日が近いと、感じていた少女は。眠る少年をただ、不服気に見守るのだった。



そして数日後に。世界を旅する千族一座の現地座員として、赤い髪の少女の初舞台の、まさに初日が訪れていた。

「ったく。やっぱりまだ起きやがらねえな、コイツ」

千秋楽まで一週間以上の猶予はあるので、剣の師はそこまで、焦る風でもなく。ただ純粹に残念そうにする。

「寝たきりになるってところも、そういや誰かさんを思い出すな。今日アイツも、観に来るって言ってたっけな？」

過去に一度、その命に近い『宝珠』を失いかけた事で、長く眠りにつく事があつた者を思い出し、師は苦笑したようだった。

「ま、あんまり無理すんな。すみれも頼也も、今日は行けないみたいだしな」

公家から子供二人を任せられ、後一人の仲良しの子供を連れて、娘の舞台を、保護者としては一人で観に行く事になった師は、

「よりによって、今日がご出立とは……ついてねーなあ」

他の二人の大人が、同伴出来なくなった理由をブツクサと口にしながら。眠る少年を後にしたのだった。

花の御所の重要な管理者の一人である公家は、三カ月近く、そこに留まった客の出立に、京都を出るまで付き添う事になり。

そうした時は、御所を預かる役目は、姉に任せる必要がある。

姪の舞台の初日を観れなかった事や、何より実母の姉に観せてやれなかった事は、大きな痛手だった。

そして、公家も剣の師も不在となった花の御所で。

「……ねえ。……私と一緒に、アナタも此方に来るのよ」

眠る少年に囁きかける、少年と大きく年の変わらなそうな、謎の少女の姿があつた。

「私を捕まえたのはアナタだし。私もアナタにも用があつたの」少女は少年の剣の傍らに坐し、土色の短い髪を小さく揺らす。

「私の依り代を、壊したのはアナタだから。今度はアナタが、私の依り代になるのよ」

無力で無難な女の、有害だった侍従だけでなく。その侍従を、使役する根本、霊核たる媒介を女の胸に宿らせていた少女は、その媒介だけを破壊した剣に、逆に憑いた状態と言えた。

「酷い事をするわよね。私は何も、悪い事はしていないのに」

その少女も何一つ、力は持ち合わせない、無力な偵察者で。弱い者でも遠慮なく害するアナタは、まさに死神ね」

ただ一点。無力であり、曇りなき強い善意の持ち主であると。力ある者に程、無意識に見逃され、受け入れられやすい特性を持った——偵察者として適性の有り過ぎる少女は。

それなのに一目で、彼女を敵と見切った少年とよく似た……ある知り合いのために、少年の事をも偵察にここまで来ていた。

「起きてね、死神さん。出発の時間よ」

言霊に匹敵する思いの強さで、絶対服従という呪いの力を、借用した相手の前——少年はふっと、色の無い目を開けていた。

そうして少年が、状態は夢遊病のように——しかし足取りは確実に、人目にふれないように御所を抜け出し。

京都の南端、そこに広がる草原との境まで無言で辿り着いた先では、待ち受けていた誰かが、今もあまり似合わない着物を身に着けたまま、にこりと少年に微笑みかけていた。

「よくぞいらして下さいました。わたくしの痛みもどうやら、無駄ではなかったようですね」

「……………」

その絶対服従たる呪いは、誰かを害した少年への罰であると。ここまで来る事になった理由は、少年の意志——自業自得と、強い心で、土色の髪の毛の女は微笑む。

「紹介しましょう。わたくしの新たな護衛の、吸血姫です」

誰かの傍らには、覆面をつけた若い女らしき人影があり。

「アナタと同じ死者とも言えます。最も彼女は、相当新しい、つい最近の死者ですけどね」

ふふふと、その覆面の中身を思い、女は実に楽しそうだった。

おそらく、少年が異端者である事——本来ここにいるはずのない何者かであると知り、それを知るためにも現れていた女は。

「わたくし達は皆、本来終わった生を繋ぐ『死者の一族』……自らの身体を使っているのは、どうやらわたくしだけですけれど」

死者の一族。それは本来、相性良き媒介に遷した魂の力で、死した自らの身体を動かす……異端の化け物の総称だった。

「わたくしの命は、返していただきますね」

その媒介を突然、初対面の少年に破壊されていた女は。

身体活動を全て止め、死者と同様にする事で長く保っていた身体を急遽解凍し、生き物に戻す事で存在の連続を繋いでいた。

「……………」

無言で剣を差し出す少年から、女はそのままそれを受け取り。いともあっさり、その剣で自らの頸動脈を切ると。

あどけない少女のような顔で笑った。

「ああ痛い。致命傷って本当に痛いわ、厄介な事ね」

無力な身には、命の遣り取りはそれ以外では出来ないために、半ば剣に奪われていた命を、そうして受け取った誰かだった。

血はあっさりと、女の傍らの覆面の人影が、女の首筋を軽く

押えるだけで止まっていた。

「さすが吸血姫ね。血の扱いには長けているのね」

よしよしと女は、それまでの控えめな面影は消え。出血を止め、身の内に戻してくれた相手の頭を、にこやかな顔で撫でる。

「それじゃ、みんな……私達の行くべき所へ、帰りましょう？」

「悪いが——そういうわけにはいかぬよ、陽炎殿」

その何かが、少年の剣から離れた事を確認出来た時点で。

見送った客人の前に再び現れた——黒い髪と目の一人の男は。

「その少年は死者ではない。だからお主達には渡せない」

少年を引受けるのは自らの役目と、厳しい目で女を睨んでいた。

「これはこれは、青の守護者さん。まだ帰ってなかったの？」

見送り有難うと、今までと違う口調でにこやかに笑う女に、

「ユーオン殿を解放せよ。そうすればお主が何者であろうと、わしは特に咎める気はない」

「そうなの？ 私が陽炎に憑いた悪魔かって、訊かないの？」

全く興味は無いと男は断言し、ただ少年の身だけを案じていた。

「お主の事情は、既に伺った。何が真の目的かはわからぬが、わしらに害を成す気でもあるまい？」

「ええ、そうね。貴男達の中には、私が求める器はなかった。

貴男達が生粋の青の家系だと、近くで確認出来ただけで、もう十分だったから」

でもと女は、少年の肩を後ろから抱くように両手をまわす。

「私達の人形を壊してくれたこのコはね——ひよっとしたら、人形使いの知り合いかもしれないの」

「……何？」

「凄く偶然だけど。それも確かめたくて、私はここに来たから。

でもよくわからないから、結局連れて帰るしかないわね」

あくまで目的は偵察で、何も嘘もつかなかったと自負する女は。

それ以上は特に語らず、親しげな目で男に微笑み続けていた。

「……という事らしいが？ ユーオン殿」

男は半ば、呆れたような声で。ずっと身動きしなかった少年に、突然そうして声をかけていた。

「そろそろ良かろう？ その程度の縛呪は、自力で解除されよ」

「——え？」

キョトンとする女の前で。少年は、す——と、尖った耳元に、軽く素早い動作で手を当てると。

「あらイヤだ。随分甘い処罰をするのね、こんな悪いコに」

ずっとその耳につけていた同時翻訳機を外した瞬間に、目に色が戻った少年は。女から剣を取り返し、その切っ先を瞬時に女に向けていた。

「その器械が術の媒介だったのね。言霊を確実に届ける呪い、なるほど、巧いわね」

「……動くな、裏切り者」

翻訳機を外した事で、女が何を言っているのか理解出来なくなった少年は、ただ冷たい青い目で女を観通す。

『銀色』殿。お主が手を汚す必要はない。誘いだけお断りし、早いところ、御所に戻るのじゃ」

「……」

「まだ体調は戻っておるまい？ それにお主は——初めから、陽炎殿を殺す気はなかったはずじゃ」

少年はちらりと、少年を案じている公家を肩越しに振り返り、その敵しい目に、無機質なだけの視線を向けると。

「……そうだな。こいつは——」

殺さなければいけない。既に定まった結論を実行しない理由。

「俺の獲物じゃ——ないからな」

その因である、青白い剣を侵す昏く赤い夢を思い。何の感情も無い声で、それだけを公家に伝えていた。

「でも——」

そこで少年は、再び女の方に向き直ると。

「アイツの相手は、俺の役目だ」

新たな護衛と言われながら、剣を向けられている女を特に、かばう事もない覆面の相手ではなく。

「……!?!」

その場に突然、少年と女の間割り込むように、降り立った

——このタイミングで現れると、とつくに気が付いていた敵に。

驚く公家に構わず、少年は一跳び分の距離だけ後退すると、長物の武器を持つ何者かに、改めて剣を向けていた。

「——やあ。君が、頼也兄ちゃんの言ってた『剣の精霊』？」

にこにここと、一見は優しいながら、不敵だけがたたえられた笑みで、その青銀の何かは少年を見据える。

「もしくは『刃の妖精』かな。どっちでもいいけど、あんまり兄ちゃん達の近くで、不穏な事はしないほしいな」

「……アラス殿——」

ざり、と公家は、女を守るように間に入った者——淡い青銀の短い硬質の髪と蒼く鋭い目を持って、上半身を黒く首まで覆う上衣と、長く軽装な上着を着こなす人影を厳しい目で見る。

その、男とも女とも知れない、ある人形の護衛とそっくりな、端正な容姿の持ち主である青年は、

「やっほ、頼也兄ちゃん」

いつも通りの笑顔で、そうして青年は公家を見た後で。

あまりに唐突に——その裏切りを宣言していた。

「悪いけどオレ、こっちのお手伝いをしないとイケなくなつて。

邪魔しないなら、兄ちゃん達には何もしいけど、こいつらのお願いを聞かないやいけねえだよね」

だからとばかりに、笑って銀色の髪少年を見る青年は——後ろの女が望む通り、少年を連れていこうと言わんばかりだった。

「……クラル殿から、連絡が来ている」

『守護者』としての公家の仲間である、他の守護者の名前を口にする公家に、同じ守護者たる青年は、フ——と笑う。

「南の地でお主が何をしたか——クラル殿も、直接に目にしたわけではないと言うが。お主は……——」

「まあね。兄ちゃん達の所は大丈夫だったけど……残念ながら、オレと、後ろの吸血姫の姉ちゃんと。後一人、クラル兄ちゃん

にとつてはそーだな……下手したら姪っ娘ちゃんと言える奴が、こっちのヒト達が求める——『資格者』らしいんだよね？」

そして、女の傍らに佇む覆面の誰かを害したという青年は。その時には、姪らしき少女には手を出さなかったというが、

今後はそれも標的として既に定めていた青年であり。

「でも、悠夜君くらい強いと、それも欲しいって言ってたけど。さすがに諦めるよーに交渉しといたから、安心してよ♪」

「……アラス殿……——」

さらりと青年が口にした事が——公家達に対する、この青年の変わらぬ信頼と。同時に窮状を表すと、それだけで悟った男は、心から厳しく……痛ましがな顔で、青年をまっすぐ見返した。

「お主はそれで、良いのか……アラス殿」

今も公家達、旧知の仲間への揺らが無い思いを持っていながら。彼ら全てに背を向けると宣言する青年に、ただそれを尋ねる。

「イイわけないけど？ 頼也兄ちゃん」

青年はそこで、とても不思議そうな顔をして笑う。

「今は翼権だつて、とつくにわかっているのに。まだオレの事、その名前で呼んでくれるんだね、兄ちゃんは」

「……………」

銀色の髪の少年と同じく、少なくとも二つの己を持った誰かは。それ以上は何も口にしなくなった公家に——一瞬だけ悲しげに笑いかけた後で、公家の動向をずっと窺っていた少年の方へと楽しげに笑い、改めて振り返った。

「驚いたな。オレ一応、死神って仕事をしてるんだけどさ？」

「……………」

「オマエは仕事とかじゃなくて、天性の死神だね。オレなんて可愛く見えるくらい、血の匂いが漂ってるや」

少年程ではないが、現状把握に長けた力を持ったその青年は、あっさりと赤まみれの少年を看破し。

そうして青年は。何故かすつと、降り立った時は構えていた武器を、何処ぞへ消失させてしまった。

「オマエを今連れてくと、頼也兄ちゃん怒りそうだし。それに—— 鶴ちゃんにしてやられたな。当然あいつ、動けなさそう」

「——!?!」

少年が聞き逃せない名前を口に、しかし青年は。

軽く水平に掲げた手から、視界を閉ざす強く濃い霧を唐突に発生させると、女と覆面の人影を全てぼやかしてしまった。

「それじゃーね。またどっかで会おうか、『剣の精霊』」

「っ……………」

体力の消耗に、立っている事も精一杯の銀色の髪の少年と、大き過ぎる力の差を見せつけるように。

少年との敵対を宣言し、三人もの生き物を易々と転移させ、その場から去っていった——今代の黒の守護者だった。

「……………」

ぺたんと、金色の髪に戻った少年が、胸を掴みながら膝をつく。

「大丈夫か、ユーオン殿」

「…………ヨリヤ…………」

耳に翻訳機を再度装着した少年を、心配そうに見下ろす公家を、少年は何処か——泣き出しそうな顔で見上げていた。

「……お主がそのような顔を、する事はないのじゃよ？」  
少年がどうしてそんな顔をするのか。自ら以外の苦しい何かを、自らの事と感じてしまう少年に、公家は困ったように笑う。

「幻次以外には——アラス殿の事は、黙っておいてくれ」

「……………」

その青年が度々連れ回した事のある、子供達の姿を思い浮かべ。そう告げる公家に、少年は黙ってコクリと頷いた。

「アラス殿は決して——わしらの事は害さないであろうが」

「……………」

「お主と、クラル殿の姪とやらに関してだけは別のようじゃ。あえて標的を告げていったのも、実にあやつらしい」

それは、青年の信条と覚悟であると、公家は痛ましげにする。

「お主が御所にいる間は、アラス殿も手出しはしないじゃろう。しかし……そこから先は。アラス殿が本気ならば、わしらにも止められるかどうか——」

「いい。ヨリヤ達には関係ないだろ」

「……………」

即答した少年に、沢山の守る者を持った公家は沈痛を浮かべた。

「ジュンもユウヤも、ツグミも誰も巻き込まない——ヨリヤが認めてくれるなら、すぐにでも出て行く」

「ばか者。お主の観察期間は無期限じゃよ」

こちらも即答する公家は、しかし。どれだけ少年を引き止めたところで、今の状況が長く続かないだろう事はわかっており。そのために、黒い目の奥に大きな痛みと憂いを宿す。

「お主の行くべき場所が見つかった時には、止めはしないが。そうでなければ、そんな簡単に、御所を出る事など許さぬよ？ お主はわしのいる所で——ヒトを傷付けたのじゃからな」

「……………」

これまで誰も口にしなかった——しかし本来在るべき咎めを、ともすれば生まれて初めて、その少年は耳にする事になった。

「ユーオン殿。ヒトを殺すのは、いけない事じゃよ」

「……………」

「たとえどんな理由があつても、その事に変わりはない。今はそういうご時世なのじゃ。お主が何者であつても——今ここで生きる以上は、それは肝に銘じられよ」

「……………」

それは少年が、どの地で生きていようと変わりはないと。

「同じように……お主が自らを殺して生きる必要もないのじゃ」  
本来——そうした運命を望んだわけでは決して無くて。

どれだけ痛みしかなかった道でも、そう生きていくことしか自らの役割を見出せなかった天性の死神を、知るわけではない公家の言葉に……少年はただ、目を伏せる事しか出来なかった。

何故ならそれは。公家自身がそれを——叶わない事と誰より知りつつ、祈るような心で。少年の身をただ案じるがために、あえて口にした綺麗事だった。

この少年は決して、その必要の無い流血など、起こした事はないだろうと。周囲の誰もが無意識に感じ取ってしまう程……いつも穏やかな顔で、少年は優しげに笑っていたのだから。

「さあ。御所に帰ろう、ユーオン殿」

こくりと、黙って頷く少年の手を、優しくとった公家だった。

\*

赤い髪の少女の初舞台の日、公家と少年の周囲で、そうした出来事があったのを知っているのは。最終的には、当事者と、公家の姉夫婦だけとなるのだが。

「こつちも大変だったぜ。何があったのか、蒼潤と櫛は何故か、覚えてないらしいんだがな」

公家に背を向けた青銀の髪の青年と、生き写しの姿の人形に、娘の公演先で出会っていた剣の師は。難しい顔付きで、彼らが巻き込まれた騒動の顛末を、公家と少年に語るのだった。

「力を貸して下さい。山科幻次」

「——はあ？」

とても初心者とは思えない、危なげない娘の晴れ舞台の幕間に、楽屋に押しかけた子供達を扉の外で待っていた男に。

突然そうして、がっしり男の腕を掴んだ——つい先程まで、舞台上で娘の相手役をしていた、半分覆面の男装の麗人がいた。

「つてお前——何で、アラスそっくりなんだ？」

「その我が主との契約に反して、貴男方の子女の様子を窺う、不届き者がいます。護衛として見過ごせませんが、私は今は、表立っては動けません」

既に、次章の幕開けも迫って来ており。最初は少女単独シーンから始まるとは言え、出番の迫っていたその護衛は、

「私は遠い昔、貴男達の乗る船を沈めた海の竜です」

あつさりど爆弾発言を男に投げかけ。その舞台の高い天井側の、密に交差した梁の上へと、男を引きずっていったのだった。

「海の……竜じゃと!？」

「ああ。アラスが最近では面倒見てたらしいが、今アイツ、それどころじゃなくなったんだと、そいつも言ってたぜ」

男が高い場所に着いてすぐに、遙か下方の、袖にスタンバイしていた娘が、頭上の父親に気付いて顔を引きつらせる。

「つて——……人、形、だと——!？」

そこに男が連れていかれた理由——

たった一体の、大きな鎌を携える、一見小柄なシルエットが。

スポットライトより高い位置の、暗い梁の上では姿はあまりわからなくとも、確かに隠れ潜んでいたのだった。

「あの人形には、現在の制限ある私の力は通用しません。私が本来の姿をとれば、この劇場ごと崩壊します」

護衛はそうして、淡々と爆弾発言を続ける。

「貴男程の手練れでないとなれば対峙出来ません。貴男の剣も通用するとは思えませんが、とりあえず牽制して下さい」

「何だそりゃ!？」

「実力の問題ではありません。そうした防護壁を、あの人形は身につけているのです」

そこで一瞬。黙って師の話聞いていた少年に、束の間でも強い頭痛が何故か鋭く走っていた。

どうすれば謎の不審な人形に、騒ぎを起こさず対応出来るか、男が悩む傍から二幕の幕は上がり。

眼下では、膝上までのふわりとした服と長い靴という衣装に身を包んだ少女が、突然の見せ場から後半を開始していた。

「何者です！？ 私をデイレス王女と知っての狼藉ですか！？」

男よりも少し下、梁から吊るされたワイヤーを行き来する、

風船で出来たいくつもの中型サイズのセットに、少女は叫ぶ。

少女にとってはまさに、視線の先に、真の不審な人影もあり。

舞台としては、敵対者の畏で護衛から引き離された王女が、窮地に陥るシーンだった。

「つて——！」

ゆらりと、梁の上の人形が、そこでついに身動きを始めた。

「私はこの後、舞台に飛び降りて登場しなければいけません。

後はよろしく頼みました、山科幻次」

「ちよつと待て、無茶ぶりにも程がないか、アラスのそっくりヤロウ——！！」

そのまま本気で、護衛はその高さから、事も無げに下方へと降り立ってしまい。暗い梁の上という足場も心許ない場所で、相手の姿もろくに見えない中で、大きな鎌と飛行能力を持った人形が男へと襲いかかってきた。

一方で。楽屋の外にいたはずが、何故か姿を消した保護者に。

兄弟子、その弟、友人の帽子の少年の三人は、子供達だけで元の観客席に帰ろうとしたところで——

楽屋のある裏側から、一般の通路へと繋がる長い廊下で。

兄弟子曰く、何故か思い出せない不審な何者かに、子供達は喰わしたと言う。

「——いや。久しぶりに、何か凄く充実した時間だったはずの気はするんだけどな」

「ジュン……何でそんなに、何かいい顔してるのさ？」

後の子供会で、少年は兄弟子とその弟から、そちら側の話も一応しっかり聴き回っていた。

「ユウヤはさすがに、何があったか覚えてるんじゃないのか？ クヌギとジュンは、どっちもあんな感じだけど……」

「……………」

じーっと。珍しく膝を抱えて座る子供は、何処か心許なげに、何故か黙って少年を見つめる。

そんな子供の憂い気な姿に。誰かの事を我が事と観る少年の脳裏に、僅かに浮かんでいたのは——

謎の不審者。黒い邪気を持つ者だと実の兄が食ってかかり、激しい剣戟を、狭い廊下で行った二つの人影と。

子供と共に後ろに下がりながら、戦う二人の優れた剣技に、我を忘れたように見惚れる帽子の少年の姿だった。



「……ダメだよ？ そのの、とっても、鋭い子供君——

一しきり不審者は、子供の兄と剣技を交した後で、全員から一度距離をとって離れると。

——見て見ぬふりは良くないな。私が誰かわかつてるなら……—  
と言つても、と。黒い不審者はくすくすと、元々強い霊的な  
感覚を持つ己以上に、鋭いとわかつていた子供に笑いかける。

——それを言い出すと……君が何人いても足りないだろうけど——  
見えている事全てに、その子供に手を出せと言うのであれば。  
あまりに酷な事と知りながら、そのカギをあえて不審者は回す。

「ユウヤ……何か、嫌な事、あつたんじやないのか——？」  
「……………」

口を引き結んで黙る子供の前で、視線を合わせてかがみ込み。  
誰かを映す特性を持つ少年の憂い顔に、子供は更に黙り込む。

——残念だな。隙間はあるけど、君には介入出来ないみたい——  
入り込めはしても、あまりに力の差が大き過ぎると。

心から憐れむように、その黒が最後に——ごめんねとだけ、  
申し訳なさそうに子供に笑いかけていた姿を。

少年に悟られない事。そのために己を閉ざす子供だった。

その黒い何かの願い。

——あの子のこと——……忘れてほしいの……—

いつかいなくなるとわかっている誰か。

その時に何も、禍根を残す事のないよう……誰かに関わった  
子供達から、それは忘我のカギを集めてまわっていた。

その別離は誰にも、変えられる事ではなく。

だから誰かもそれを望んで。ただ彼らを傷付けないため——  
そのためだけに、彼らにほんの少しだけ関わった何かであり。

そしてそれは、この少年には。その実態を知ってしまったえば、  
命を削つても、看過出来ない事だろうとわかつていた子供は。  
それを避けるために、一人で口を噤む事にした顛末だった。

「結局、ゲンジもジュン達も、ツグミの舞台……まだ最後まで、  
しつかり観れてないんだな」

何度となく、その通し稽古は目にしていた少年だが。本番を  
観に行く師との約束は当然覚えており。

「あのなあ。とりあえず舞台を守った俺を褒めろって」

足場も視界も悪い中、不審な人形の攻撃に応じ、しかし真下の  
舞台に影響を出さないように見事に戦い切った剣の師は。

その結末が不服で、未だに不機嫌さを隠せない様子だった。

その後半の幕が上がるやうに。赤い髪の少女には、最大の見せ場で、また最大の問題シーンから舞台は始まっていた。

「何者です!? 私をデイレス王女と知つての狼藉ですか!?!」  
表情は凜としつつ、叫ぶ少女の頭上に、ワイヤーを介して一見縦横無尽に怪鳥型の風船が舞台の空を駆け回っていた。

「ああ!? 何なのでしょう!? あの化け物の群れは!?!」  
「王女、これは罠です、お下がりにください! 護衛長がいない以上は、私達を犠牲に逃げ延びて下さい!」

ばつと少女は、無力な二人の侍従を逆に、かばうように前へと進み出る。

「何を言うのですか! これしきで怯む私ではありません!」  
そこにすかさず、演出としてスポットライトの色が赤く変わり。

あらかじめ決まった位置に、怪鳥からの攻撃として、空から矢のような小道具も降り注ぐ。

「あのような卑劣な化け物に、明るい未来などありません!」  
その時まさに、梁の上では少女の父が、ぎりぎり謎の人形と、鎌と刀の鏢迫り合い中で。

「——撃ち落とします! 貴方達は下がっていなさい!」  
梁の上から落ちそうに見えた、父の姿に。

せつかく偽物でと頼み、少し残念ながらも、与えられていた小道具の拳銃を瞬時に、少女は出て来た袖に投げ入れていた。

そのシーンでは、怪鳥風船に対して、弾の込められていない空砲を撃つはずだったにも関わらず。

銃声の後、怪鳥がワイヤーから落ちるのも手筈通りだったが。

「な——!?!?!」

梁の上で少女の父に、大きな鎌を振りかぶろうとした人形は。舞台という有り得ない場所からの、突然の——本物の銃撃に。

その躯体の関節をしっかりと、数カ所も見事に貫かれていた。

「——何者だ!? 我が君に手を出す輩には容赦しないぞ!」

梁の上から、いくつかの箇所を経由し、出番ぴったり舞台にそこで護衛が降り立ち、少女はすぐに拳銃をしまっていた。

「まさか……ツグミ……」

関節が破損し攻撃能力が低下し、そこで人形は去つたと言うが。

「小道具が暴発したんだと。そんな危ない物をヒトの娘に……」  
ひたすら不服気な師に、少年はハハハ……と苦笑う。

「えっと。小鳥、ちゃん……?」

後に、無事に初日の舞台が終了した後。袖に控えていた黒髪の花形は、茫然とした様子で語つたと言う。

「もしかして……本物、持つてるの?」

袖に投げ入れられた本来の小道具を片手に、尋ねた花形に。

「いいえ? と少女は、目を逸らして小さく答えたらしかった。

そうして始まった、旅芸人一座の珍しい大きな公演期間は、赤い髪の少女の公演が無い日は、他の花形がメインの舞台が内回りで、少女は外回りに入るローテーションが、その後の、千秋楽まで続き。

内回りの日は、師と少女の舞台の応援を。外回りの日は供を、まだ本調子でないながらも、少女についてまわった金色の髪の少年だった。

「ああもおー。小鳥ちゃんつてば、もう十年前からうちにいてくれたんじゃないかってくらい、はまり過ぎ可愛い過ぎー」

「……うん。ツグミは本当に、キレイだと思う」

何故か、黒髪の花形の近くにいると、少年の回復は妙に早く。千秋楽の頃には、むしろ好調なくらいの少年だった。

「本当に残念だわ。しばらくジパングには来れないと思うし、かと言ってあんなに可愛い御嬢さん、今下さいなんて、とても山科さんには言えないなあ」

「……………」

そして花形は、何故か困ったような顔で少年を見て微笑むと、「君も無理しないでね。何かあったら、いつでも相談に来て」

「……相談って、何を。……何処にさ」

「ディアルスまで来てくれたら、何だかんだで私達の情報は、何処かに入るし。少し待ってくれたら、ちよくちよく帰るから」

一応、本籍はディアルスで、自宅もそこにあるらしい花形は、連絡先を書いたメモを少年に渡してくれていた。

「——さあ！ 今日ぱーつと、打ち上げに呑むわよ！」

「……………」

その予定はわりと早くから、剣の師と花形の間で、千秋楽の夜にと約束された、十四歳以上限定というまた微妙なラインの会合なのだった。

黒髪の花形、護衛の人形、マネージャーの黒い女。

剣の師、師の娘、兄弟子、少年、そして帽子の似合う少年。

何故かその八人で、小ぢんまりした座敷を借りて、千秋楽までしつかり、飛び入り座員を演り切った少女に賛辞を贈る。

「うわああん……小鳥ちゃんがもういなくなっちゃうなんてえ……山科さん、明日から私、何を癒しに生きていけばいいの？」

「すまねえ。けれどこればかりは、我慢してくれ」

すっかり花形の聞き役になっている師の横で、兄弟子と護衛の、謎の会話も交わされている。

「何だ。アラスの奴、当分ジパングには来そうにないのか？」

「主がこの先、貴方達に何か仕出かすなら、私にご連絡下さい。その時は遠慮なくぶち殺して止めるよう命じられています」

事情を知らない兄弟子は、よくわからないまま、適当におうと頷き。至って本気らしい『力』の人形は、そのために宿主から独立させられたのだと、無表情に杯を含むのだった。

「櫛君、色々お手伝い助かりました。櫛君はなかなか、意外に出来るオトコですね？」

「えー、こんなくらいで良ければ、いつでも言うてよ♪」

マネージャーと帽子の少年は、何故か期間中から何かと話している姿が多く、体よくお人好しの少年を、こき使ったのだろう黒い女だった。

「それにしても、やっぱりスカイさん、誰かに似てるなあ？」

「そうですね。ちよつとヒントをあげてしまうなら、私のSは、

シーちゃんのSなですよ？」

スカイ・S・レーテと名乗る黒い女は、帽子の少年と話す事が楽しいらしく、あつさりそんな本質を口にするが、

「え？ シーちゃんって何だっけ？」

至って真つ当な感覚の持ち主の帽子の少年は、既にそうした、他愛ない話を覚えているわけもなく。

その話し主は残念ながら、目の前の誰かしか見えておらず、隣のそんな話を全く聞いていなかったのだった。

「……あのさ、ツグミ」

「——？」

ぐいっと。普段から食が細いわりには、お酒は妙に進む金色の髪の未成年が、杯を片手に、赤い髪の少女を伏し目がちに見る。

少年は、真面目そのものの、苦い目付きと硬い声色で――

「……はしたないのは、良くないと思うによる」

「——はい？」

全く唐突な謎の語尾に、聞き違いかと目を丸くする少女の前で、  
「ツグミは今のままでいいと思うによる。特別変わったことをしなくても、ツグミは十分いい奴だによる」

「ユーオン……アンタ、お酒入るとそんな喋り方になるの？」  
顔色もテンションも、普段と全く変わらない少年であるのに。  
何故か、語尾だけ変調を来したその状態に、わけのわからない少女はとりあえず杯に続きを注いでみるのだった。

王女と護衛の温泉物語。

少女が今日まで演じていた、鳥の名を持つ若い王女は――

その金色の髪で赤い目の王女は。辛い経緯の後に得た、その豪脚以外は特に、これといった取り柄があるわけではなかった。

ただ、その王女はとにかくバランスが良く。

「ツグミは全部を大切にすから、何でも出来る奴だから……それはツグミ自身が、もっと褒めていい事だと思うによる」

自らのささやかな長所の、一つ一つを大切に出来る王女は、周囲にも同様に接する事で、大きな人望を得た王様だった。

「何で今日は、そんなやたらに褒めるのよ？ ユーオン」

「……だって……」

その王女が生涯大切にした――王女たる羽をくれた黒い鳥は。王女と違い、様々な特技を持ち、それでも優しい鳥だったのに。

自らに厳しく、危うげな黒い鳥と、王女が両方少女に重なる少年は。古い約束を思い出せずに、ただ少女を見つめていた。

野山に潜む木の実のような……優しい色の、小さな赤い鳥。その少女を初めて見た時に、少年の脳裏に浮かんでいたのは、そんな確固とした——しかし何処か、赤にして赤らしからぬ、鮮やかでありながら穏やかな光景だった。

赤は本来、温かい色だと。

自らの事を覚えていない少年は、それでもそうした根本的な感覚は、ずっと変わっていないはずで。

赤い目を持つ者には、理由なく安心してしまう所があったり。

遠い昔、今は思い出せない何時かに、赤い呪いを受けた時に。

その呪いの存続を願い、今も呪いへの親和性を持つ少年は——

「……俺と違って。鶉のは、キレイな赤だから……」

「——？」

元は、透明度の高い青に生まれた誰かは。後から赤にまみれる事になり、今では自身が何者かわからなくなったせいかな。

「そのまま——……キレイでいてほしいんだによる——……」

「……かなり酔い、まわってない？ ユーオン」

ぺしっと。座敷の上で丸まって寝付いてしまい、そんな寝言を口にする金色の髪の少年を、困惑の赤い顔ではたく少女だった。

そうして一しきり——色々な誰かが、珍しい話を交した後で。

「——あれ？」

子供が多かったので、そう遅くない時間に会合はお開きとなり。御所に帰り着いた時には、父の背で眠っていたはずの少年は、少女がその後の様子を見に、居室を訪れた時には影形なく、何も無い淋しい和室が広がっていた。

「……何してるんだか。こんな時間に」

そして真上の屋根の方で。不思議な気配を感じた少女は——

特に苦も無く、その瓦の屋根へと少女が降り立った時。

青白い月明かりの下で。滅多にない光景が、その銀色の髪の少年を中心に、少年を取り巻くように広がっていた。

「…………言霊の、お札？」

少女が以前、少年に渡していた幾枚もの札が、今は一つ一つ、元々込めた言霊ではなく、違った力で少年の周囲を舞っており。

「あの白い光も、載せたお札もあるみたいだけど……」

その大半は刃物のように鋭くなった、紫の光を帯びたお札で。座り込んで夜空を見上げる少年を守るように、ハラハラと舞い。

暗く青い時雨の似合う透明な剣が、浴び続けた赤の洗札に、

いつしか溶けたような……哀しく鋭い少年を映す紫の光だった。

護符のそういった使い方を、教えたのは少女であり。体調が

良い時に試してみたらしい、戦いに生きる銀色の髪の少年に。

舞い散る紫の鋭いお札が、一通り落ち着いた後で。

こんばんはと——少女は自ら、少年に声をかけたのだった。

「アナタ……名前はあるの？」

「……………」

月の光の下で後ろ手を組んで佇み、淡々と訊く赤い髪の少女に、銀色の髪の少年は僅かに目を丸くしたようだった。

……と。屋根に両手をつき、膝を立てて座る少年は、少女をしばらく見上げ……しきり声を吞んで黙っていたものの。

「……………キラ」

ためらった理由もわからないまま。それは思い出していた、大切な名前を無機質に口にした。

——何だ、と。呆れたような困ったような、不思議な声色で、

少女は自身と同じように無表情な少年を、まっすぐに見る。

「やっぱり一応、別人なんじゃない」

「……………」

二つの色の髪を持つ少年は、少年自身には同じであっても、違う意味を持った何かなのだと、そこで悟るように。

そして根本的な問いを、少女は柔らかい無表情で投げかける。

「どうしてユーオンに、自由にさせないの？」

「……………」

「キラが独り占めしてるんじゃない？ 力も体も……アナタ達二人の記憶も、ずっと」

その『剣の精霊』の手綱をとるのは。日頃、顔を出している表向きの存在の誰かではなく——

それはただ、体の自由も能力もあえて制限された『力』が、それと知らず、誰かの制御下で動かされているだけなのだ。

「それじゃユーオンが……『銀色』の制御なんて、出来る日は一生来ないでしょ」

「……………」

そこまで意識して、在り方を決めていたわけではない少年も。

銀色の髪の誰かはただ思う。もしも、この少女達の前で——少女が言うように、自らの『力』を全て解放してしまったら。

「……………俺は……………」

「…………？」

ようやく、何かを応えようとした誰かに、軽く少女は息を飲む。

「俺は、あんた達の前で……………」

誰かはただ困ったようにそこで微笑み、自然にそれを口にした。「あんた達の前では…………俺は死にたくない」

「………………………」

その時の穏やかな少年の顔が。

その願いが誰かに似ていると、そこまでわかったのに——

人よりとても強い感性を以つても、それ以上は汲み取る事が出来なかった少女は、何も言えずに言葉を吞むしかなかった。

そして少年は、そんな事はどうでもいいと、あっさり己の救難を捨て去り、

「でも——殺さなくちゃいけない奴がいるんだ」

「——え？」

「そいつを殺さないと、あいつはきつと……連れていかれる」  
彼らの共通の敵を描いて。無機質な目で、全ての表情を消して。  
今この少女と話したいと願った、最大の悩みを口にした。

「でも俺は……そいつを殺せないんだ」

「……………」

「それがどうしてなのか、わからなくて」

ただ彼ら両方が知る、ある誰かのために、それを問いかけた。

「鶯なら——わかる？」

「……………」

ある痛みを呑み込み、欠け過ぎている声に少女は当然。少年が  
何を訊いたのか、わかるはずはないと知っていても。

それでも少女は——少女なりの、確かな答えを口にする。

「何を言ってるのか、私にはさっぱりわからないわ」

「……………」

「どうしてキラは……誰かを殺せない事を、悪い事と思うの？」

それが万一——どれだけ必要な事であったとしてもと。

「殺したくないって。どうしてそう思っちゃダメなの？」

少年自身が気付いていない、本当に答えのほしかった葛藤に。

それだけはわかった少女は、痛ましげにその答えを伝えた。

「……………」

いつかそれを——その答えを何処かで、確かに誰かから。

同じように伝えられたはずの少年は、少女をまっすぐ見上げ。

「……そう思っても……良かったのかな——……」

それがたとえ、この少年の終着を教える答えであっても……

「……キラは最初から、そうだったんじゃないの？」

そう言ってくれた少女に。ただ苦しげな微笑みを返していた。

それでも銀色の髪の少年は、無情に彼らの現実を伝える。

「俺はキラだから……きつとこれからも、ヒトを殺す」

「……………」

それが自らの役目と——少女を前にするからこそ、望む少年は。

「ありがとう——鶯」

「——え？」

「鶯のおかげで、殺さずに済んだ」

その時だけは、金色の髪の少年と同じように平和に笑って。

最後にそれだけ……銀色の髪の少年は残して去っていった。

「……………」

後には、金色の髪に戻って無表情に眠る少年だけがいて。

その少年を襲う青白い剣の夢を知らなくても。

少女はただ、バカとだけ。遠い誰かに向かって呟いていた。

C r y    p e r   B / A R .

—Atlas' regurgitation—

C 2 ・序盤    了

その——空ろという側面の名前を持った、黒い何かは。

ある固定した『意味』<sup>ちから</sup>に、遠い何時かに取り込まれた後。

その『意味』に長くふれていた事で、それと似た事が出来る、

ヒトの記憶を奪う性質を、後天的に持った旧い何かだった。

「——うん。蒼潤君、鶴ちゃんの、忘我は上々」

何かに熱中する。何かに茫然とする。相手のそうしたカギを、元々持っていた霊的な感覚で、何かは手探りで探し続ける。

「櫛君はやつぱり、意外に苦戦したな。チャンスは一番、沢山あったのに——蒼潤君の時にやつと、一緒にだものね」

最もそれが必要なものこそ苦勞するのだと、何かはただ笑う。

「悠夜君のは。まあ無理って、最初からわかってたけど」

カギを得て中に入り込めても、動かせないものもやはりあると。

「これでいつでも——この子達なら介入出来るよ、シーちゃん」

その三人の、誰かと同じ年齢の少年と少女——

誰かにとつて、最も自らの闇を知られたくない相手のカギを、探し求めた黒い何かは。望みはただ、彼らに何もしない事で。

「これで一步、リードって所か。どう出るかな？ 白夜ちゃん」<sup>はくや</sup>

その相手に彼らのカギを渡さずに済んだ事。それだけに微笑み……最も身近な昏く赤い夢を。しばらくただ、待ち続ける。